

圍棊獨習 第四卷

795.

Su 882i6



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

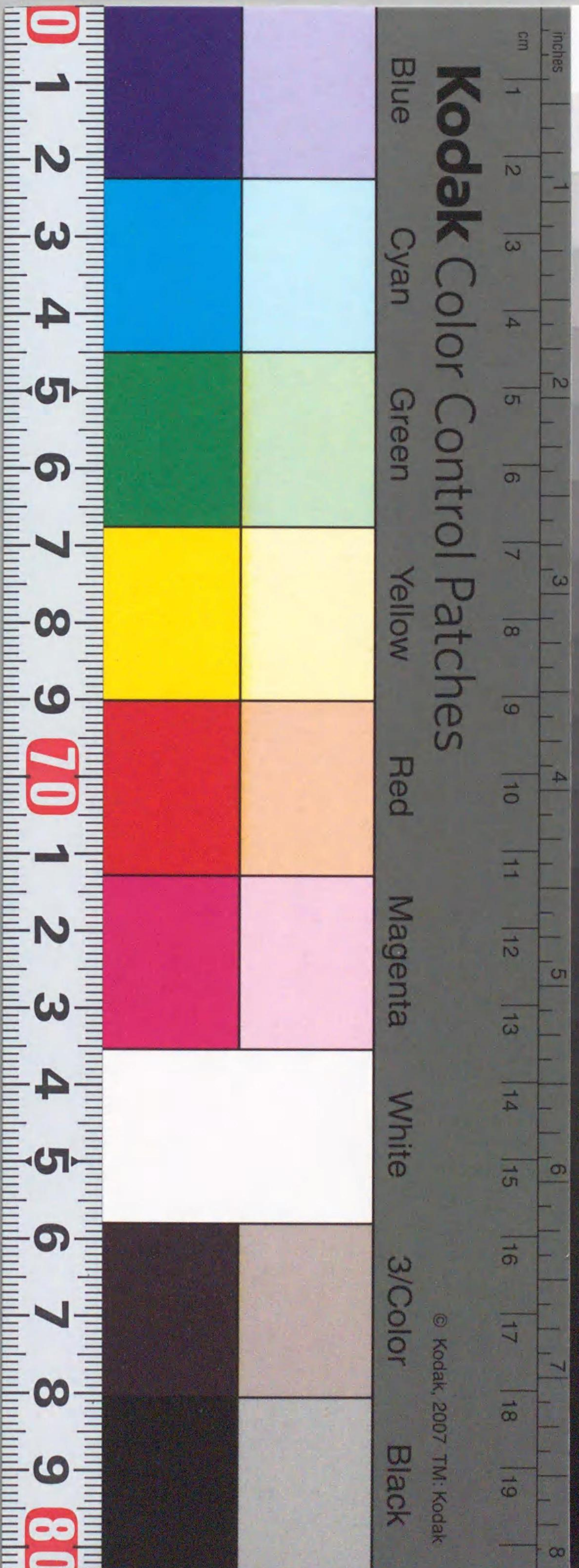


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





寄贈

瀨越憲作殿



617887

圍碁獨習 第四卷 目次

死活篇 (その七)

死	(一)
活	(四)
點死と活の廣さ	(七)
攻合とその種類	(二)
劫	(一九)
死活練習	(二三)

攻合、劫、押つぶし、追落、その他。十七目の實戰。

地取篇 (その三)

地の大小	(三五)
地の圍ひ方	(五一)
十一筋の盤面對局法	(六一)

基礎篇 (その五)

布	(七五)
縮	(八三)
夾	(八六)
拓	(八九)

應 打 掛

込

け	み	る
.....
(三)	(六)	(六)

— 第四卷目次終 —

圍碁獨習 第四卷

七段 鈴木爲次郎

死活篇 (其の七)

死

第四十八圖 (一) 白先黒死 白イの要所に置き、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホ、黒へなれば、白トに
 應けてハは缺眼、イ、ホは一眼となつて居ります。

(二) 白先黒死 白イ、黒ロ白ハに點、黒ニ、白ホ、黒へ白トに打つて、前と略同形であります。

(三) 黒先白死 白の手番として白活にするにはイと打つ手であります。故に黒から此石の眼を取
 るには、イに置き、白ロ、黒ハと打つて一眼とします。

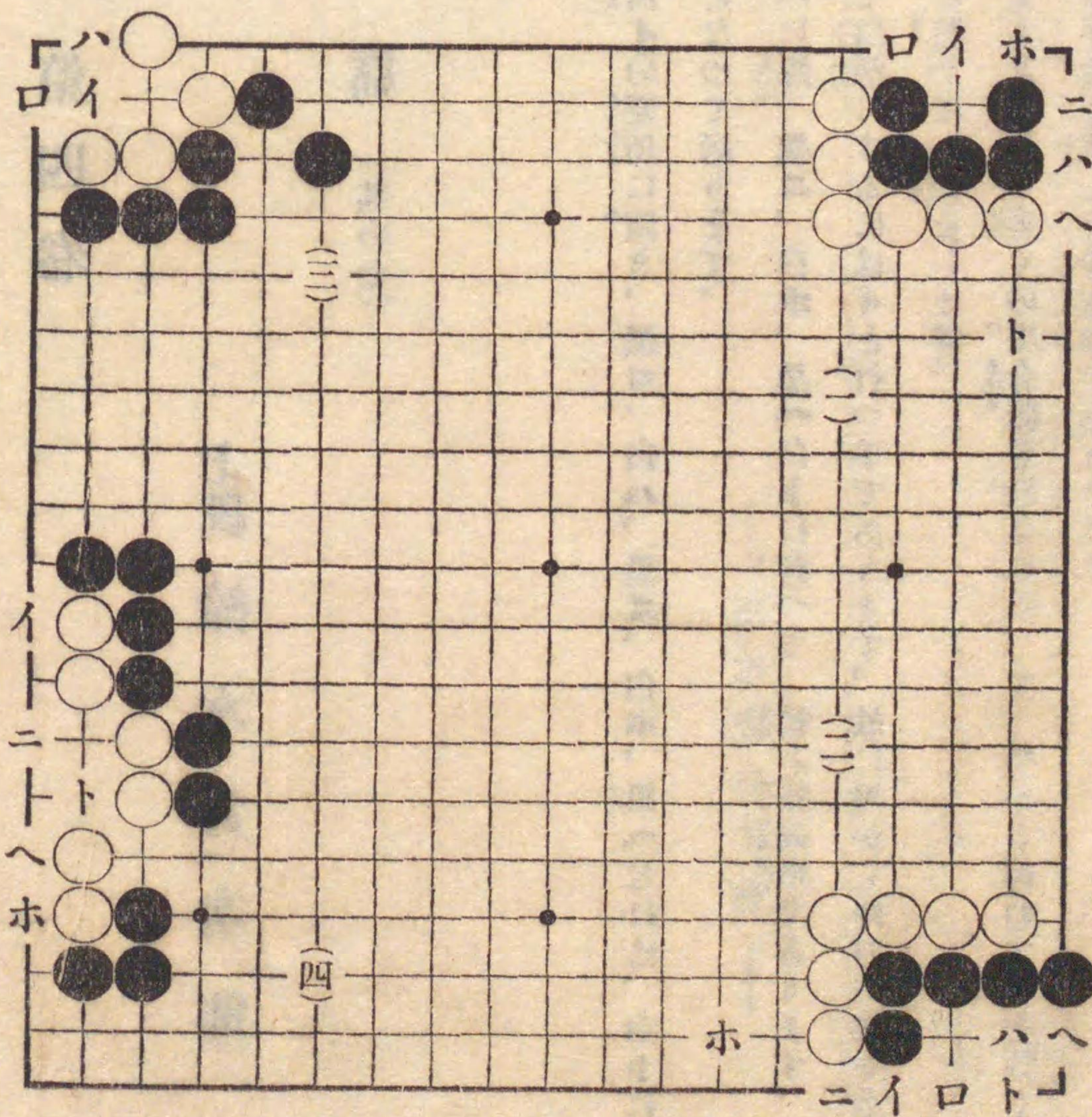
(四) 黒先白死 通常死は綽にありと云ひ、多くの場合眼を取るには、先づ外から綽ねて中を狭く
 し、次に中に飛込んで一眼とする手段を宜しとするのであります。

圖も其一例で、此形黒先イと縛、白ニ、黒ホと縛ね、白へ、黒トと最後に打込んで眼を取ります。

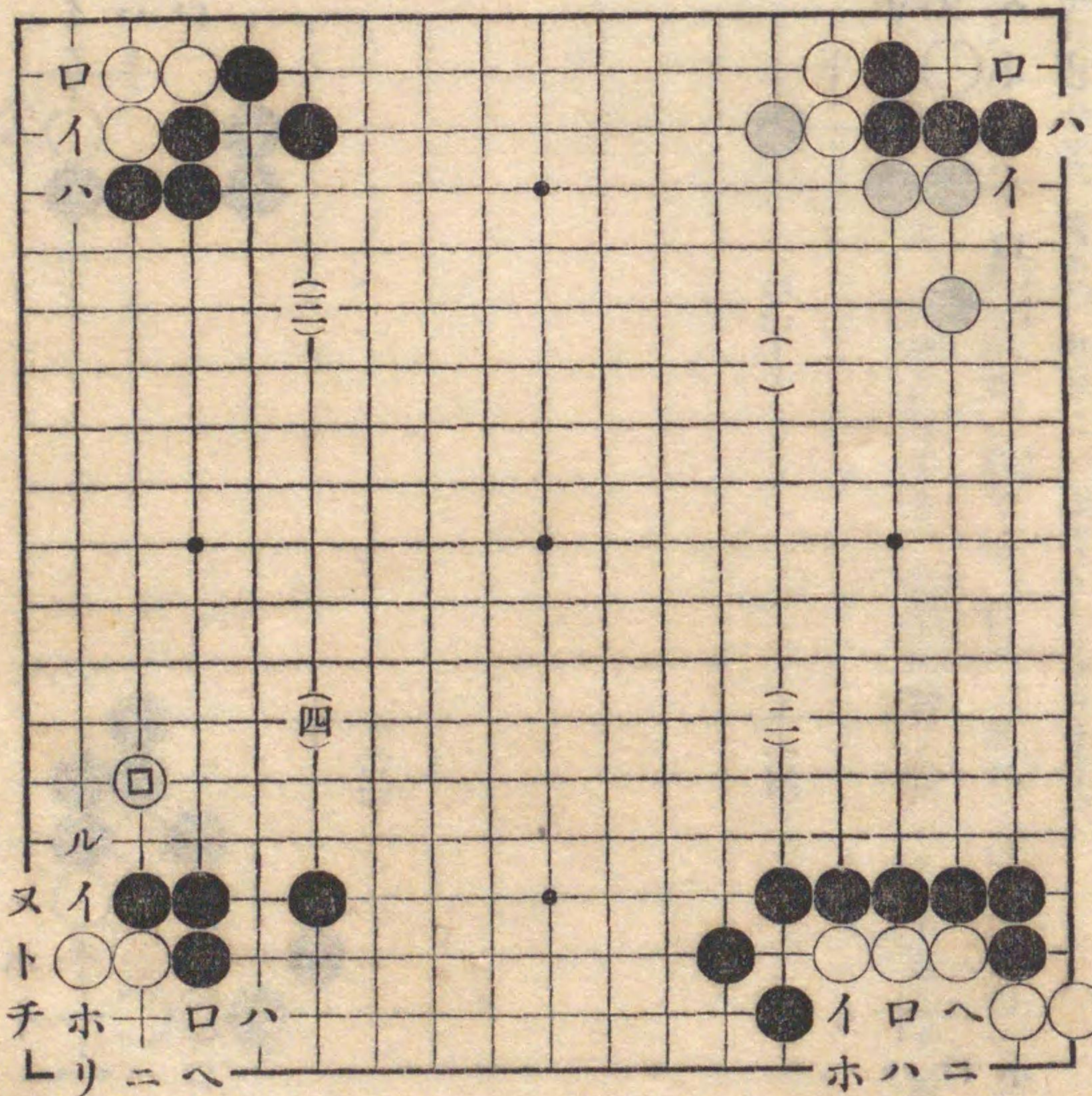
第四十九圖(一)白先黒死
白イに約へ黒死であります、次に黒ロと打てば前圖(一)と同形。又黒ロをハに下れば前圖(二)と同形となつて、何れも白先黒死となります。

(二)黒先白死 黒イに出、白ロ、黒ハに縛ね、白ニ、黒ホに粘ぎ、へを缺眼とします。ね、白ロ、黒ハと粘げば、白(三)黒先白死 黒先イに縛

死活篇第四十八圖



死活篇第四十九圖



に活路はありません。
(四)黒先白死 黒イと約へて、外の◎との連絡を絶てば内では白は二眼を作る手はありません。
扱此時、一、白ロに縛ね、黒ハ、白ニに掛粘げば、前圖(三)と同形となりて黒先白死
二、黒ハの時、白ニに掛粘ぐ手を、ホに打ちますと、黒ニ、白へ、黒ト、白チ、黒リ、白又、黒ルと打つて白死。
三、白ホを又に縛ると、黒ル、白ニに掛粘げば、同じく黒ホと打つて、白は一眼となります。

活

第五十圖 (一) 白先活 白

イと打ち、黒口、白ハに打つて隅は曲四目活となります。

(二) 此圖は白△にあり、

(一)は白△にあり、此石は活を得る價値に於ては共に同じ

でありまして、同じく白イ、

黒口、白ハ黒ニ、白ホに打つ

て、曲四目となります。

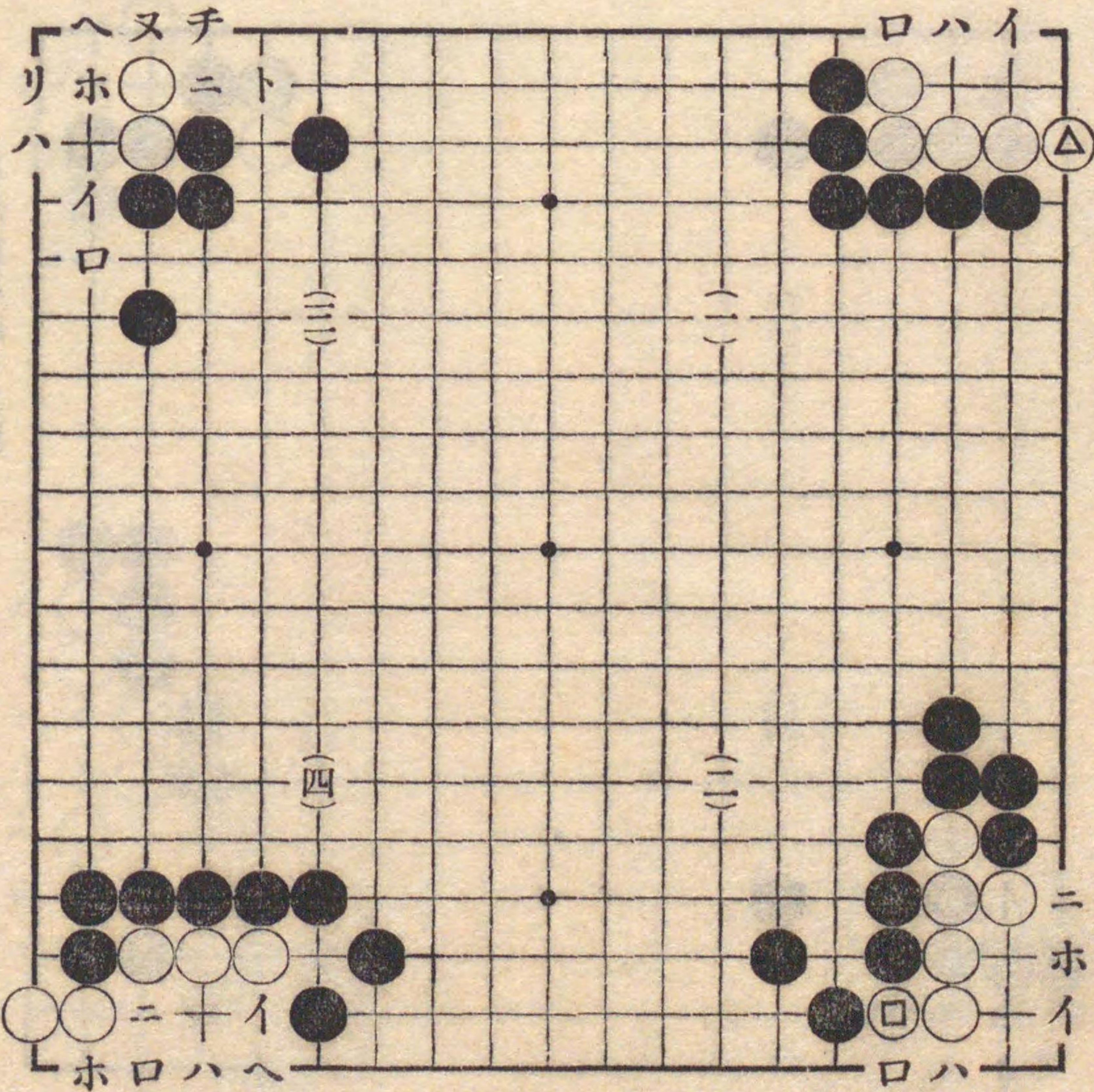
(三) 白先活 白イに縛、黒

口、白ハに打つて活となります。

次に黒ニに打てば白ホに

打つて活。又黒ニをホに打て

死活篇第五十圖



ば、白へ、黒リ、白ニ、黒ト、白チに打つて、又と、ホリに一眼づつとなります。

(四) 白先活 白イに約へれば、活となります、此時黒口に打てば、白ハ、黒ニ、白ホに打つて二

眼。又黒口の手をハに打てば、白へ、黒ホ、白ニ、黒口となるも、此形此儘で持(セキ)となつて居

ります。(持の部参照)

第五十一圖 (一) 白先活

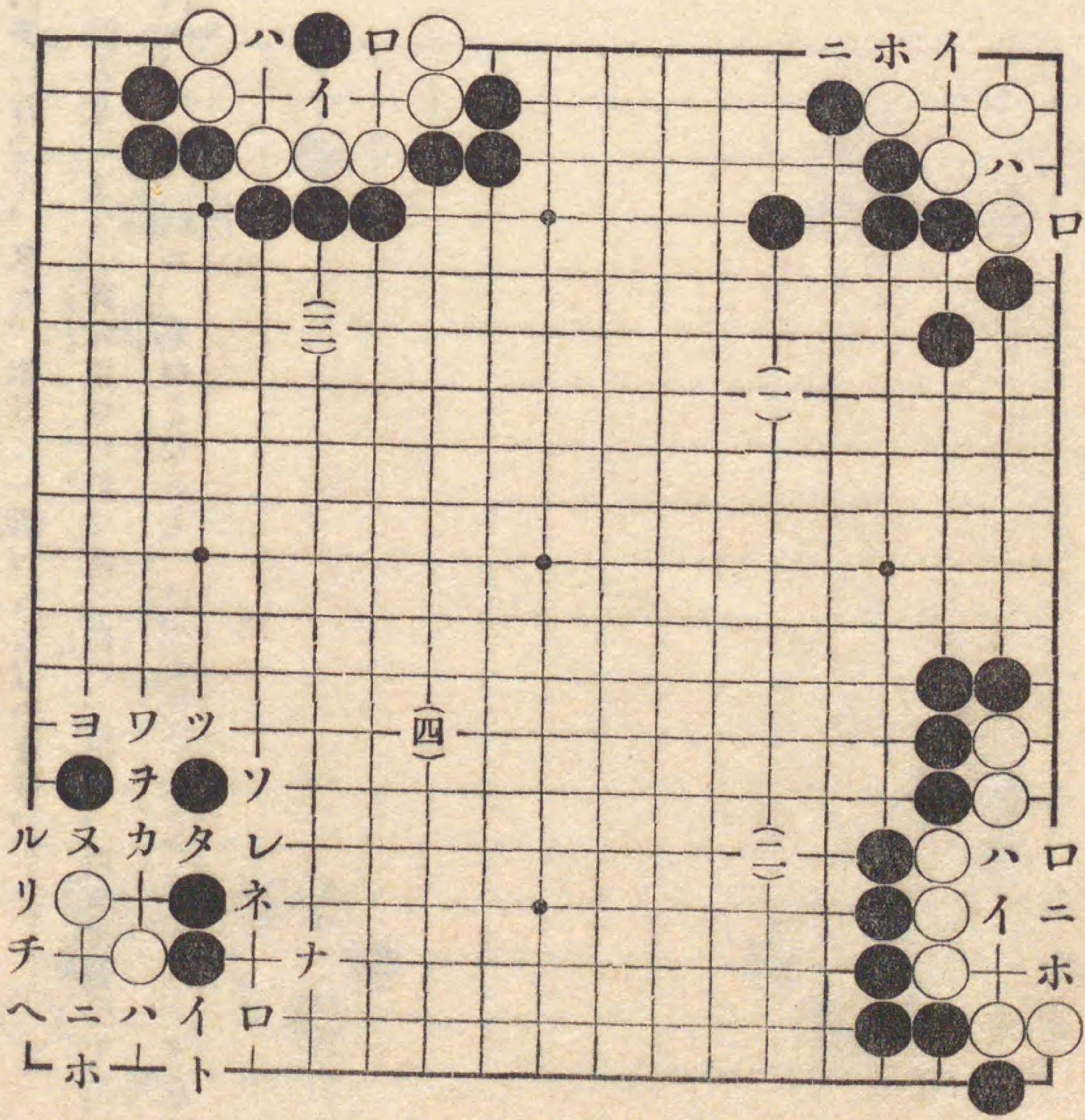
白先イに眼持、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホと打つて二眼となります。

(二) 白先活 白イと打つて二眼の形となります、次に黒ロなれば、白ハ、黒ニ、白ホと打つて活。

(三) 白先活 白イの突當り次に黒ロなれば、白ハ、又黒ロをハなれば、白ロに打つて二眼となります。

(四) 白先活 白イと縛ね、黒ロ、白ハと打つて活の形となります。然し之は斯くハと

死活篇第五十一圖



粘いで以下の變化が非常に複雑して居るので、此石の死活は、只黒の外圍の關係によるのであります。其變化を二、三記して見ますと先づ始め黒ニと打つ時は、白ホ、黒へ、白トと打つて、簡単に活となります。次に黒ニの置をトと下から縛れば、白ニ、黒チ、白へ、黒リ、白又、黒ル、白ヲ、黒ワ、白カ、黒ヨ、白夕、黒レ、白リ、黒ツ、白ネと打つので之は大層六ヶ敷變化であります。で若し初めに此方面に黒ナの邊に石があつて、堅くなつて居る場合は、隅の白は、黒トの縛によりて死となるのであります。

點死と活の廣さ

第五十二圖 既に外を圍まれて居る石の、其内部の組織の中の要所に飛込んで死とする、此手を點(ナカデ)と云ひます。

點の形を知るのは、死活研究の中でも、最も困難で又最も大切のものでありまして、多くの死は皆巧妙な點の如何により決せらるのであります。で此點の形を區別しますと、左の五つとなります。

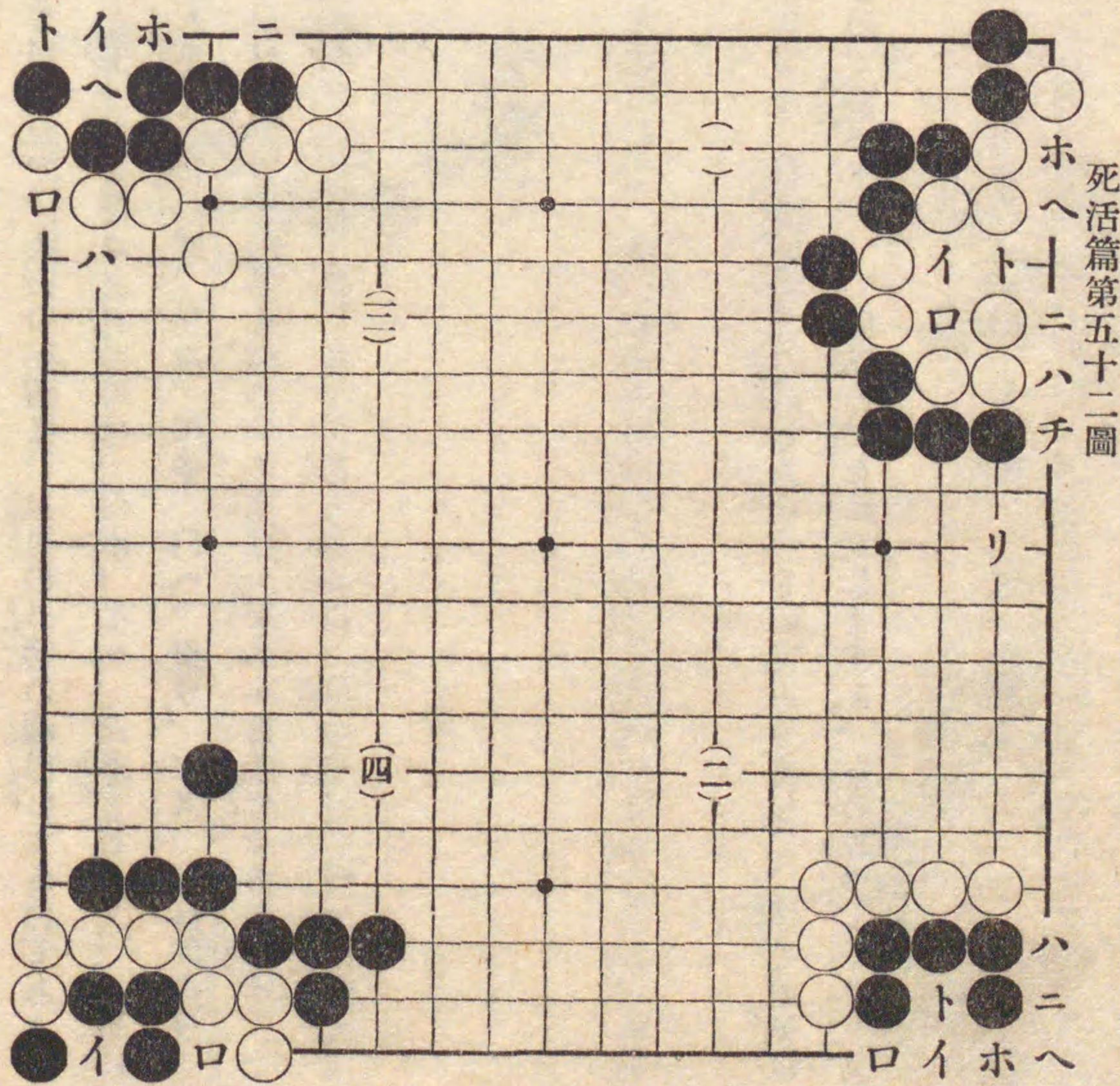
- 一、二目點
 - 二、三目點
 - 三、四目點
 - 四、五目點
 - 五、六目點
- 七目以上の形となると、點死とならず、皆活となります。で以上の二目から六目までの中、二目

三目は前にも説明した通り割合に簡單であります、點は其石の數が多くなる程、難解となり、從て其形も見誤り易いものも多くあります。

扱以下、點について其形を大略圖示して見ますと。

(一)二目點 二目點は形は至極簡單であります、今圖によりて見ると、黒先イに當りとし、白ロに粘、黒ハ、白ニ黒ホに打缺、白へ、黒ト、白チ、黒リと打つて二目點となります。

(二)三目點 此形は前の死



活の中にもある通り、白先イに置き、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホと打つて三目點とします。猶此形は、今の處では石は(一)と同じ様に二目ではあります、若し攻合なぞで此石を打上げようとするには、白猶へに打つて三目とし、黒ト、白ホと攻めなければならぬので、之を三目點と云ひます。

(三)四目點 白先イと點し、黒ロ、白ハ、黒ニ、白ホと打つて四目點とします。又此形も(二)と同じで、圖のまゝでは二目であります、之を攻めるには、へにツメ、猶白トに打つて四目にして捨てなければなりませんから、斯かる形を皆四目點と云ひます。

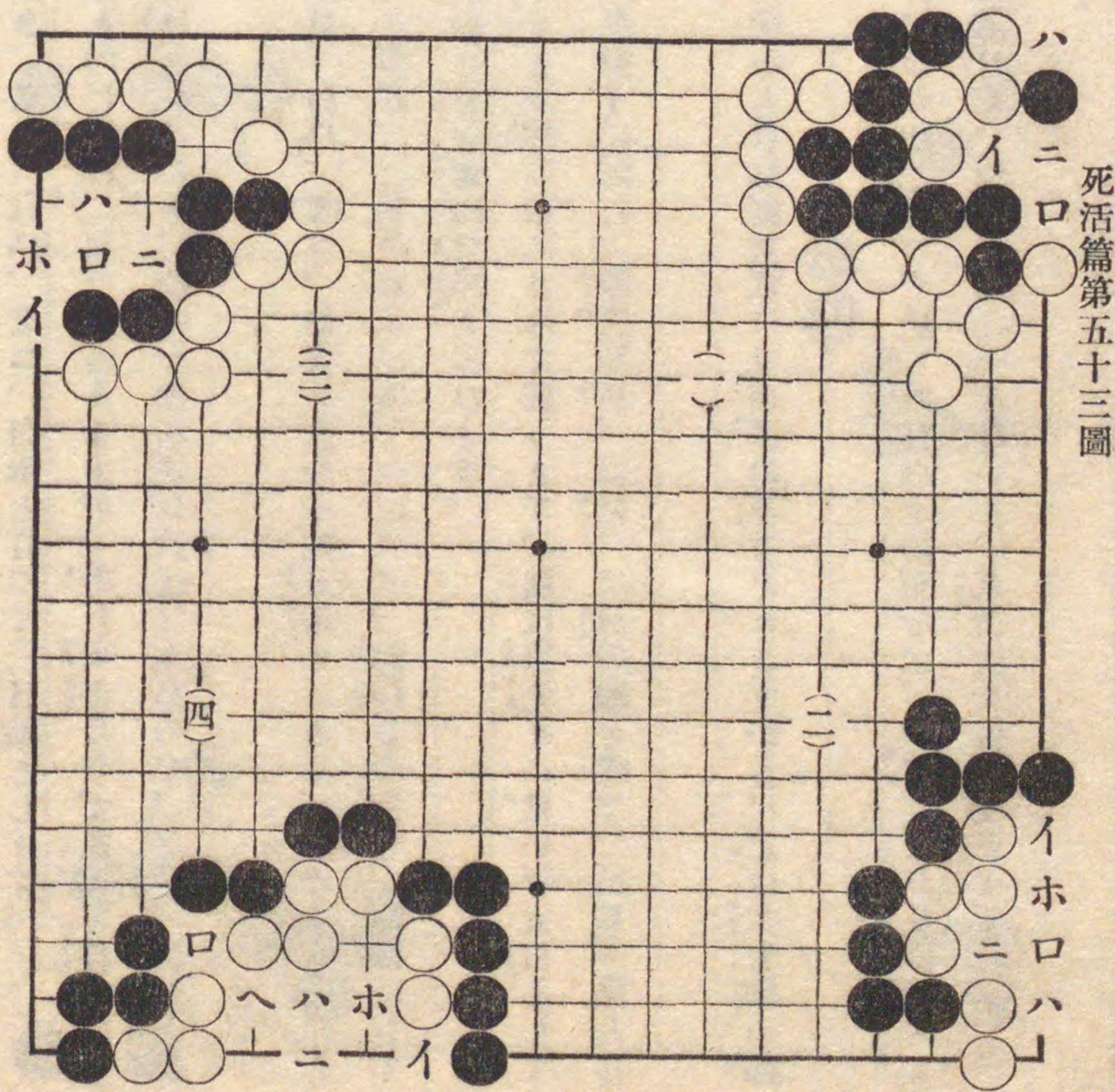
(四)五目點 五目點は、死の中でも至難の形とされて居ります。圖は黒先イに粘いで五目として捨てます、次に白ロに打抜くも、黒猶イに點し、漸次四目、三目、二目の順を経て、結局一眼となるのであります。

六目點は、難解の形であり、又前の五目點程實戰には出來ぬ形でありますから、之は次卷點の部で説明する事と致します。

第五十三圖 點の形と反對に、石の活となつて居る四目以上の形を二、三擧げて見ますと、先づ、石の活を得る廣さの最小限は四目で、四目以上の形でないと、其儘捨て置いては活となつて居りませぬ。

(一)、曲四目活の一例で、黒先イと打ち、白ロ、黒ハと打抜いて、活となつて居ります。處が一目多く打抜く事が出来ても、黒イをロに打つと、白イに五目とし、黒ニ、次に黒ハに打抜いても、此形は前述五目點、白に中の要所に打込まれて死となります。

(二)、五目活の形 圖は其一例であります、此五目の廣さとなると、其組織に缺點の無い形では、只前形と今一つの形を除く以外は皆活となつて居ります。(次巻點の部



死活篇第五十三圖

參照)

で圖では白先イに約へて隅を五目の形とし、次に黒ロに置くも、白ハ、黒ニ、白ホと打抜いて二眼となります。

(三)、六目活の形 形も六目以上となると、組織に少し位の缺點はあつても、活となつて居る場合が多いのであります。圖は黒イに下り中を六目の廣さとして活とします、此時白ロに打つも、黒ハ、白ニ、黒ホと打つて活。又白ロをハに打つても黒ロと打つて同じく活となります。

(四)、七目活の形 七目或は夫れ以上の廣さでは、組織に缺點が無い限り全部活となつて居ります。

(四)圖は白先イに打ち、中を七目の廣さとし活とします、此時に黒ロに打てば、白ハに缺點を守つて活。又黒ロをハに飛込めば、白ニ、黒ホ、白へと打つて二眼となります。

攻合と其種類

攻合は前述の通りで、其勝敗は云ふまでも無く、活力の多少によりますが、然し形は種々複雑して居て、形によりては、一手或は二手位勝の様に見へて居て、却て負となる事もあります。そこで此攻合の攻方を研究するに、其形により之を七つに區別する事と致します。

- 一、普通の形（只活力の多少により勝負の決まる簡單な形）
- 二、手数を長くして勝とする形
- 三、手数は一手或は二手足らぬ様に見へても、他の石との關係上勝となる攻合
- 四、攻め方の六ヶ敷形
- 五、先づ石を捨て、其捨石によりて手数を縮めて勝とする攻合
- 六、眼有眼無の攻合
- 七、大點小點の攻合

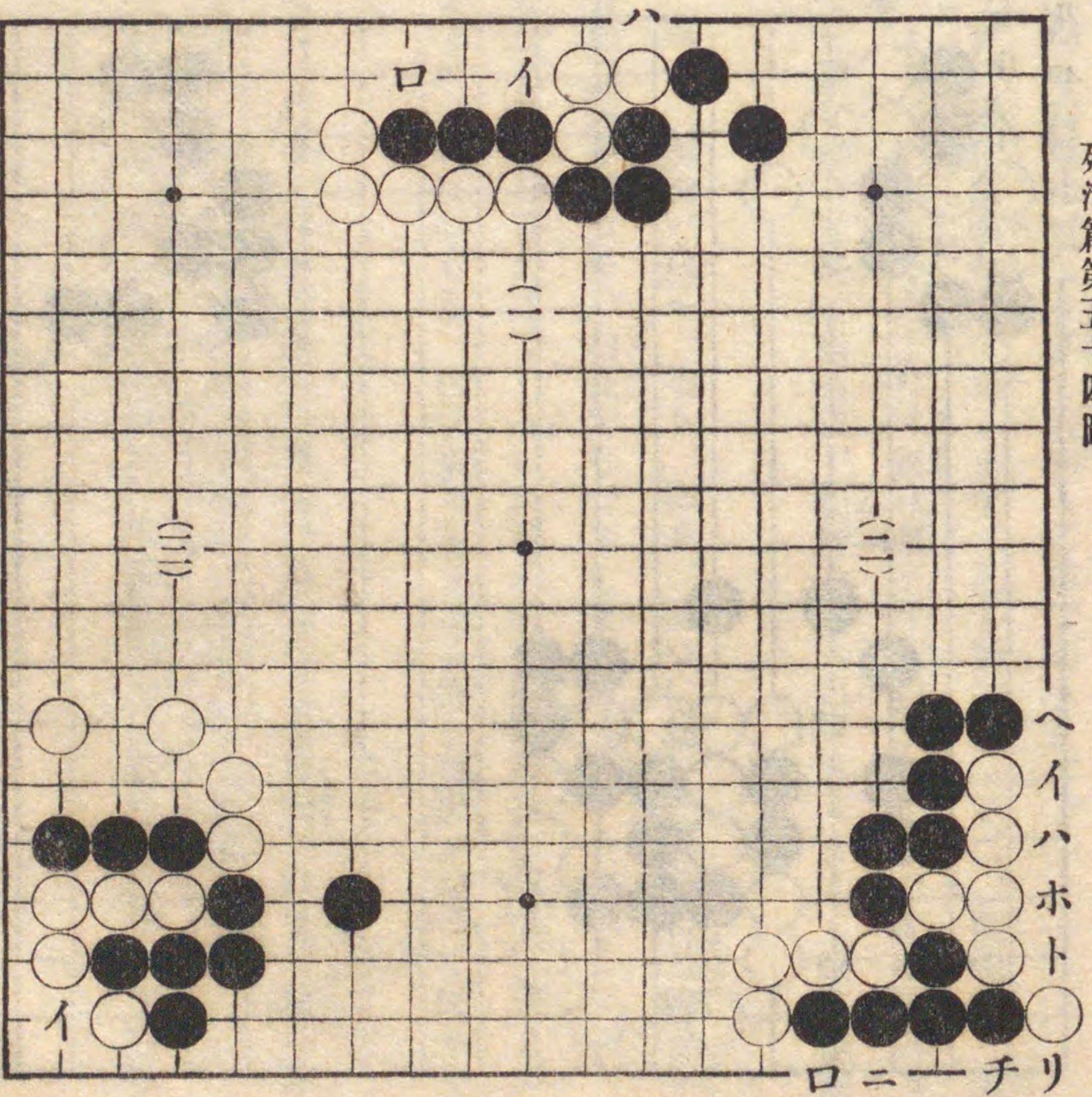
そこで此中、五、六、七の三つは次巻に説明するとして、先づ一、二、三、四について、圖に於いて見ますと。

第五十四圖（一）黒先勝

之は普通攻合の形で、變化は至極簡單であります。手数は黒三手、白三手、此時黒先手でありますから、黒イと打つて白を二手に縮め、白ロ、黒ハと打つて勝とします。

（二）黒先勝 黒四手、白四手の黒先で、黒は通常の通りイと攻め、攻合勝となります。次に白ロなれば、黒ハ、白ニ黒ホと打つて勝。又白ロの手をハに打てば、黒へ、白ト、黒チ、白ロ、黒リと打つて勝となります。

死活篇第五十四圖

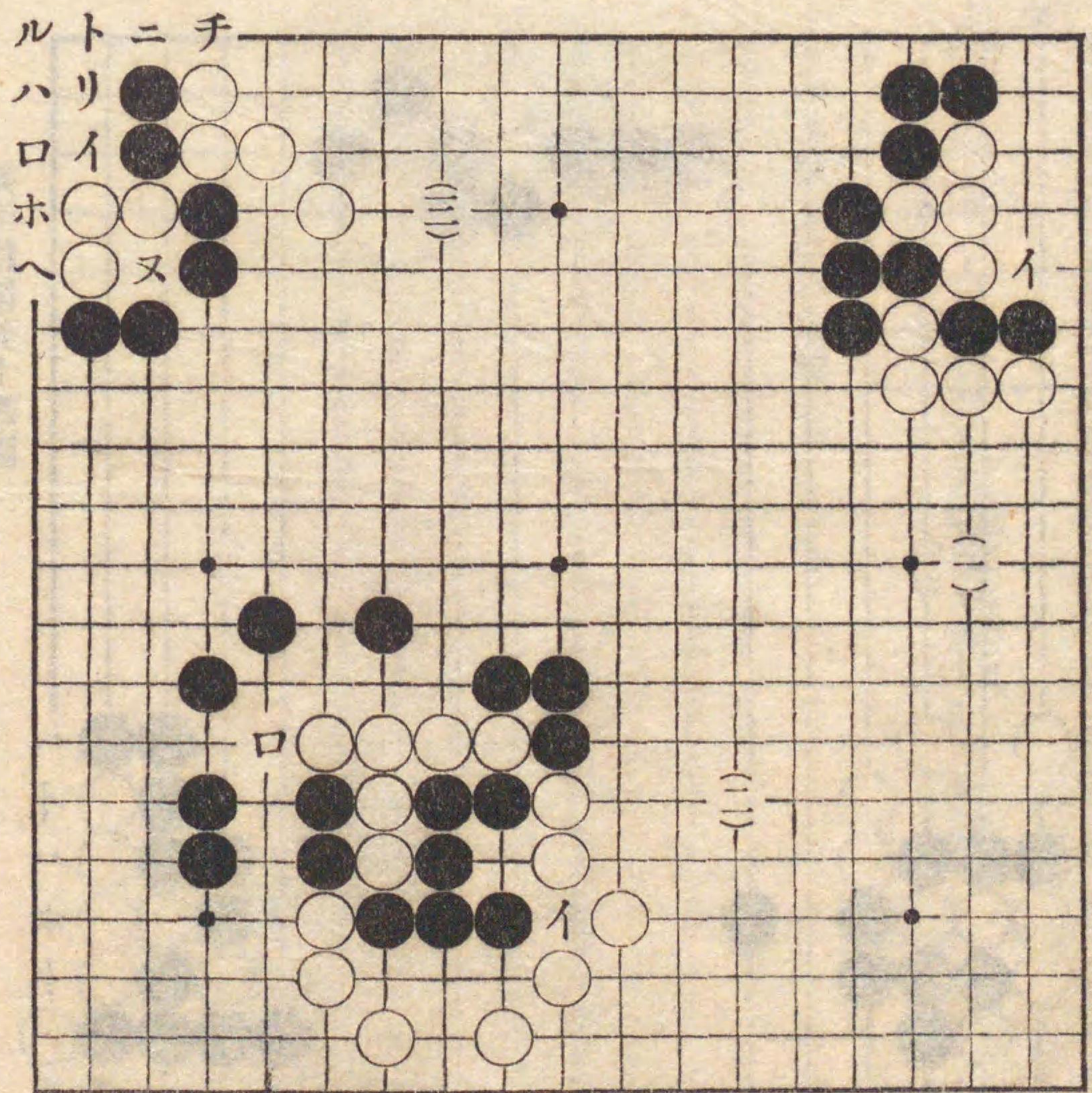


(三) 白先勝 圖の儘では、黒四手、白三手で一手負てありますが、此時白イに粘ぎ、黒四手に對する、白五手とし以下は順當に攻めて行つて白勝となります。

第五十五圖(一) 黒先勝

前七種の中、第二の手數を長くして勝とする攻合であります。(一)は、圖の儘では、黒二手、白三手で、白が一手多くありますが、此時黒イに曲つて、白の手數を一手少くすると同時に、黒は一手増し、白二手に對する黒三手として

死活篇第五十五圖



黒勝とします。で攻合には斯う云ふ形も實戰に可なり多く出来るものであります。

(二) 黒先勝 形は簡單であります、變化は複雑して居ります。之も圖のまゝでは、白四手、黒三手でありますが、此時黒イに約へます、然し之でもまだ手數は黒三手、白三手で、白先手でありますが、圖の様に黒石が隅にあつて一眼を持つて居る場合は、黒勝となるのであります。(眼有眼無の攻合参照)

扱此時白口に攻めますと、黒ハ、白ニ、黒ホ、白へ、黒ト、白チ、黒又、白リ、黒ルに二目打抜、白リ、黒ハのるので、斯かる形となつては、攻合の意義を爲さず、白死となつてしまひます。

又白口の綽をニに打てば、黒は口と下る手が善い手で、次に白りに打てば、黒ハに當り、白ト、黒又と打つて、之は二手々であります、何れからも、白は當りとする手無く黒勝となつて居ります。

又初めに白ハに置けば、黒口、白ニ、黒ト、白チ、黒又、白リ、黒ルに二目打抜、白リ、黒ハの取りとなつて、之も二手々であります、白からホに攻める手無く、黒勝となつて居ります。

(三) 白先勝 此儘で白イと攻めて行つては、黒に口と打たれ、手數は四手に對する二手となつて白敗となります。

然し此形白は、初め黒をツメずに、先づ口と打つて其手數を延ばす好い手があるので、斯う打つ

と、黒五手に對する、白は六手となり、以下は互に其手數に増減無く、順當の攻合となつて、白勝となります。

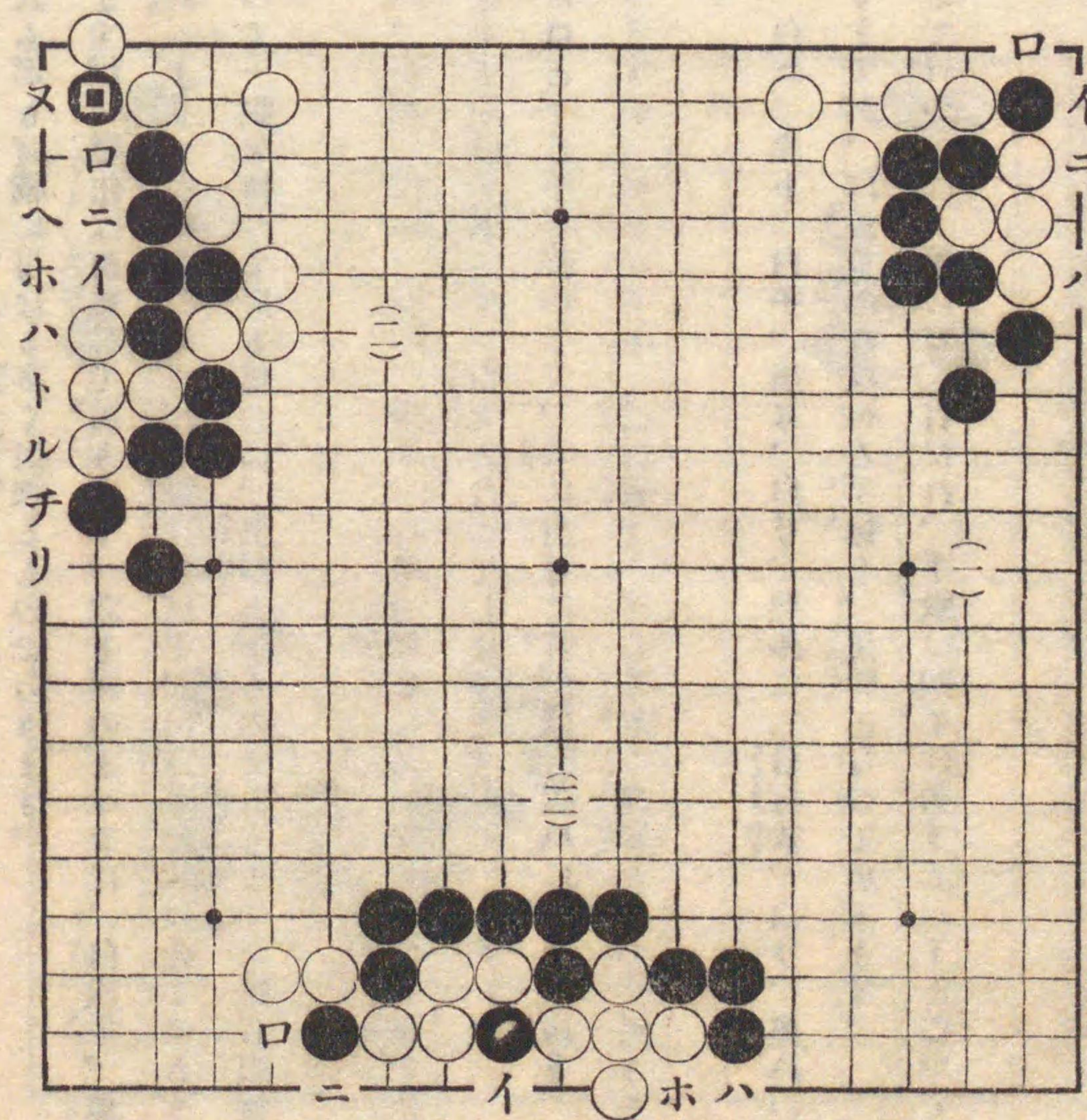
第五十六圖 次は第三の

「手數は少い形であつても、外の石との關係上勝となる攻合」について實例を擧げて見ます。

(一) 黒先勝 前圖にも之と

似た形はありますが、此時黒先イと下り、白ロ、黒ハと打つて黒勝となります。之は黒二目が隅にあるのと、又白から二に攻める手とが無いのと

死活篇第五十六圖



で黒勝となります。

(二) 黒先勝 黒先イと約へ、白ロ、黒ハと縛ねて、攻合黒勝となります。此形黒も二手、白も二手で此際白先であります。黒に一子ある爲に、次に白二に當としても、黒ホに粘いで、白はへからも、又トからも攻める手無く、二手々で之で黒勝となつて居ります。

又初め黒イの時に、白ロの切をホに打てば黒へ、白ト、黒ロ、白チ、黒リ、白又と打てば、黒先づハに劫提り、次に白他に劫抛してホと劫を取返せば、黒ルに劫提りとなるので、此形は何れからでも黒の方では、劫を取つて白を當りとする事が出来ませんが、之に對し白は、一々劫立をして後、劫を取返さなければならぬので、無限に白の方に劫のある譯ではないから、之れを兩劫黒勝と云ひます。

(三) 黒先勝 黒イに下れば、白は止むを得ずロと一目提り、黒ハに下り、白ニの時、黒ホに當りとして、攻合黒勝となるので、之などは攻合の中でも變つた面白い形であります。

第五十七圖

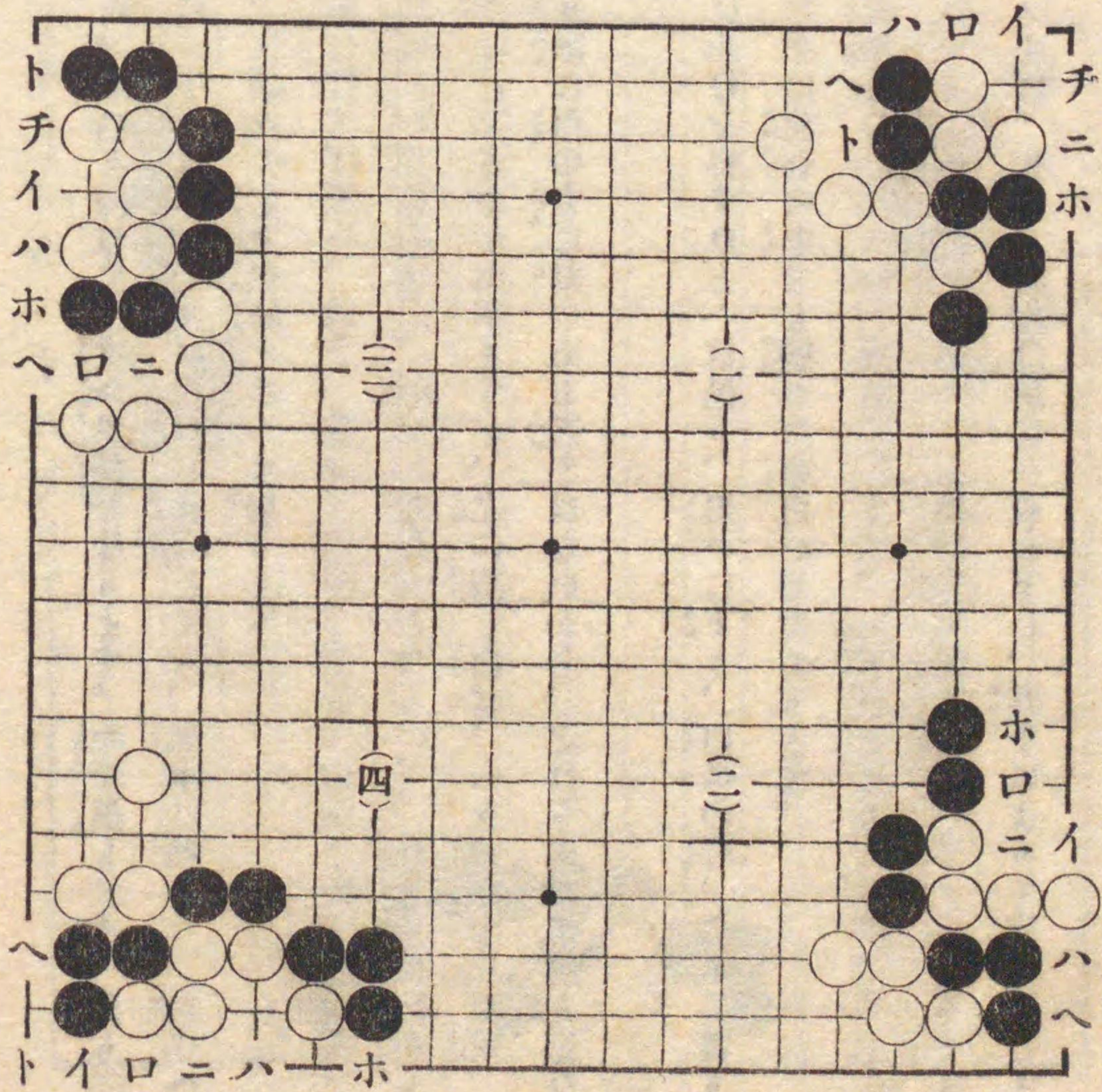
次は第四の六ヶ敷攻合の形について説明致します。元來石を攻める手は、多くは前に説明した通り、敵の活力を順次ツメて行けば宜いので、大抵の形は此方法に依るのであります。又形によつてはチカに手をツメずに、先づ其石の急所に一着を下し、其手によりて攻合勝とする方法もあります。

(一) 黒先勝 黒先イと打つ手が大層好い手であり、此時白口なれば、黒ハ、白ニ黒ホと打つて黒勝。又白口をへに打てば、黒口に盤り白ト黒ハと粘ぎ、黒三手、白二手で黒勝となつて居ります。

處が初め黒イと攻める手をチカに口に攻めると、白イ黒ハなれば、白チと打つて隅に二眼となり、又黒ハの粘をニに當りとすると、白ハ、黒チ、白へと打つて之も白勝となります。

(二) 黒先勝 此形黒イと附

死活篇第五十七圖



けて、黒勝となります。此時白口なれば、黒ハ、白ニ、黒ホと打つて勝。又白口をへに打てば、黒ニと打つて勝となります。

(三) 黒先勝 黒三手、白三手の黒先手であり、攻方は(一)と略同じく、黒イと置く手が好い手で、之れ以外の手では何處に打つても白にイの急所に打たれて黒負となります。

で黒にイと置かれた後の變化は、白口なれば、黒ハ、白ニ、黒ホと粘いで黒勝。又白口をホに打てば、黒へ、白口、黒ハに打抜いて、同じく黒勝となります。

處が黒イの置をホに打ちますと、白イ、黒ト、白口、黒チ、白ニと打つて白勝となります。

(四) 黒先勝 之は置碁定石の中にある形で、此時黒先イに下つて勝となります。白次に口なれば、黒ハ。又白口をハなれば、黒口、白ニ、黒ホ。又白ハをへの方から攻めれば黒口と打つので、何れも黒勝となります。

で此形では斯く黒イに下る手が宜い手ではありますが、此手を若し早く白の手をツメようとして、口に縛ねるとすると、白イに打缺、黒トに一目提り、白ニ、黒ハ、白イに取り、劫となります。

劫

劫には前に云つた通り、死活、攻合及び追落、盤、斷等の劫がありますので、此處では夫等の形

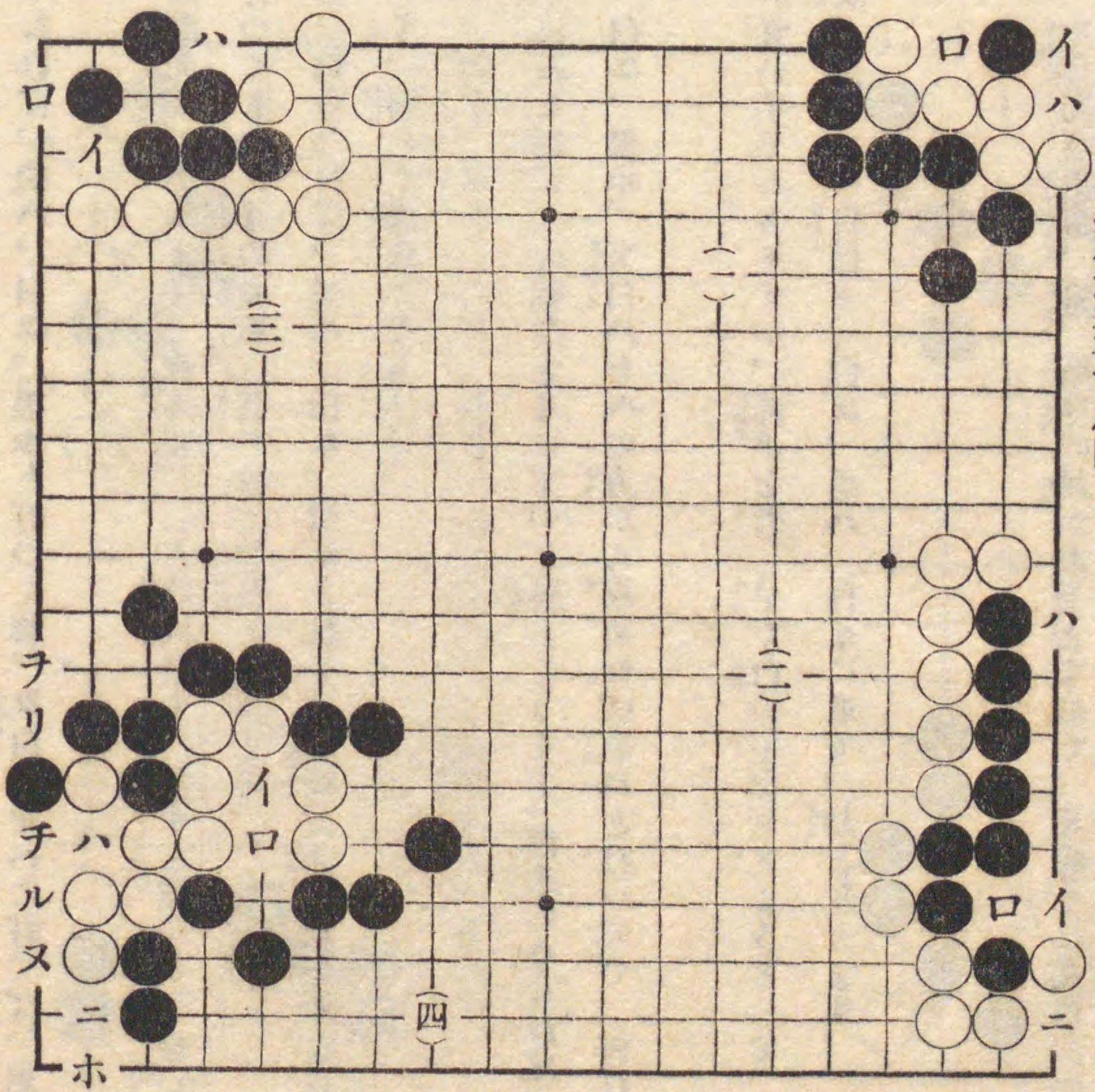
の中、實戦によく出来る二、
三の圖を掲げる事と致しま
す。

第五十八圖(一)白先劫

變化は簡單明瞭、白先イと打
てば劫となります。此劫で若
し白が勝てば、次にロと打抜
いて活となり、反對に黒が勝
てば黒ハに、劫取り、次に黒
イの粘となり、三目點白死と
なります。

(二)黒先劫 此形も黒先イ
と打つて劫とする一手であり
ます。若し此手をロに粘げば
白ハの縛となるので、斯く第

死活篇第五十八圖



二線での黒の之丈の長さでは、二眼とする手はありませぬ。で前の様に、黒イに劫を仕掛ければ、
白ロに劫提となり、次に黒劫を提返した時、白ニに粘げば、黒ハに下り、中を長行四目の形として
矢張りロの劫を争ふのであります。

(三)白先劫 白先イと打ち、黒ロに下れば白ハに打込んで劫となります。

(四)白先劫 此形白は、イに一眼は作られる形でありますが、然し直ちに白ロに打つて一眼を作
りますと、黒ハ、白ニ、黒ホとなつて、下の邊は、白一眼とする手無く、死となります。

故に此形も、初め白子と打つて劫に仕掛け、次に黒若しりに粘げば、其時初めて白ロに眼持、黒
ニ、白又と打ち、ルの一眼を劫によつて争ふのであります。

又白子と劫を仕掛けた時、直ぐ黒ロに打つて上の一眼を取れば、白りに打抜、黒ニ、白又、黒ヲ
白、黒粘となつて二眼となります。

第五十九圖

此中(一)と

(二)は攻合の劫、(三)は追落
(四)は盤の劫であります。

(一)白先劫 白イと打込、

黒口、白ハ、黒ニ、白イと提
て劫となります。

(二)白先劫 此形若し白イ

にツメますと、黒口、白ハな
れば、黒ニと打つて、攻合白

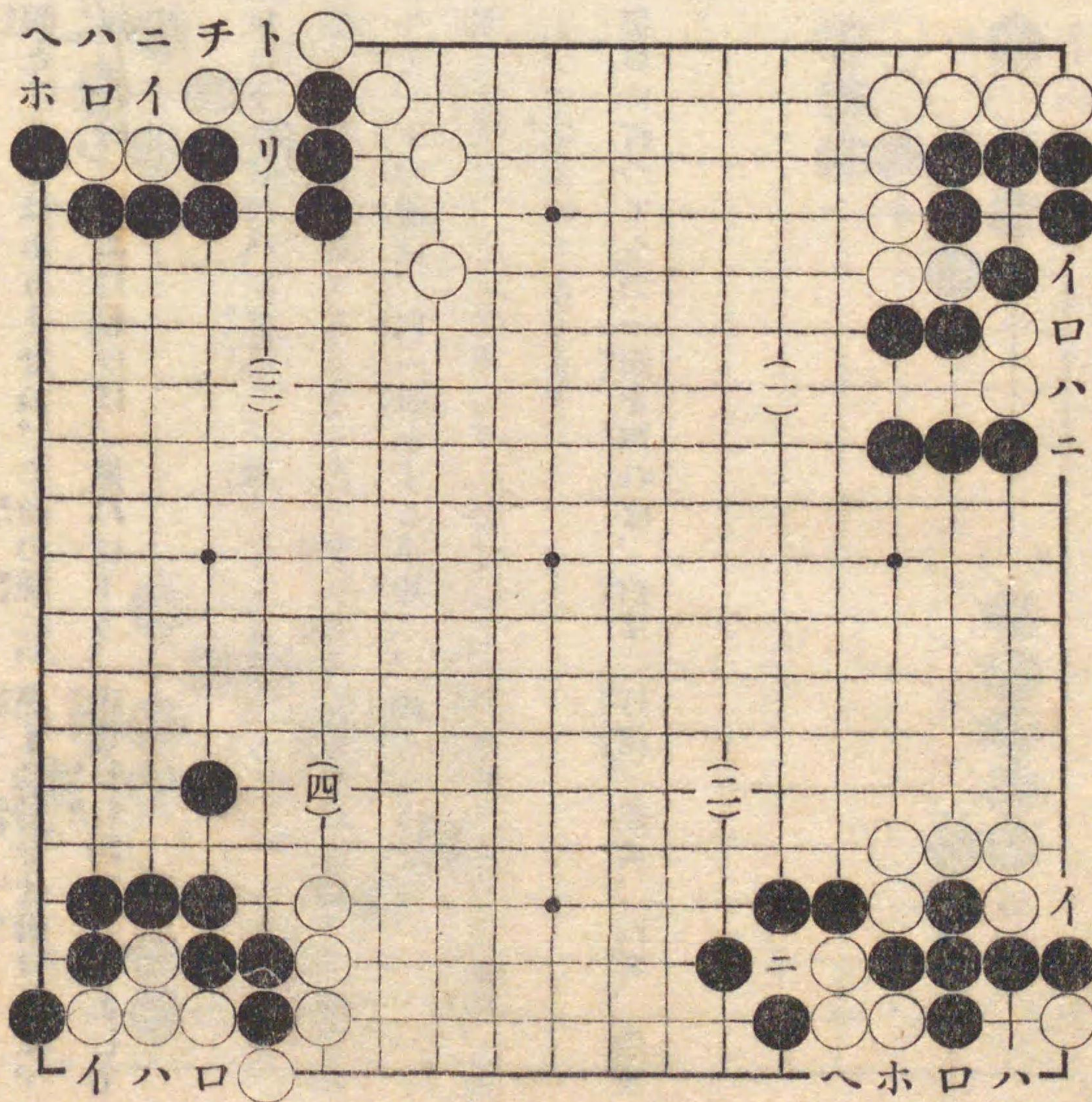
敗となります。で之も白は

(一)と同じ様に先づ口に綽ね
黒ハの時、白イに打つて口の

一目を捨て、黒ホ、白へと約
へて劫とします。

(三)黒先劫 黒先イと切り

死活篇第五十九圖



白口、黒ハ、白ニ、黒ホと打つて三目當り、へを劫とし、次に黒劫を提返した時、白イに三目を粘ければ、黒猶トに打込、白チ、黒りに追落とし、何處までもへを劫として争ひます。

(四)黒先劫 黒イに打てば、白口と粘いで、白は完全に盤となります。故に此形では、黒先づ口に打込、白ハ、黒猶イに打込んで劫とします。

死活(攻合、劫、押つぶ)練習(十七目)

以上で、先づ一通り死、活、攻合、劫、盤、追落し等死活の變化を終わりましたから、此處に十七目の置碁で、以上の變化の、實戦に出来る形を掲げて説明する事と致します。

第十五圖

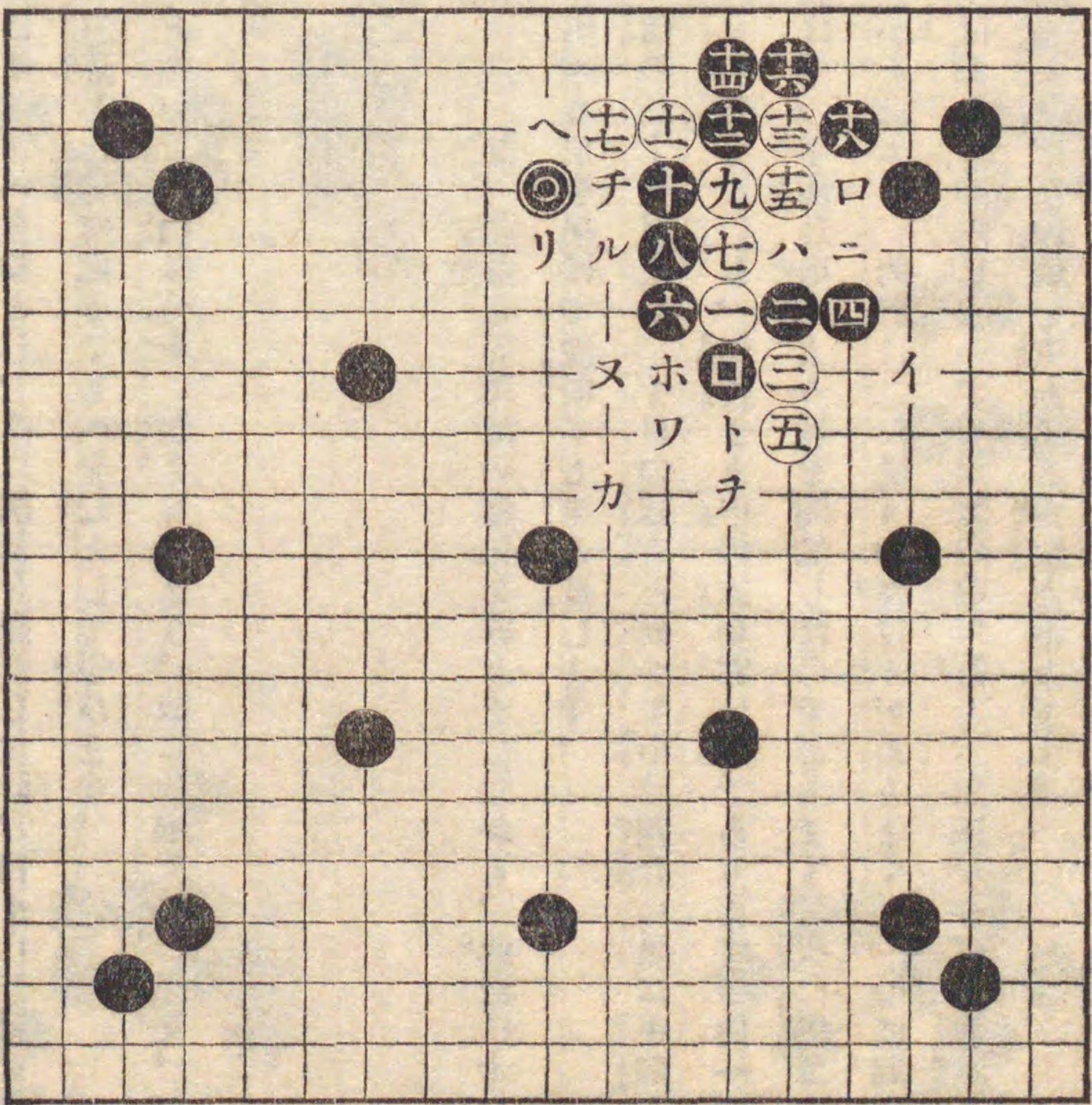
で此十七目置碁は、前の二十五目或は二十目の置方と異つて中は割合に黒は手薄くなつて居りますので、従つて白として活動するもの、隅邊より中の方が宜い譯であります。白一の附は此意味により着手したので、白は中の手薄な場所より戦を開始したのであります。次に黒二の綽、之は如何云ふ意味の着手が宜いかと云ふと、此處に二た通りの應け方があります。一つは圖の様、之は強く二と綽て戦ふ手と、今一つは此白一の附に答へず、黒九の邊に打ち、白三なれば、黒猶イに打ち、黒口の一目は捨て、専ら隅邊を堅くし地取を主とする方法とあります。

此方法によるのも、無論黒は悪しくなく、元々初め十七目を先きに置いてあるのでありますから、

地の争ひで無事黒は勝とする事も出来ませんが、然し通常の應答としては、斯く白一と黒に接した時は、黒は二の綽か又は木の行か、此二つの形で應ずるのが宜いのでありまして、餘程四方の形勢が劣つて居る、特別の場合の外、之を捨て、他に着手する理は無いのであります。

次に黒二と木の應けの、此二つの中では何れが宜いかと云ふと、前に述べた通り、斯く黒の優勢の場合は、無論二の綽の強硬手段に出ずるのが

死活練習第十五圖



宜いのであります。

白三の切違は、斯様に黒の多數置石のある碁では無理ではありますが、然し平凡の方法を取つても結局白敗となりますから、只白は變化を紛はしくする爲に斯く切違つたに過ぎぬのであります。黒四は、「切違ひには必ず一方を行びる」原則に従ひ、次に白五の時、黒は、隅の二つの置石と、及び黒◎を利用して、先づ六に當りとし、白七、黒八、白九、黒十と何處までも約へ込んで手強く攻勢を取つたのであります。

白十一の綽に對する、黒十二の切は、此形、隅に黒二目の置石がありますから、斯う打つ事が出来るので、此手は又大層好い手であります。白十三、黒十四に逃げ、白十五、黒十六の曲りとなつては、最う白に手段の餘地のない形となりました。又白十五の粘で、ロに掛粘げば、黒十五と打込、白八、黒二に當りとするので、之は一層早く白を打ち抜く事が出来ます。

黒一八の手では木に粘いで、守つて居ても確であります。又斯く十八と打つても、白は只ロ、ハと二つの活力丈となつて、黒の勝であります。

處が黒、十八或は木に守る手を、猶へに約へて此二目をも捕虜にしようとする、白木に切り、黒ト、白子、黒リ、白ヌ、黒ルと打つて三目を逃れば、白ヲ、黒ワ、白カと門にカケ三目を取りま

す。此三目を取れば、従つて白一以下の五目も逃出してしまふので、斯うなつては、形勢一變白の優勢な局面となります。

第十六圖 前圖白九以下の變化で、圖の様に白九に曲つた時、黒は其形を見ると、黒●の石にはイの切があり、随て黒六、八も弱くなつて居ります。

處で黒二、四の二目は何うかと云ふと、此石もまだ確とは云へませぬが、然し此方は隅には二つも置石があり、黒

の●の石とも相應じて之と連絡する手もありますから、圖の様に黒は十と打つて、六、八を確にしたので、従つて此處を確かにすればイの切も安全で、白切れば黒逃げるまでとあります。

黒十二は十三とデカに約へても、此形では黒●の石があつて、此二、四を征に取られる手は無いが。然し斯う打つと、白に十二と切られ、黒口、白八、黒十八、白十六、黒十五、白二、黒十二の粘となつて、黒は凝り形となり、反對に白には外側を厚くせられます。故に黒は、黒●に一目もあつて、丁度掛粘の形となりますから、圖の様に十二に打ち、白十三、黒十四と約へたのであります。

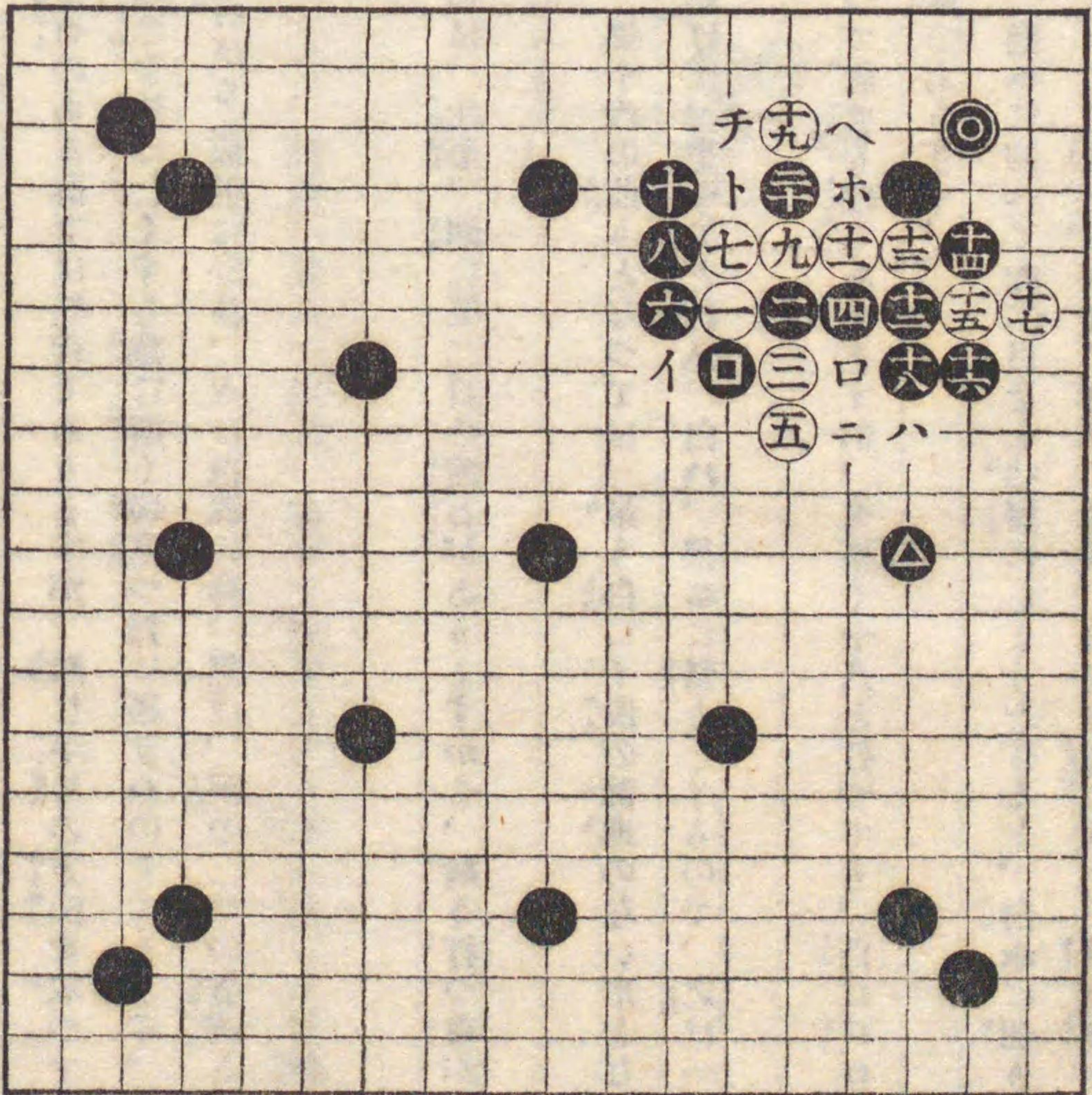
白十五の切は、丁度前圖で黒十二に切つたのと、同じ意味であります。結果は前とは反對で、前圖では切を打つて、遂に白五目を捕虜としたのであります。圖では斯く切るも、黒十六に當り、白十七、黒十八の粘となつて、黒五目は安全であり、其上に却て切を打つた、白十五、十七等の石が弱くなつて來ました。

白十九、次に黒二十の飛込は、前の押つぶしの變化にありました通り、所謂「鶴の巢ごもり」であつて、斯く黒二十と割込めば白の五目は逃げる手はありません。其變化は、此時白ホに打てば、黒へに當り、白トに打抜、黒子となり。又白ホをトに打てば、黒は子より一目を捨て、同じく押つぶしとして白死であります。

第十七圖 白五に縛ね、黒六、白七に行切つて、此一、七の方を堅くした場合は、黒は八に切

しとして白死であります。

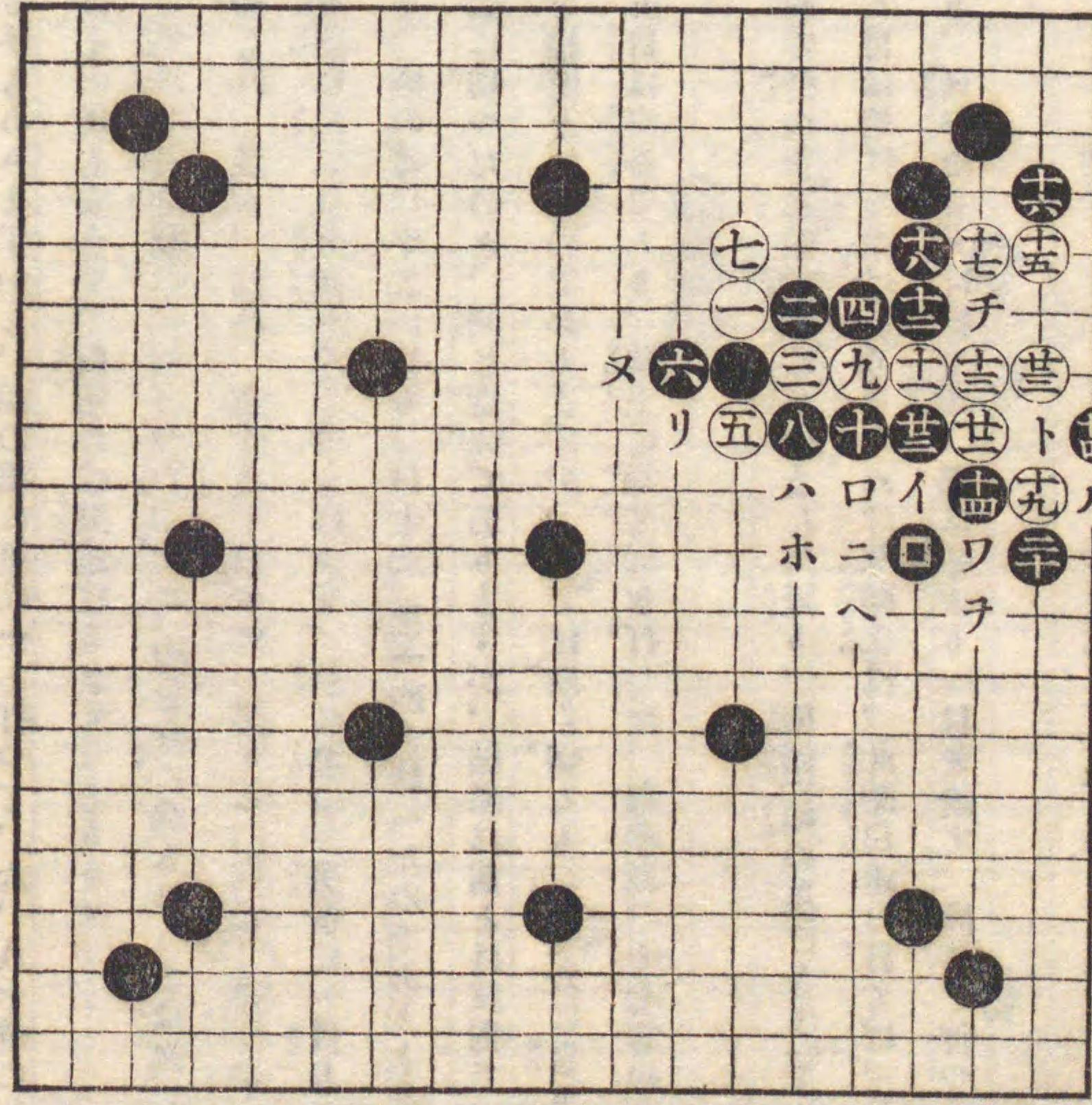
死活練習第十六圖



り、白九、黒十に當り、白十一、次に黒に十二と押つけて、結果は矢張り、前圖と同様、隅の黒二目の効力と、黒の石によりて、白三目の活動の範圍を大に狭められるのであります。

次に白十三の行で二十二に打ちますと、黒イに突當り、白二十三に飛べば、黒十九に飛んで白の發展を止めますので斯かる形となつても、白は二眼を作る場所も無く、次に白ロに切れば、黒ハに逃、白ニ、黒ホに打つて活力を増し

死活篇練習第十七圖



白へ、黒十三に縛込、白二十一、黒トに切つて一目を捨て、白チ、黒十四に當り、白十三の處に粘黒十七に約て、黒勝となります。

以上白が二十二に曲る手段では、黒は急激に攻めて捕虜とする事が出来ませんが、圖の様に、白三と真直に行びた時は、黒は其方法を變へる方が宜いのであります、で此際先づ白黒の形を見ると、白三以下の四目は此十三の行によつて、活力は多くなりました、が然し只活力が多くなつたと云ふ丈で、二眼を得る場所は無く、又之等の石は、黒の勢力範圍中にありますから、黒としては此際急に白に迫らず、緩やかに十四に突んで、白を圍むで居て、白を死とする事が出来ます。

次に白十五に走れば、黒十六に尖附、白十七、黒十八に粘いで、堅くし、次に白十九に附れば黒二十と約へ、白二十一、黒二十二に堅くして黒の圍みは安全であります。

處が黒二十二で、若しトに切つて十九の一目を提りますと、白はりに押し、黒又、白イ、黒ル、白ハ、黒ロなれば、白ニに打替へとして黒三目を提り、中の廣い場所へ逃出します。

白二十三に打てば、黒二十四と打ち、次に白ルに打てば、黒チに打つて一眼丈となります。猶次に、白ヲに覗けば、黒ワの粘、白ハ、黒ニと打つ迄で、此方面では手段の施しようもありません。

第十八圖 前圖白三以下の變化、白若し圖の様に三と中に向て縛ねた時は、黒五に切つて戦ふ手もあります、結果は前變化と大同小異で、決して黒は悪しくはありませんが、又圖の様に黒四、

白五、黒六と打つて、邊を堅くする手も堅實な善い手でありませぬ。

一體盤面の變化の死活のものと、隅邊が多いので中は割合に變化の少ないものであります。

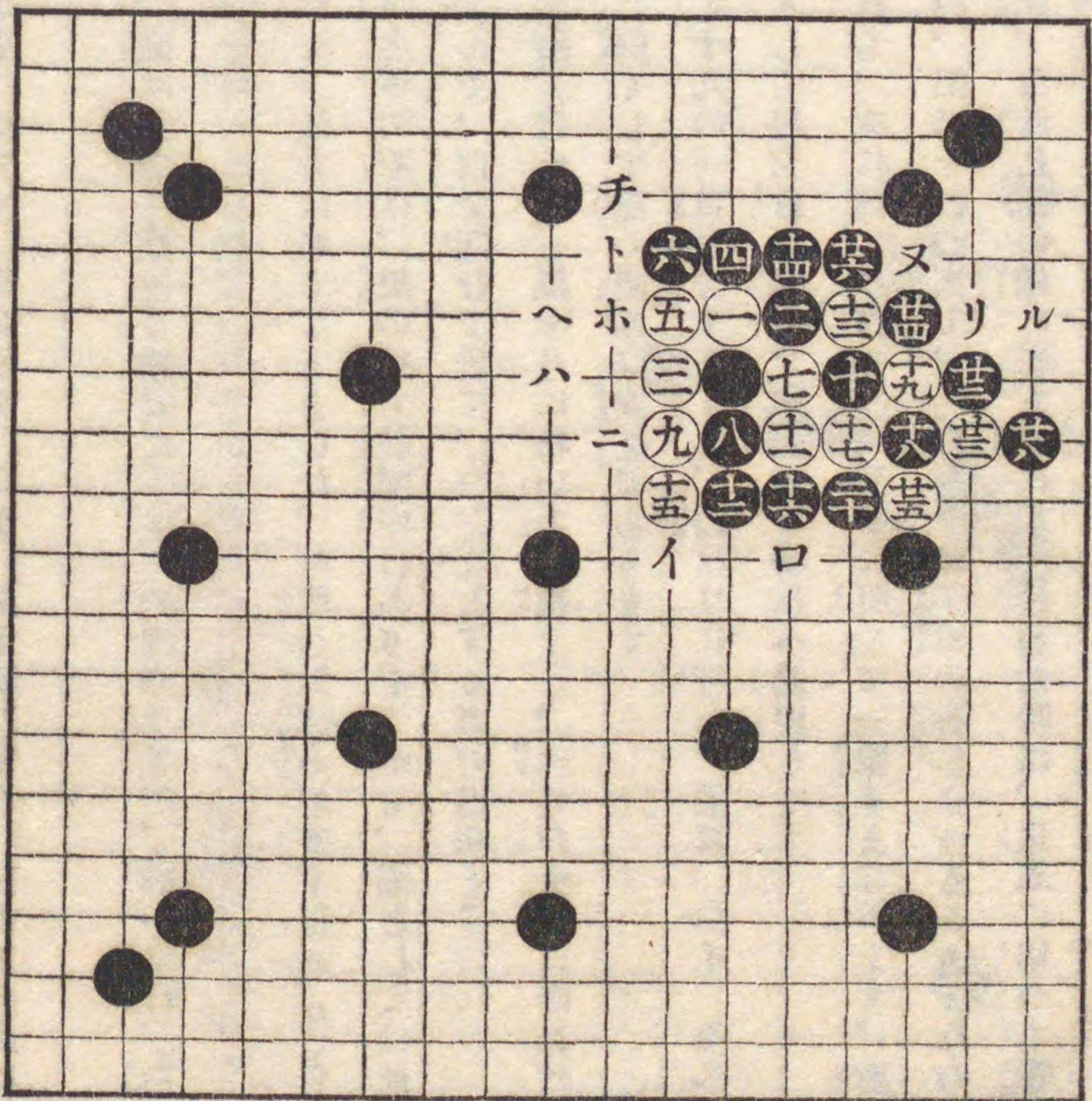
まして此形では、黒四、六と打ちし爲に、隅邊が堅くなり、只中の狭い間のセリ合となつたので、一層變化が狭められた譯であります。

白七で、九に行ければ、別に變化も無く白四目も先づ安全であります、然し斯く打

死活練習第十八圖

○十ノ處粘

⊕六ノ處粘



てば、黒七に粘ぎ、白イなれば、黒も口に飛び、益々黒の下邊の形は堅くなりて、白に手段の餘地もなくありますから、白は七と切つたのであります。

黒八に行び、白九、黒先づ十に當りとし、白十一、黒十二と行び、白を左右に隔て、攻勢を取り白十三に當て、黒十四に粘となつたのであります。

白十五の手で、若し十六に打ちますと、黒十五、白八なれば、黒口と約へるので、此形も、白七、十一、十六の三目に活路はありませぬ。又白八に飛ぶ手を口に行ければ、黒二、白ホなれば、黒へ白ト、黒子と打つて白死であります。

黒十八と逆に縛出して十の一目を捨て、白十九、黒二十、白二十一の粘となつた時、次に黒二十二の手は、白の駄目づまりを利用し、何處までも急激に追窮したので、此形では大層宜い手でありませぬ。

白二十三と切れば、黒猶一目を捨て、二十四から當りとし、白二十五の提、黒二十六當り、白二十七に六目を粘いだ時、黒二十八に打ち、追落し征として白を取る事が出來ます。

又此變化の中、白二十三の切でりに打ちますと、黒二十四、白又、黒二十六、白二十四に粘、黒ルと打つて、同じく黒勝であります。

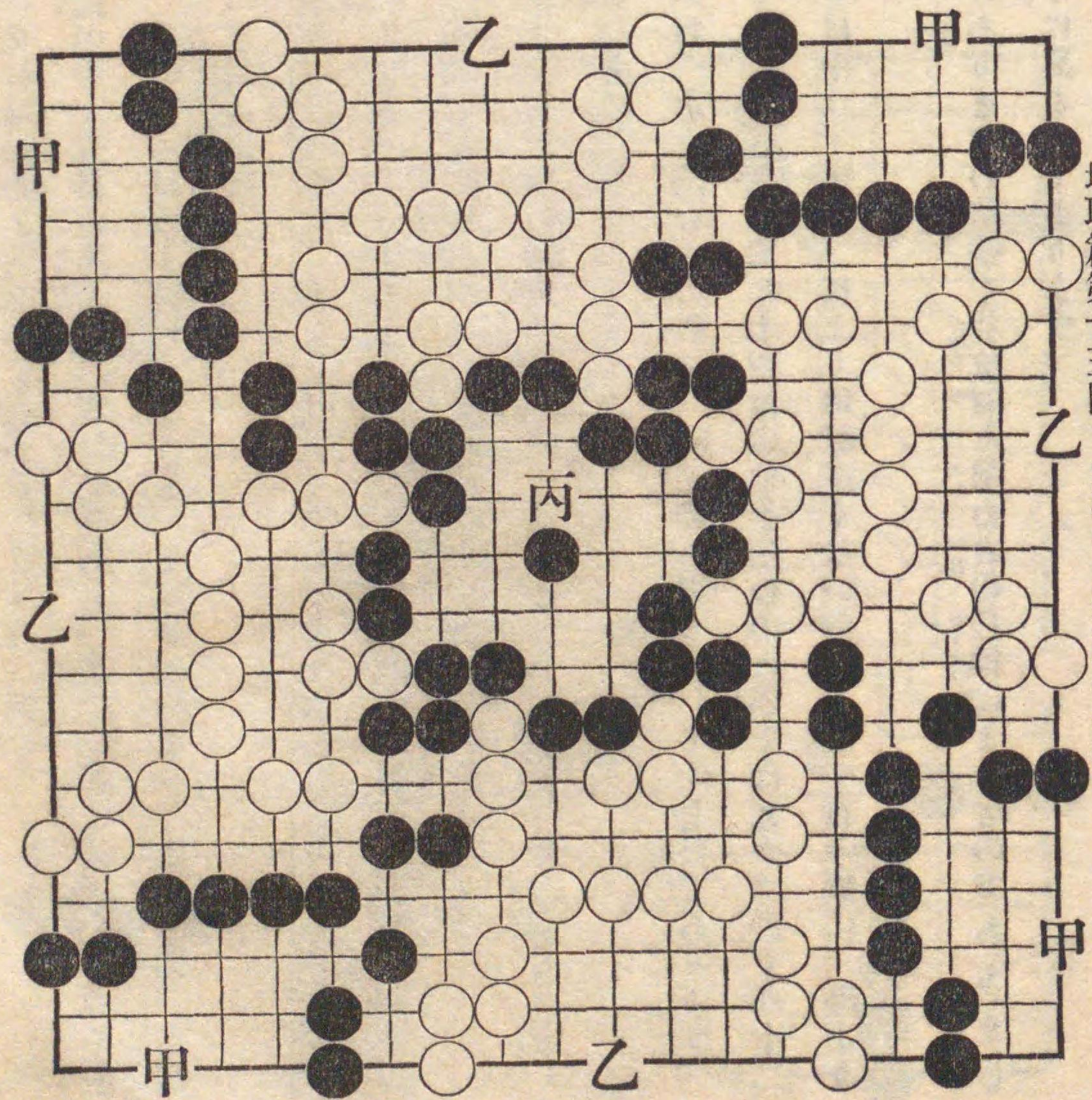
と打つて、矢張り白に出る手はありませぬ。又白、ソに打てば、黒子の打抜、白ツ、黒ト、白ネ、黒ナと打つて白死であります。

地取篇 (其二)

地の大小

地の圍る方の研究は、前の死活の研究と異つて、漠然として居て、一寸捕へ處の無い困難なものであります。

で、地を圍ふとする方法はいふまでもなく、なるべく少い手数で、廣く完全な地を圍ふが宜いのでありますが、之は云ふべくして、實際に當りては、甚だ困難な事でありま



で地の研究をする順序として、先づ地の形と其大小を説明致しますと。先づ
 第十五圖 之は第五卷地取篇の中、五目の布石に出来た終局圖を、其儘此處に掲げたものであ
 ります。今此圖によつて隅、邊、中の地の位置を區別しますと、先づ甲は四方共、隅の黒地、乙は
 邊の白地、丙は中央の黒地となつて居ります。

又此圖により、地の大きさと、其れを圍む爲に、費して居る、石の數とを調べて見ますと、先づ甲
 之は四隅共に地の大きさも、石の數も同じで、一隅の地の大きさは十四目、又之を圍むに費した石の數
 は、九目であります、つまり黒は九つの石で此隅の地十四目を完全に圍つた譯であります。

次に邊の白の地は如何かと云ひますと、白は四邊共同し形でありまして、其の一邊の廣さは同じ
 く十四目、之に費して居る石の數は各十二目であります。

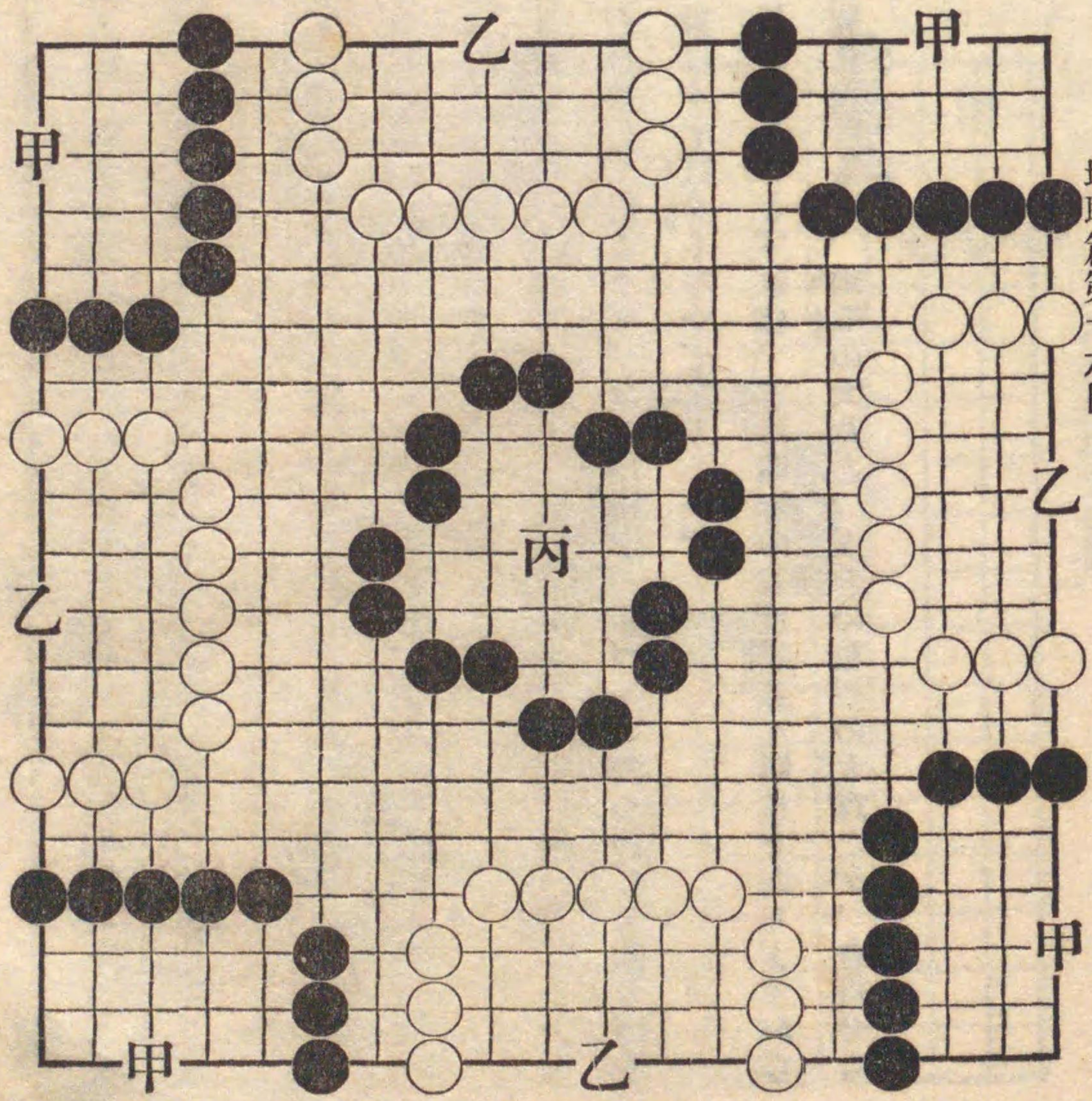
次に中、黒の地は、大きさは十六目、之を圍む石の數は、天元の一目も合して十七目であります。
 斯様に地を圍む石の數は種々でありまして、同じ十四目の地を圍むのに隅では九つ、邊では十二
 と、三つの差があり、又邊と中では中は、僅か二目より地が多くないのに、費す石の數は、邊より
 五つも多くなつて居ります。

斯様に地を圍ふに、着手に差のありますのは全く其位置と圍む方の巧拙によるものでありまし
 て、地の大小は斯くして種々様々に異なるのであります。

第十六圖 之は前圖を一

層簡單な形に改めたもので、
 地を圍ふについての難易の説
 明は前の實戦に出来る圖より
 は、本圖の方が一層分り易い
 のであります。今此圖により
 ますと、先づ各隅甲の地の數
 は、各十五目で之を圍ふに費
 して居る石は、各八つつゝで
 あります。

邊の白地乙は、同じく廣さ
 十五目でありますが、其石の
 數は十一目を費し、丙の中の
 地は十七目で、其費す石は十
 六目で、丁度之は隅の倍の石



地取篇第十六圖

を費して、地の廣さは僅かに二目より多くないのであります。
 斯様に隅、邊、中では、地を圍ふに、非常な相違のあるものでありますから、布石では常に、隅に先づ其根據を作り、次は邊に進み、邊の大體の地取を終つたならば、其次に中原の優劣を争ふを順序とするのであります。

又圖の形で、全部の地の數を計算して見ますと、黒は隅に十五目づゝ、四ヶ所で合して六十目、と、之に中の十七目を加へて七十七目になつて居ります。又白の目は十五目づゝ、四邊六十目であり、ますから、全體の地を比較して見ますと、黒が十七目多くなつて居ります。

處で之に對し、其費して居る石の數は如何かと云ひますと、黒は各隅八手づゝ、四つ合して三十二手と中の十六手を加へ、四十八手を費して居ります。又白は邊十一手づゝ、四つ合して四十四手で、石の數は黒が四つ多く、地の數は十七目多くなつて居ります。

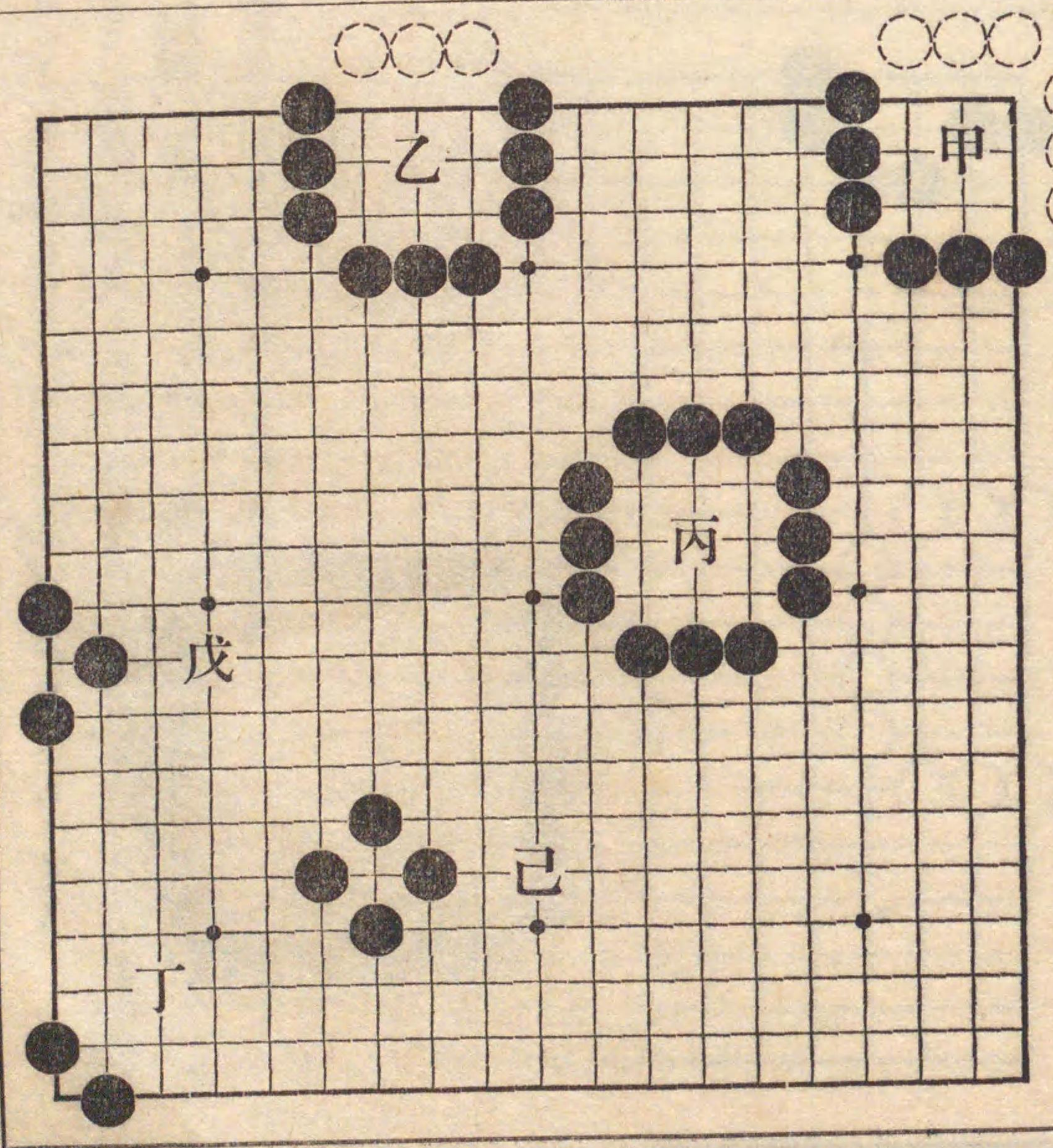
之に天元の一目を加へ、黒が五目多いものとすれば、丁度四卷の五目置碁と同じでありますから此圖と對照して其勝敗の原因を研究したならば、地取の大意と、五卷の布石の大意とを、會得せらるゝ事と思ふのであります。

第十七圖 之は隅、邊、

中の地の大きさの原形でありまして、今此圖によりますと、甲、隅に九目を作るには六手乙、邊に九目を作るには九手丙、中に九目を作るには十二手で、丁度丁、戊、巳、にある様に、二、三、四の割合となります。

石を打抜くには、第一卷で説明致しました通り盤外の假定子の力によつて、隅(丁)では二子、邊(戊)では三子で打抜けると同様に、地を作る時にも甲或は乙に見る様に、盤

地取篇第十七圖



外の假定子○の力により、割合に少い石の數で完全に地とする事が出来るのであります。
 でありますから、隅或は邊の三、四線に着手するのは、前述の様に地を作る時、又は石の活路を得るには、非常に便利の地點を占領した譯でありますから、布石では如何な變化した局面でも、初めは必ず、隅或は邊の三、四線に着手するを順序とするのであります。

第十八圖

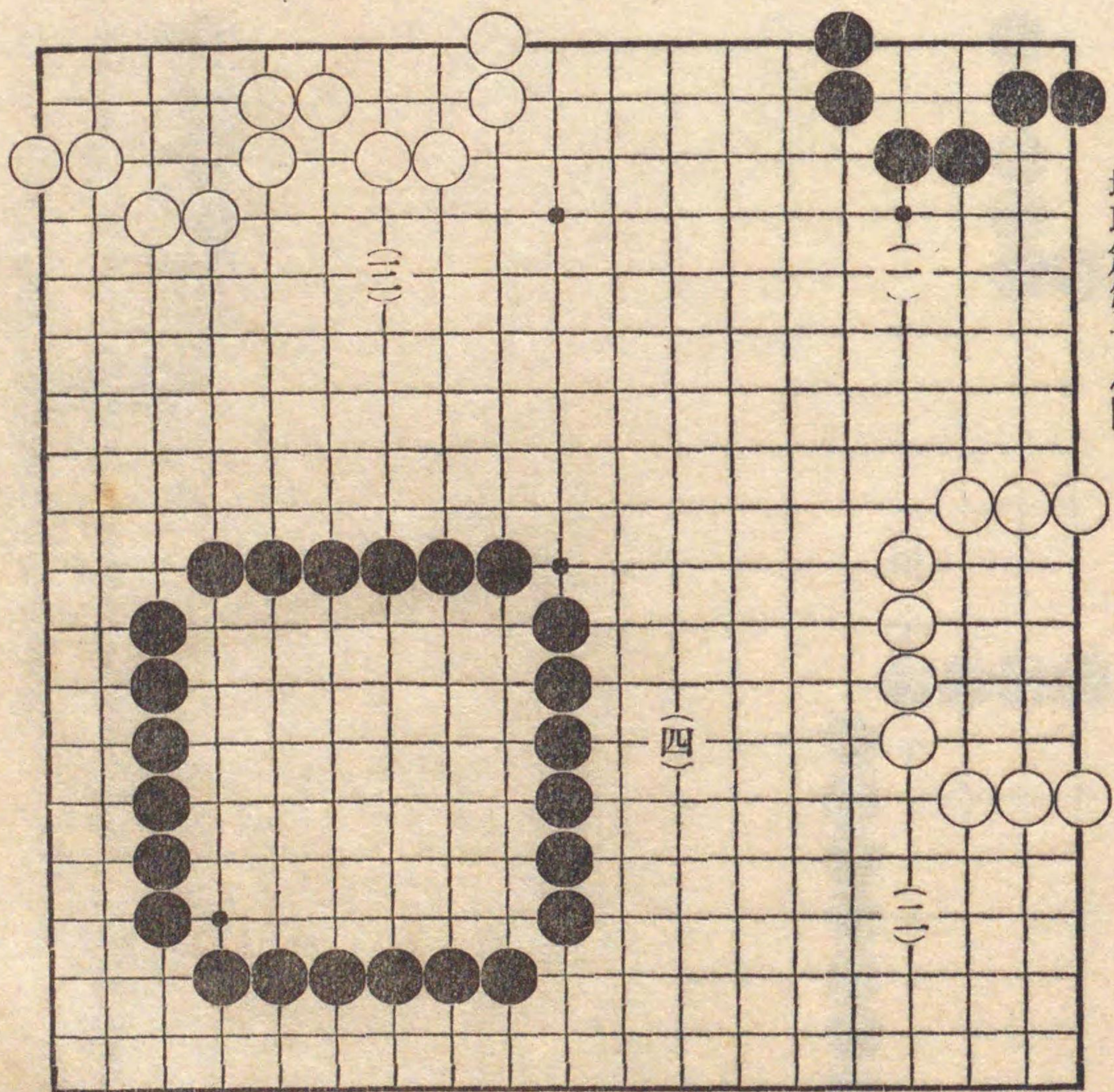
地を作る順序

は、前述の通り隅を第一とし
 次は邊、其次に中となるので
 ありますが、又地は其形の大
 小により、優劣の差あるのも
 云ふまでもありません。

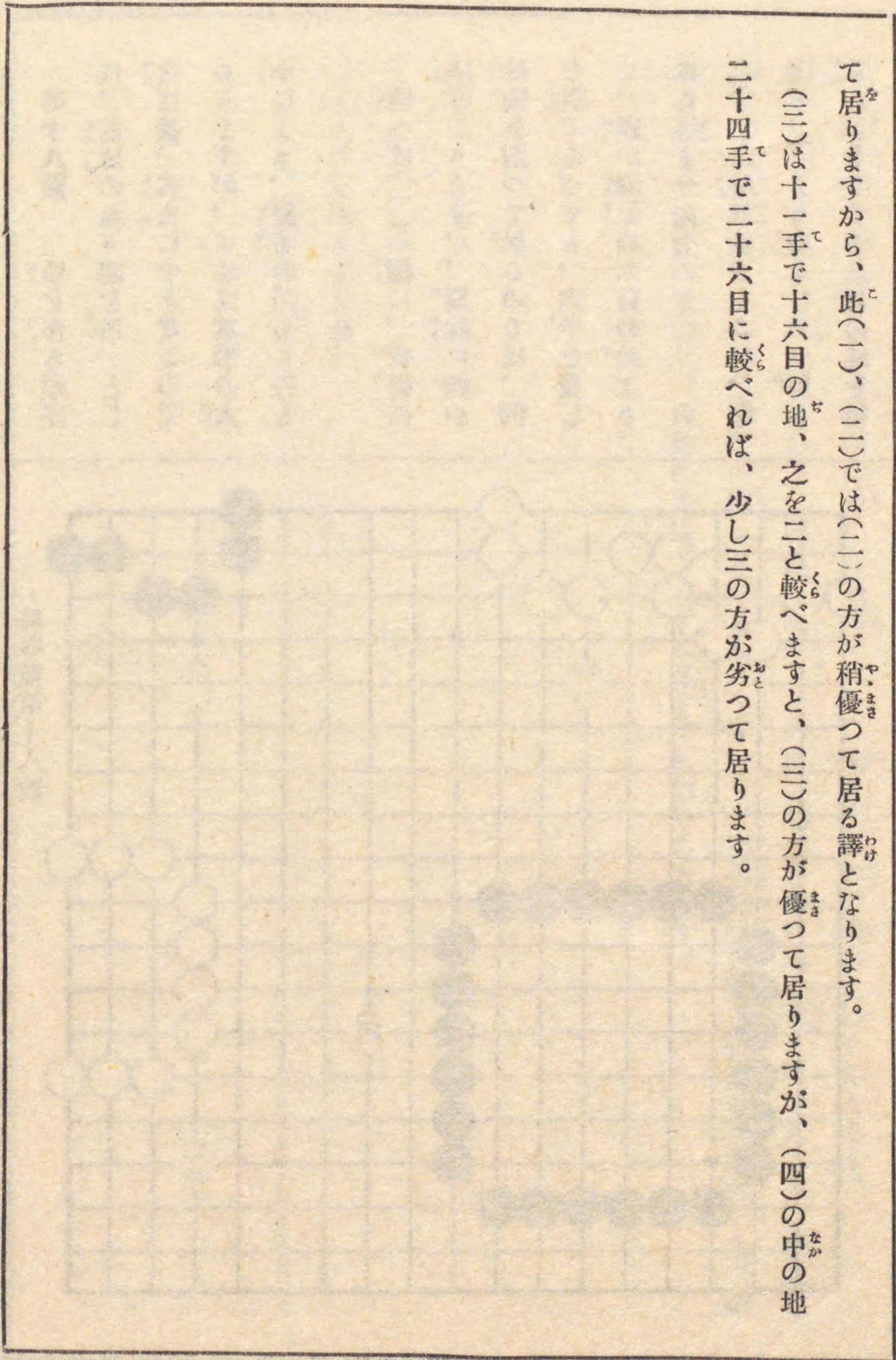
例へば(一)の様に、位置は
 隅であります、斯様に狭い
 範圍を圍つて居るのでは、例
 令隅であつても、六子を費し
 て、僅か同數の六目の地より
 得られませぬ。

(二)は邊であります、範
 圍が(一)より廣くなつて居る
 爲に、十手で十二目の地を得

地取篇第十八圖



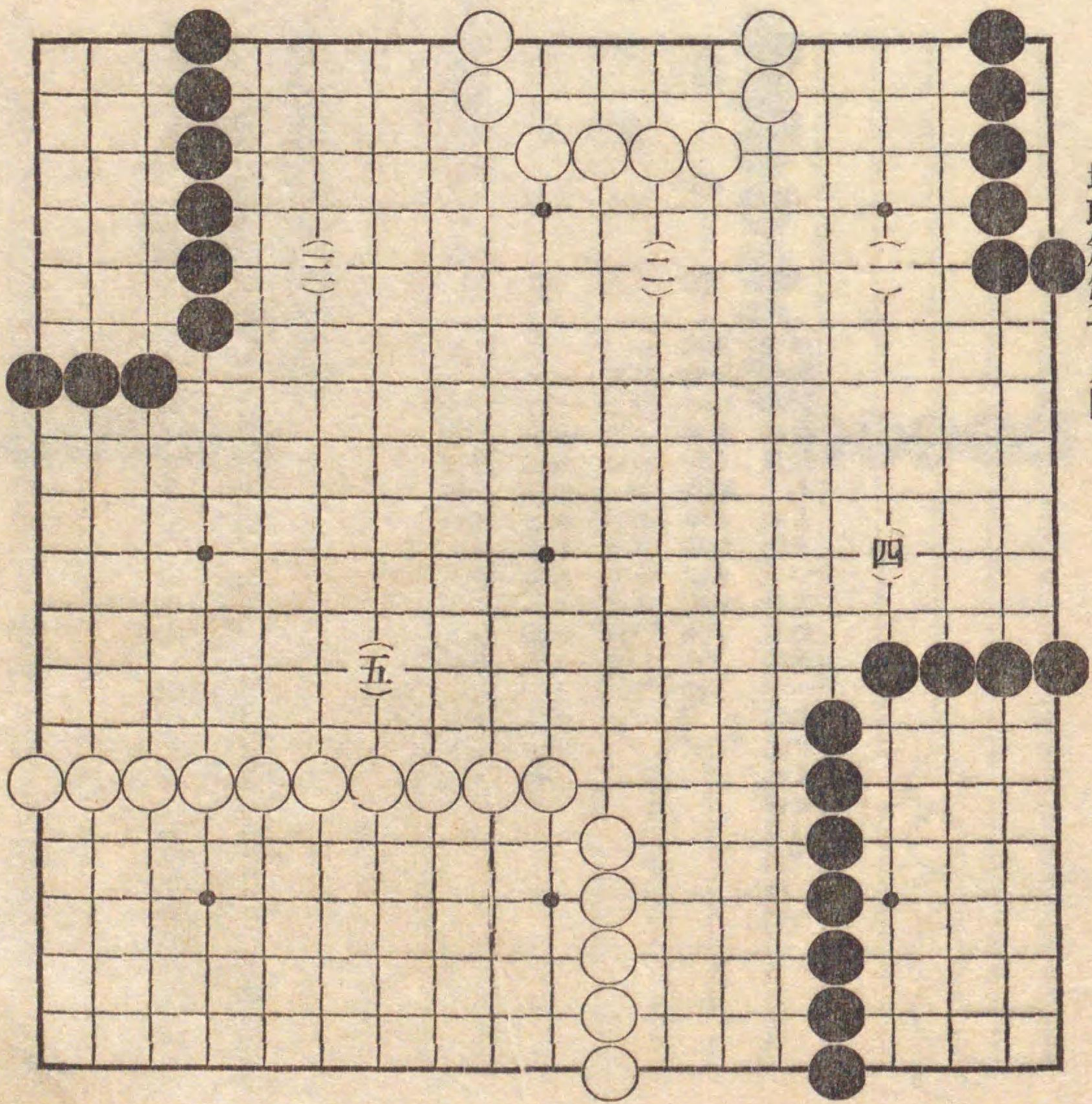
て居りますから、此(一)、(二)では(二)の方が稍優つて居る譯となります。
 (三)は十一手で十六目の地、之を二と較べますと、(三)の方が優つて居りますが、(四)の中の地二十四手で二十六目に較べれば、少し三の方が劣つて居ります。



第十九圖 猶此地の優劣を

順次に區別して見ると、(一)之は隅であります、僅か一線の地でありますから、之は(二)の邊二線の地に較べますと、隅で四目の地を作るに五子を費して居るに對し、邊は八目の地を作るに八子となつて居ります。
 (三)は三線の隅の地で、地の數十八目に對し、石の數は九つでありますから、此地は(二)或は(一)と比較すると、遙に優つて居ります。
 (四)は、隅及び邊に廣がつ

地取篇第十九圖



て居る、四線の地で、地の數二十八に對する、石の數十一でありますから、(三)よりも猶好い形であります。

次に若し(五)の様な地の形になりますと、其廣さは實に五十目で、之に費す石の數は僅かに十五目でありますから、之を(一)或は(二)と較べると、同じ一石でも、地を作る其働きは實に三倍或は四倍にもなつて居る譯であります。

で茲に其優劣を區別して見ますと。

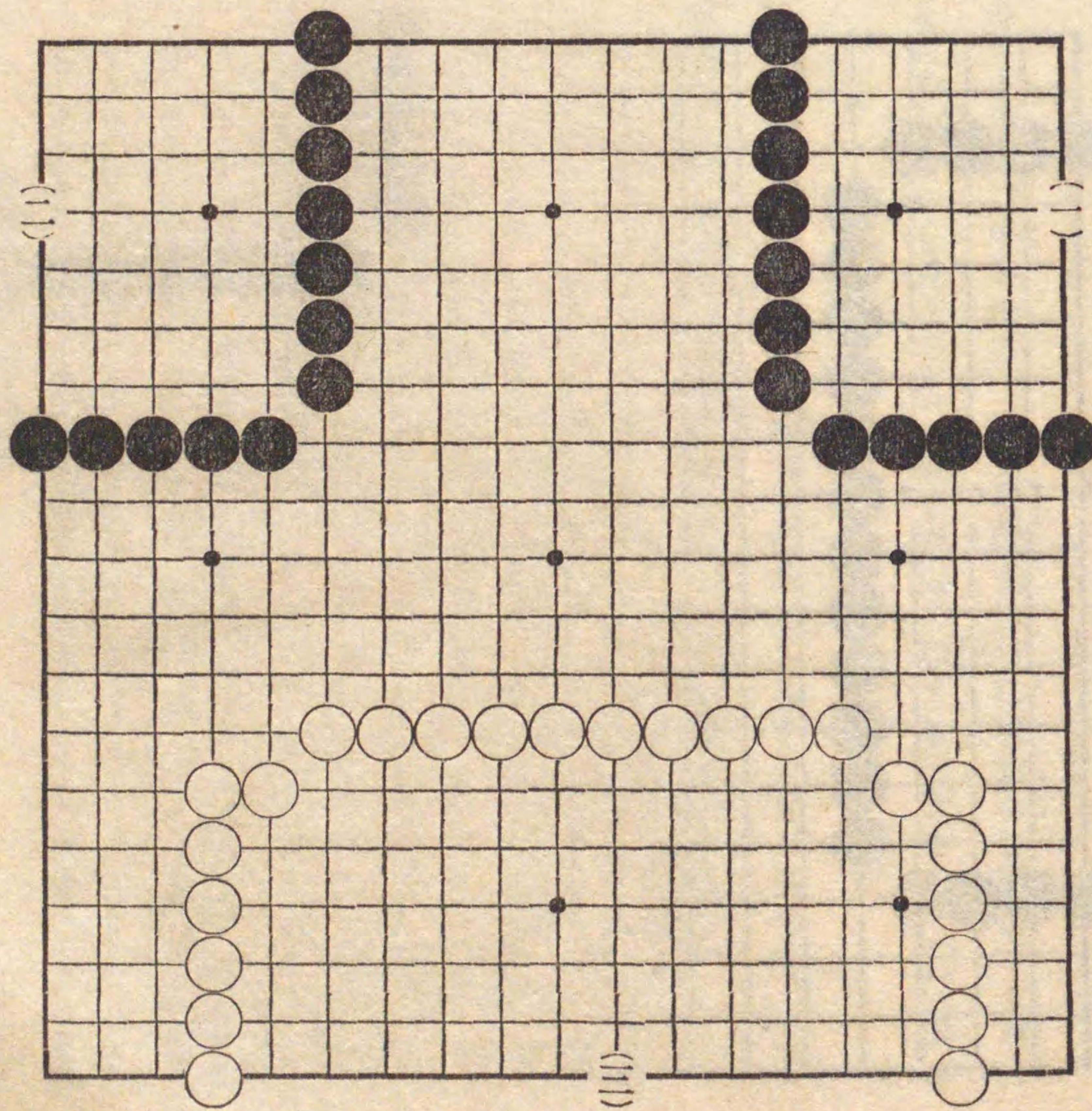
- (一) 一線の地 之を敗線の地と稱へ (若し實戰で斯う云ふ地を作る形となれば其碁は多く敗となります。)
- (二) 二線の地 普通線の地 (二線は普通出來ら地の形で、地として先づ優劣無きものであります。)
- (三) 三線の地 優勢線の地 (三線の地は、地としては優つて居る方でありませぬ。)
- (四) 四線の地 勝線の地 (四線の地を作る事が出来れば、其局は多く勝となります。)
- (五) 五線の(或は以上)地 必勝線の地 (五線或は以上の地を作る事が出来れば其局は必勝疑ひ無しと云つて差支へありませぬ。)

第二十圖 (一)、(二)、(三)

(三)共に必勝線の地の廣さであります、此中(一)と(二)は廣さは三十五目づつ、費す石の數は十二子で、丁度(三)の邊の七十目に對する二十四手と、同價値の地であります。

又斯う云ふ形は、地としての絶對範圍のものであります、此三百六十一路の盤面上之に一着づつ下し、白黒入り亂れてある間に、之丈の範圍の地を圍むのは容易でないが若し之丈の地を圍む事が出来れば、其局は必勝と云つて宜

地取篇第二十圖

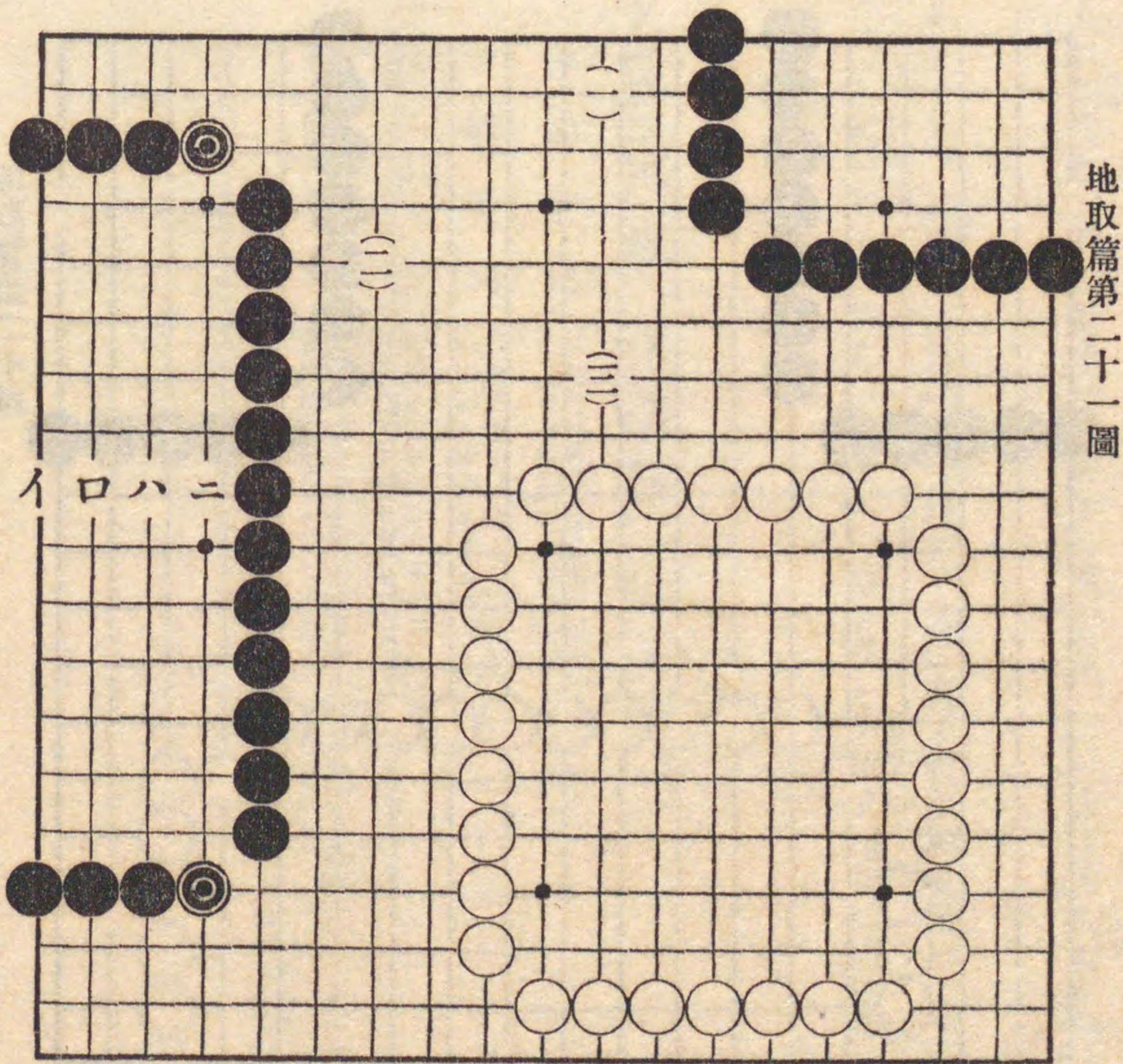


いのであります。

第二十一圖 勝線の地の形

形であります、(一)、隅の四線の地で、二十四目を作るに十手、又(二)は四十八目の地を作るに二十手、隅、邊同價値の地となつて居ります。

前述の通り邊は隅より地を作るに困難であります、圖では、◎から◎まで十二路通して居て、(一)の六路と異ひ、其間にイ、ロ、ハ、ニの境界線を略して居りますから、同じ四線の地でも此隅邊は同價値の地となつて居ります。



地取篇第二十一圖

す。

又(三)の中の地は廣さは六線もありますが、中の地は、四方を圍まなければ完全な地とする事は出来ませぬから、之を廣さに對する石の割合から見ますと、五十六目に對する三十手で、(一)或は(二)より稍劣つて居ります。

然し又一面から見ますと、中の地を得る時機は、隅邊を終つて後でありますから、先づ之の廣さの地を得れば、(一)、(二)と同價値のものと見て、勝線の地と云つて宜いのであります。

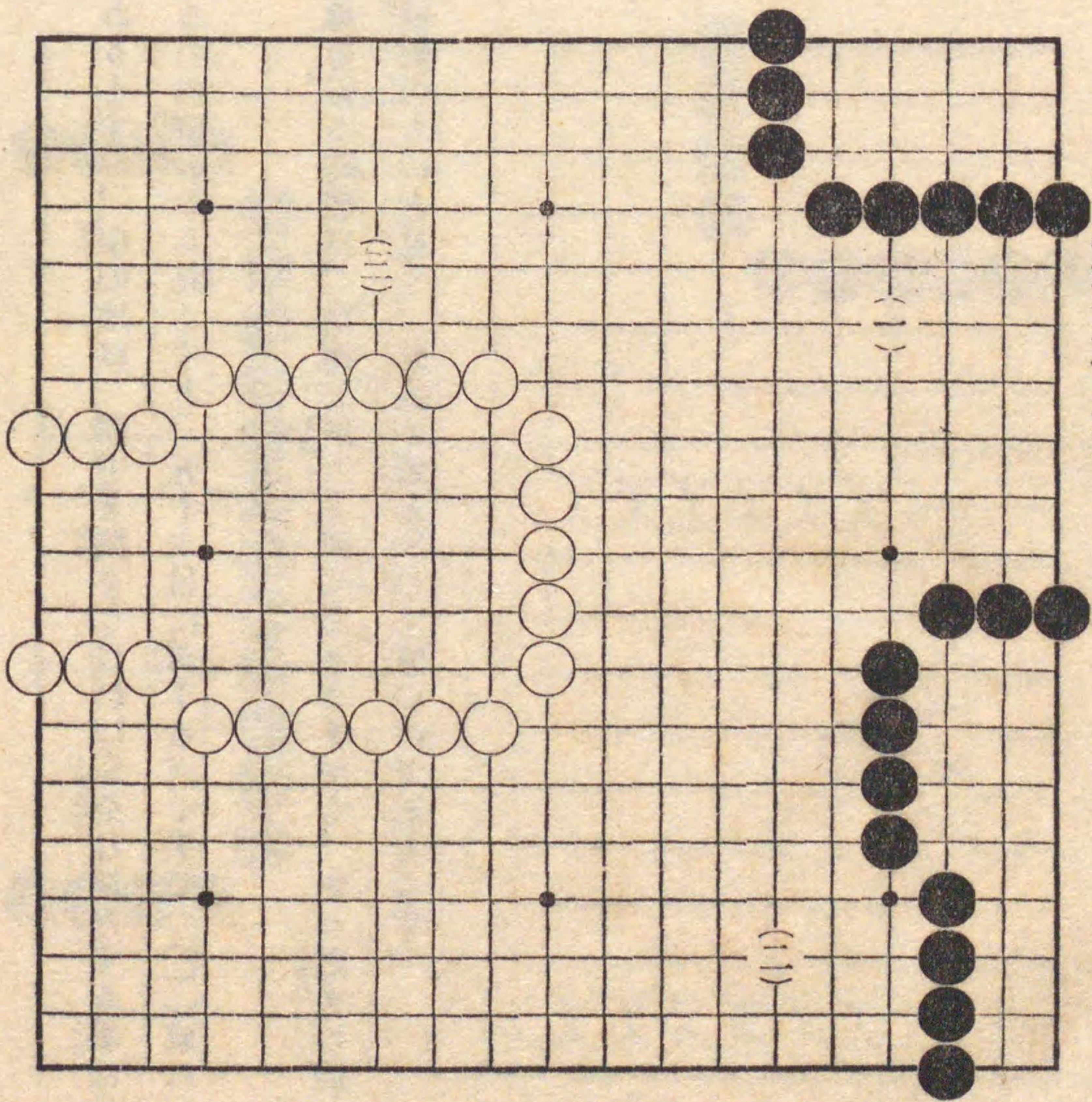
第二十二圖

優勢線の地

であります、前の勝線、必勝線の地に較べては、大層劣つて居りますが、然し實戦で之丈の地を作る事が出来れば、地取りには成功したと云つて宜いのであります。

此中(一)は三線の隅の地、(二)は二、三線の隅の地、(三)は邊中に連続する地で、地の廣さは異つて居りますが價値としては先づ同じであります。

(二)は二、三線であります、隅邊に連続し其間に境界



地取篇第二十二圖

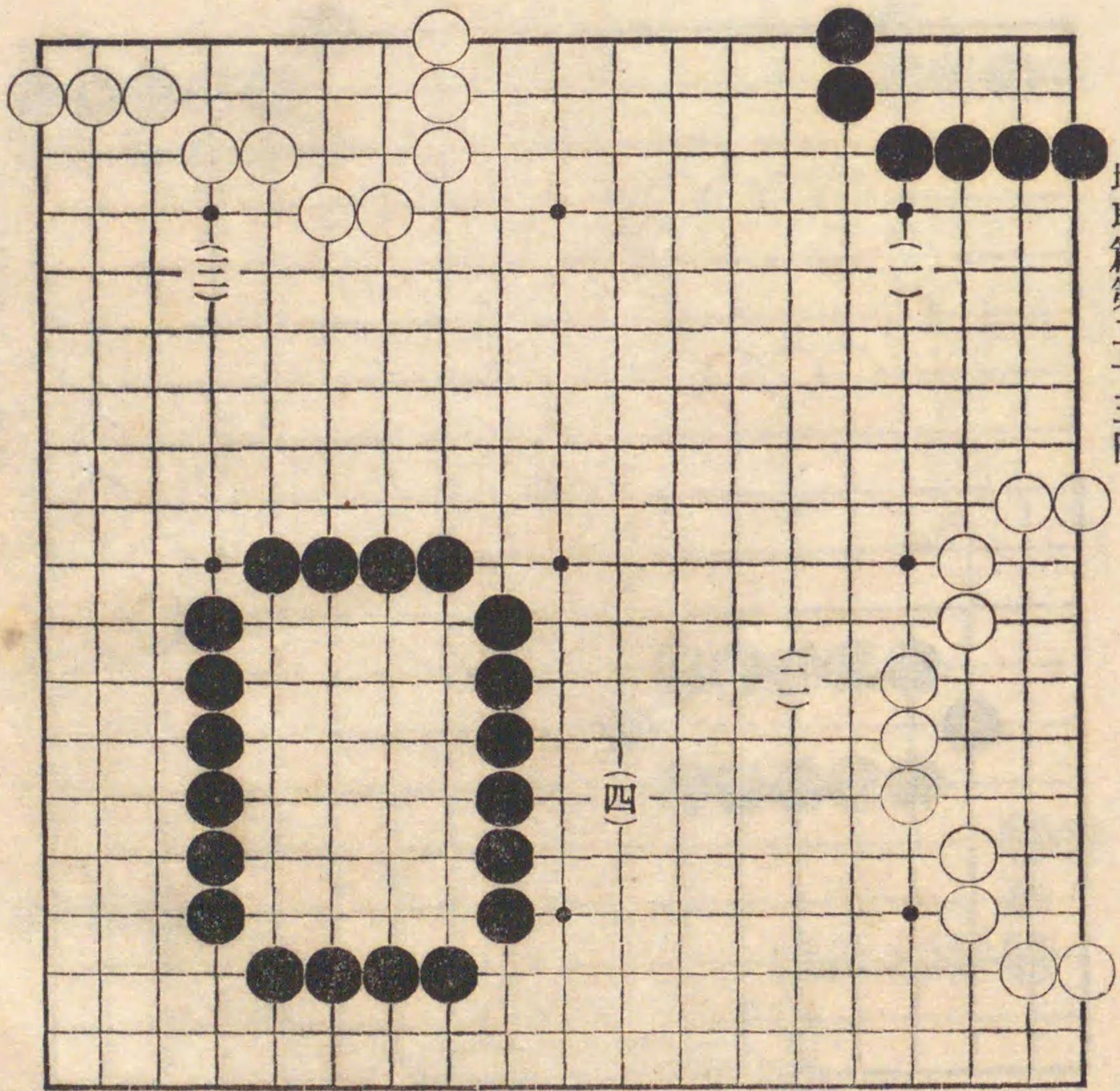
線の無い爲に一と同じく、又(三)は中に向て廣くなつて居りますが、位置が邊から中に向て居る爲に、之等も(一)、(二)と同じく優勢線の地の形であります。

第二十三圖

普通線の地

で、此地は一般對局に見る形であります。

で此(一)、(二)、(三)、(四)四つは先づ同じ價値のものであります、猶此中、強いて優劣を論ずれば、(二)の十七目に對する十手を第一とし、(一)の八目に對する六手を



地取篇第二十三圖

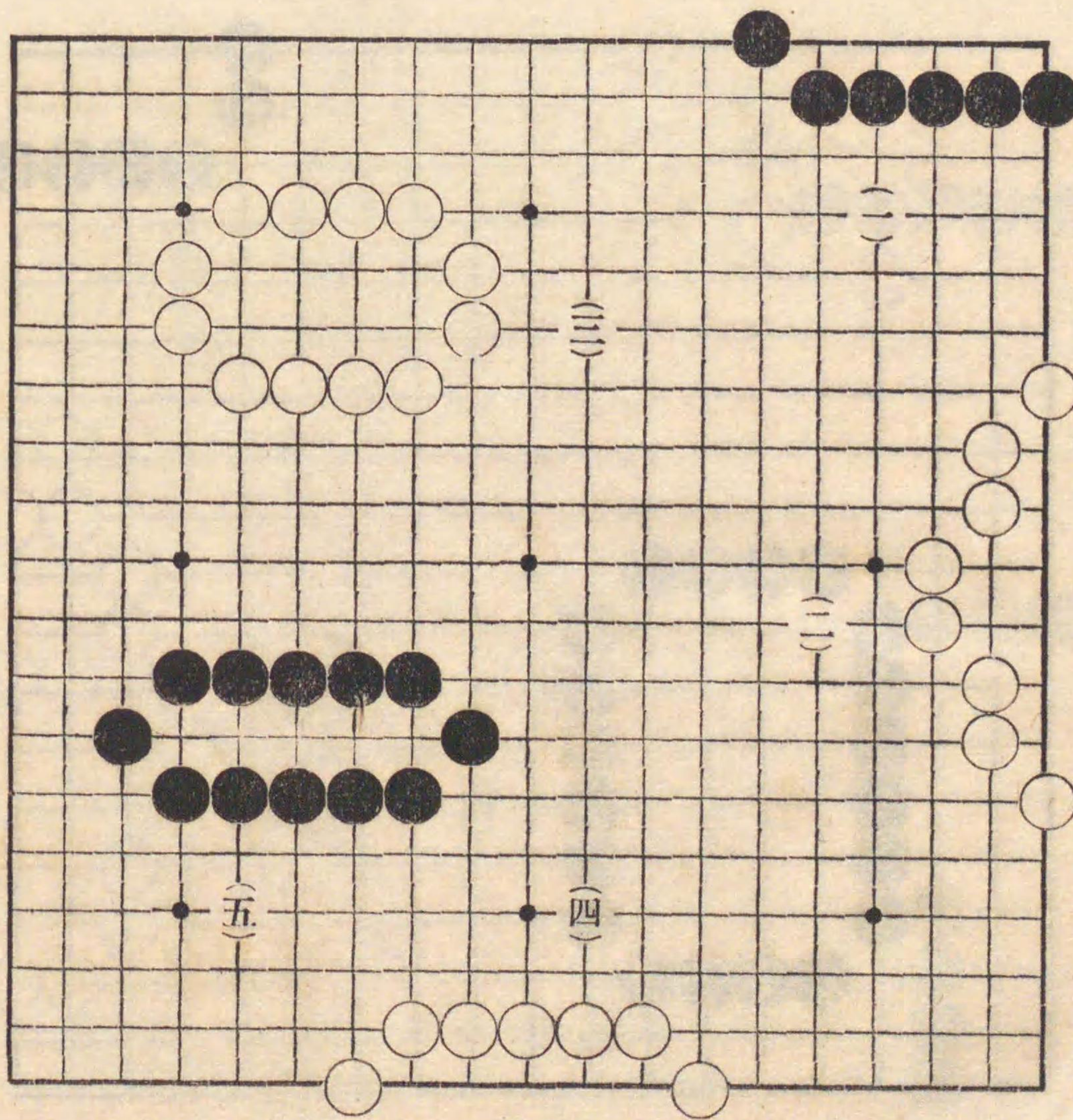
二、(三)の十三目に對する十手を三位とします。

次に中の地は、四線で一見可なり廣く見へますが、其着手の割合から云ふと二十四目に對する二十手で、(三)よりも劣つて居ります。

第二十四圖 之は皆敗線の地で、地としては一番價値のないものであります。

で斯う云ふ地の形は、實戰では常に注意して、石を活きる時の外は圍はぬ様にしなければなりません、若し止むを得ず斯かる地を圍はねばなら

地取篇第二十四圖



ぬ時とは何か工夫して、振替りを打つとか、或は石を捨てるとか、他の手段を講ずるのが宜いのであります。

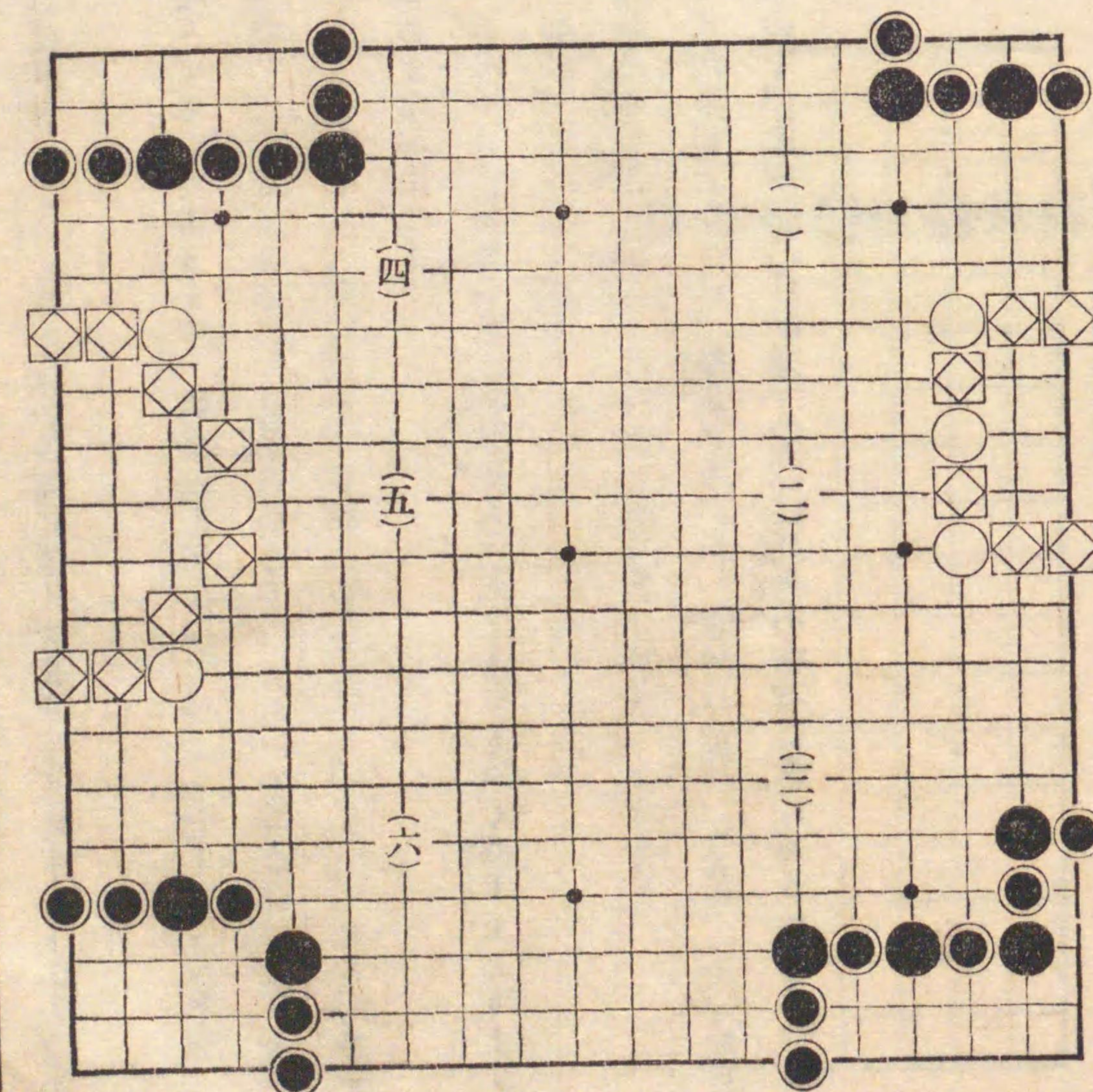
地の圍ひ方

第二十五圖

地の大小は

大略前の様なものであります。が、然し實際の對局に、地を圍はうとするに、前の圖にある様に一つ々々石を粘り合せて圍つて居るのでは、まだ圍みきらぬ間に他方面から、敵に侵入さるゝか、又完全に圍ひ終したとしても、一つ所ば

地取篇第二十五圖



かりに斯く多くの手をかけて居れば其間に、敵に他の廣い方面に盡く先着を下されてしまふのであります。

處で此處に着手の省略法を必要とするのであります。省略法と云ふのはつまり四手かゝる處を二手で大體の形を作り、あとは、彼我の石相接する中に、自然に固くすると云つた様な方法で之を圖について見るに、一で隅の地を得ようとするに、黒は二着で大體の圍みをして置けば、あとの●●は、彼我の石接する内に自然に堅める事が出来ます。

然し此形は、前述敗線の地で、實戰でこんな低い處に着手するは云ふまでも無く悪手であります。少くも(二)、或は(三)の様に、一路高く第三線に着手するが宜いのであります。

先づ(二)では、白三着で圖の様な地となし、(三)では四着で地を作つた形であります。

然し之れでもまだ、單獨に圍つて居る形としては、堅過ぎるので、普通は(四)、(五)、(六)の様に配石すれば地とする事が出来るので、此中(五)は置碁、(六)は互先の布石に常に見る形であります。

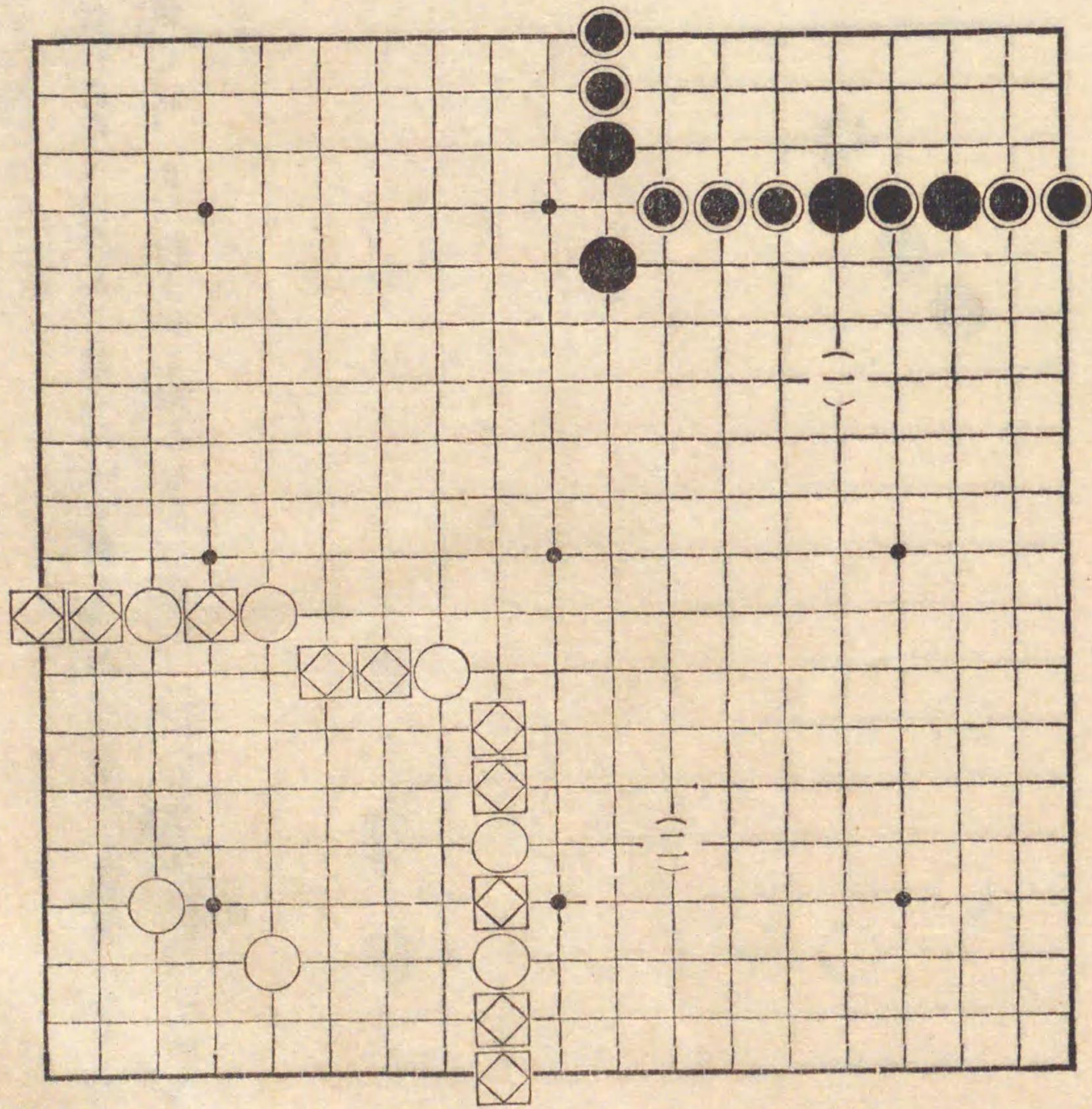
第二十六圖 地の圍り方


は千差萬別であります、四方の形勢如何によりても異り、又其圍ふとする近くの白黒の有り工合によりても異なるのであります。

然し之等の白黒の石に關係なしに單に地を圍ふとすれば圖の(一)或は(二)の如き配石で、之等は先づ形としては申分の無いものであります。

其中(一)は、黒四着で大體地となし得る恰好を作つたもので、此中隅の一間飛は隅の守り、次に邊の一間飛は隅から

地取篇第二十六圖



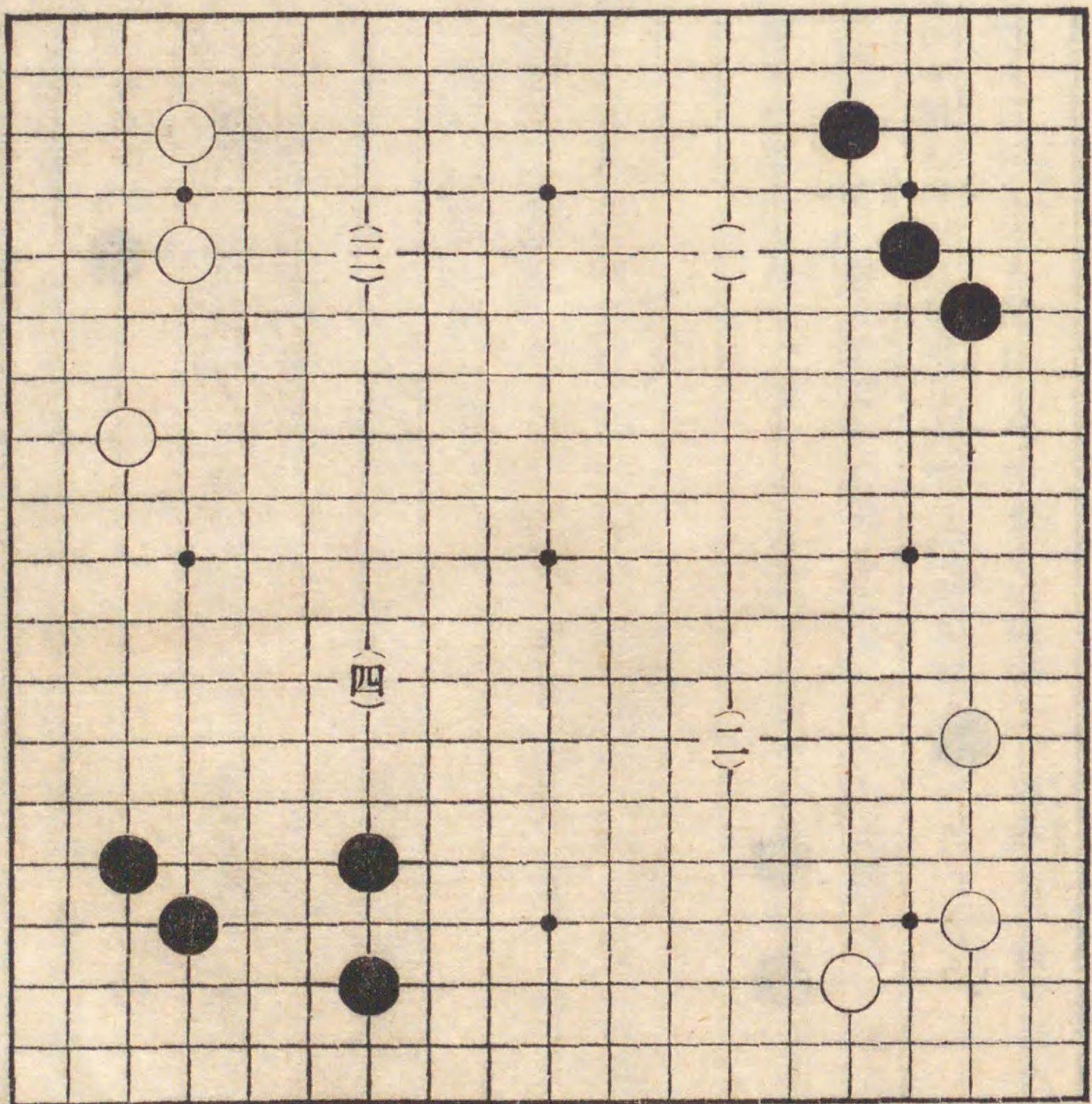
邊に地を擴張し、其上中に向て進んだ形であります。
 (二)の形では、で區畫した様に此中へは黒から飛込む隙も無く、白は七手で必勝線に近ひ地の形を得られますが、然し普通實戰では、まだ斯う云ふ形とならぬ前に、黒から中へ這入つて此地を薄くするのが普通となつて居ります。

第二十七圖 (一)、(二)

(三)、(四)共に互先或は置碁の配石に通常見る形であります。

次に若し斯う云ふ地の形を成した中へ敵が無理に飛込んで荒しに來たとすれば、其時は如何に應答するが宜いかと云ふと、其時は其打込んだ石の眼形を奪り攻むるのは云ふまでもないので、若し之を死とする事が出来れば勝であります。又例令此石を活きたとしても、我石が連絡して居れば、自然外を圍む事が

地取篇第二十七圖



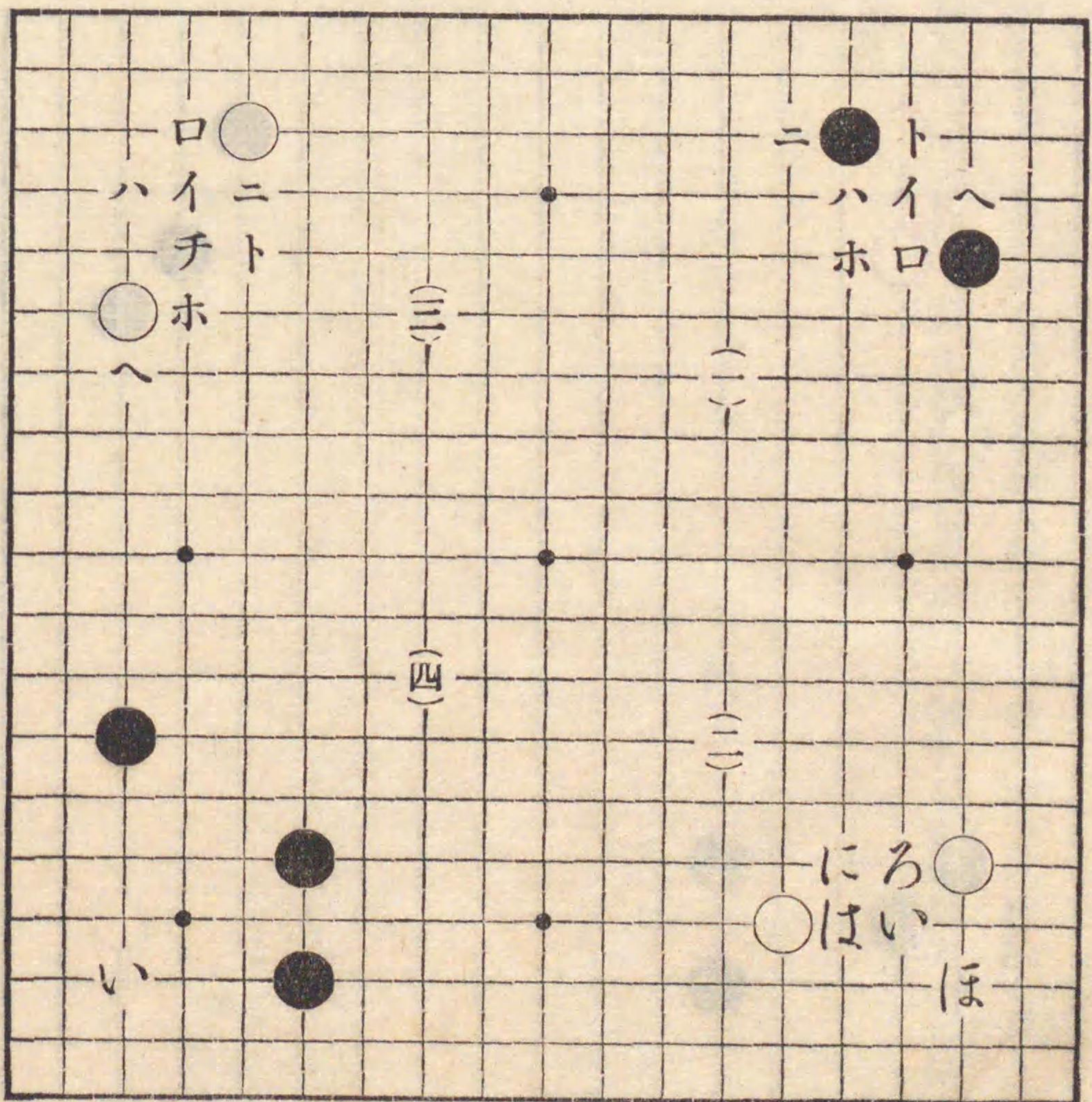
出來、外勢は非常に強いものとなるのであります。

で次には此強い勢を利用して敵地に打込む事も出來、又中央に廣い地を作る事も出來るのであります。

第二十八圖 前に述べた

通り、地を圍ふには優勢線よりも勝線、又勝線よりも必勝線と、成るべく廣い範圍の地を成すのが宜いのは、云ふまでもありませぬが、然し其處には死活等の變化もあつて、只初めから廣くばかり打ても決して地になるものではあり

地取篇第二十八圖



ませぬ。

前の勝線、必勝線の地は、局面の色々に變化する間に、外の石との關係上、巧妙な手段で初めて確定するもので、決して只圍つてばかり居るのでは斯様な大地は出來る事は稀であります。

第二十八圖の(一)、(二)、(三)、(四)は、共に形は前圖から見ると廣く、若し此圍む方で地とすれば申分はありませぬが、此形では着手に連絡も無く、又あまり廣過ぎるので、或る時機に敵に打込まれ、破られてしまひます。

其中(一)は、黒二着の石に連絡無く、此時白にイに打込まれると、地を破られるばかりで無く、黒は石を割かれる形となります。其變化は、此時ロに打てば、白ハ、黒ニ、白ホ、黒へ、白トとなり。又黒ロの手をハに打てば、白ロ、黒ト、白へとなります。

次に(二)、之は白〇〇は連絡のある形でありまして、此時黒いに打てば、白「ろ」、黒「は」、白「に」と打つて、白は石を連絡しながら、黒を圍む事が出來ます。

處が此構へ方は、あまり隅を廣く取り過ぎて居る爲に、或る時機に、黒に「ほ」の急所に打込まれると、樂に黒に活きられてしまふのであります。

(三)も亦(一)と同様、白石に連絡の無い形で、黒にイと打たれ白ロなれば、黒ハ、白ニ、黒ホ、白へ、黒トとなつて白悪しく。又初め白ロの手をニに打てば、黒チ、白ホ、黒トとなるので、之も

同じく白は石を隔てられる形となります。
 (四)は、黒三石で隅に構へて居りますが、之もあまり廣過ぎる爲に、(二)の様に「い」の急所に打込まれる手が残つて居ります。
 故に此四つは、何れも地を圍ふ形としては不完全のものであります。

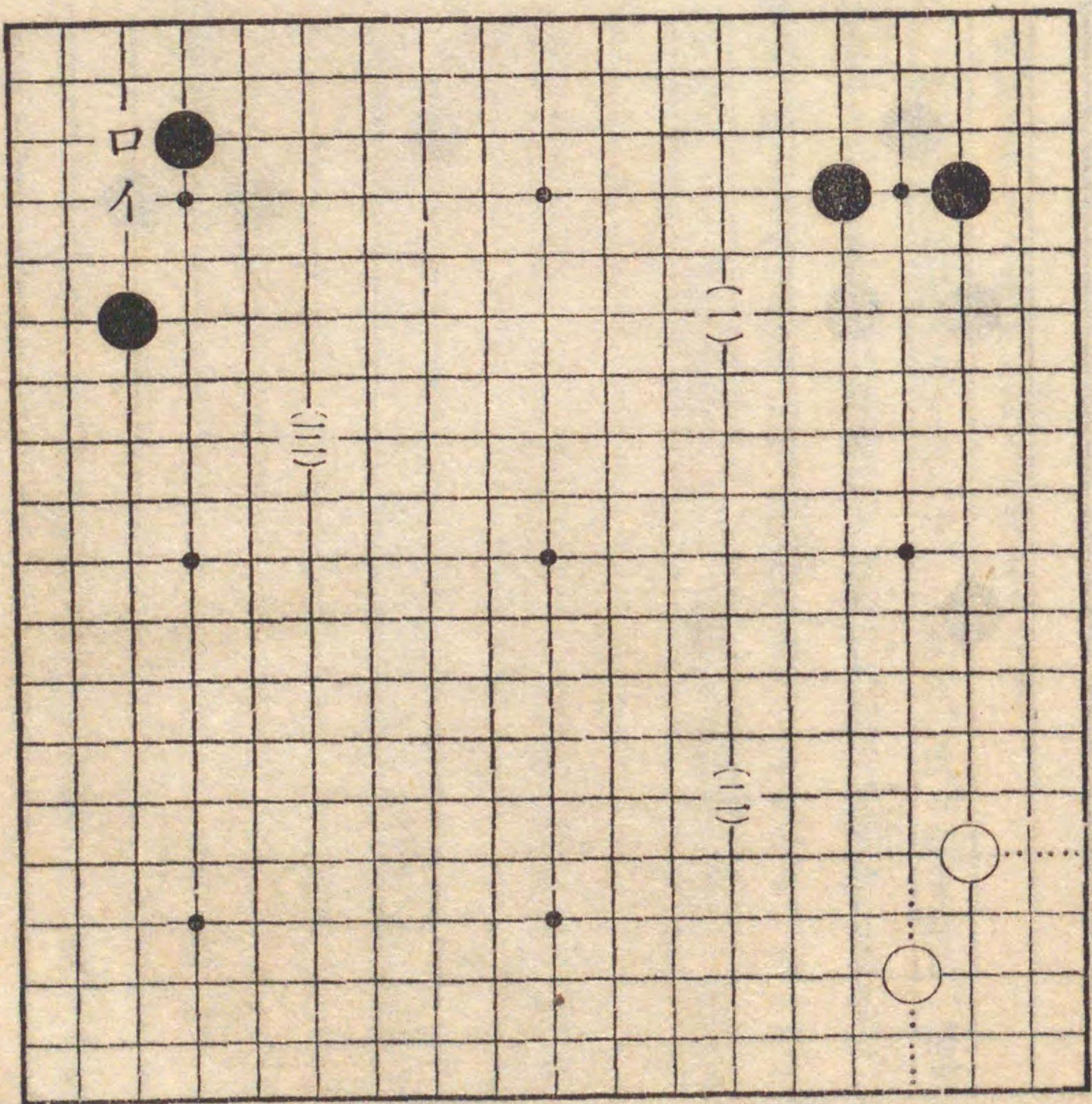
第二十九圖 然らば地を圍

ふ形としては、何う云ふのが完全であるかと云ひますと、本圖にある様に、隅では一間飛、次に小斜走、大斜走の三つの形であります。

(一)、一間飛は前に述べた通り石を中央に發展させる手としても、一番宜い手でありませんが、又圖の様に隅を堅むる手としても、一番好い形であります。

(二)、之は小斜走に圍つた形で、斯く堅固に守つてあると、點點の範圍内の隅は先づ

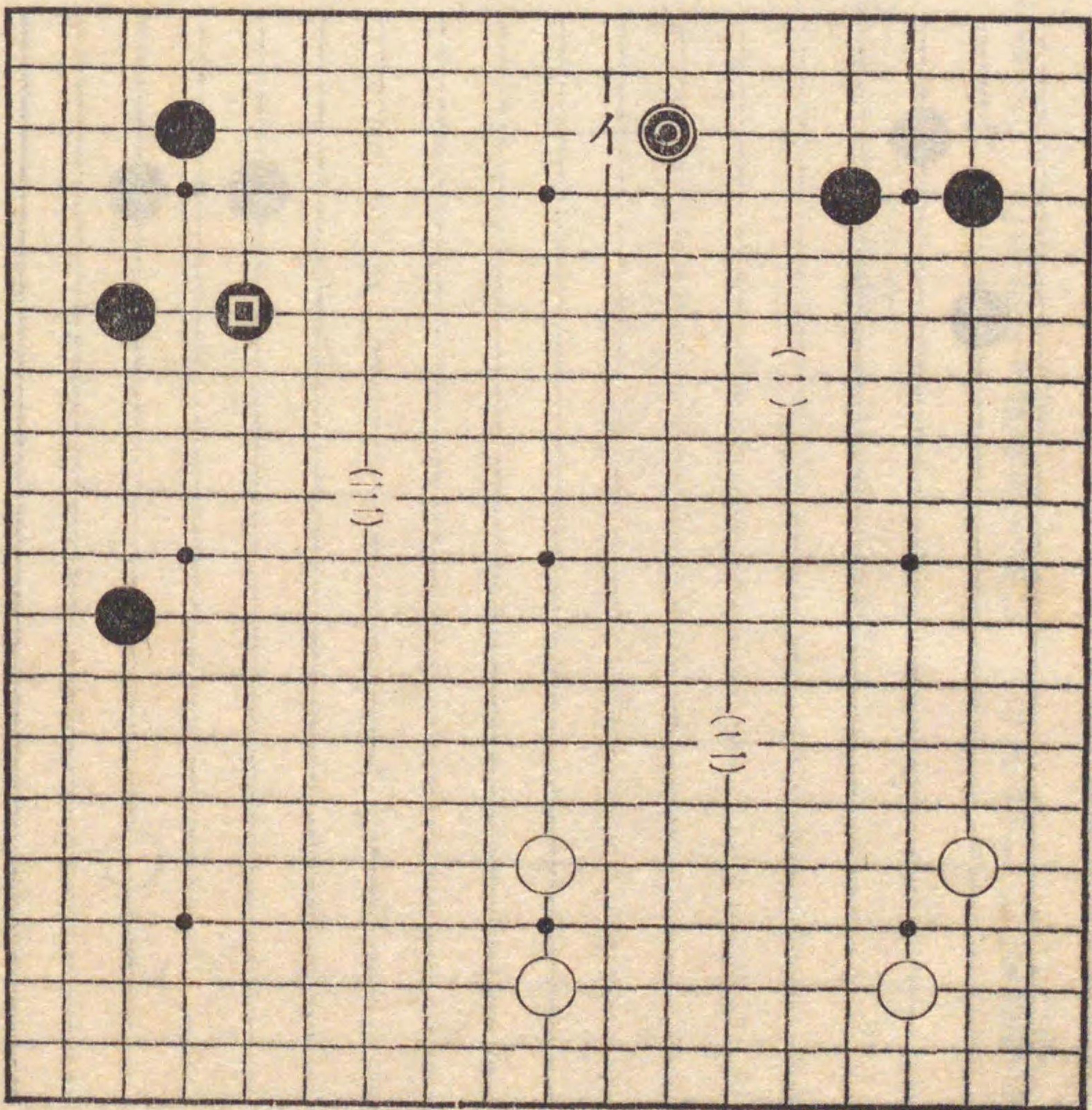
地取篇第二十九圖



地取篇第三十圖

白の地と云ふ事が出來ます。
 (四)は大斜走の構へで、此構へは石に連絡もあり、又地と成つてしまへば、(一)、(二)よりも廣く取れますが、只形勢によつて、白にイ或はロと打込まれ活きられる手が残つて居ります。

第三十圖 隅が終つて、次に邊に發展するには何う云ふ風に打つて行つたら宜いかと云ふと、之は敵の石との關係上、一樣に此形が善いと決定したものはありませぬ。詳細は以下布石の内で説明すると



して、茲には其簡單な例を一、二擧げて見ますと。

(一)、黒一間飛から◎の大斜走、或はイの大々斜走に拓くのであります。で隅から邊に拓くには、前の様に一間或は小斜走と狭く打たず、大斜走、大々斜走或は一層廣く拓くのが宜いのであります。之は何故かと云ひますと、詳細は次の布石の内では説明致しますが、之に二つの理由があります、一つは邊は、隅より活を得るには、困難な場所であるのと、今一つは敵が若し打込んで来れば、優勢な我石を利用して、之を攻撃するので其結果は前述の通り、死活共に有利な分れとなるからであります。

(二)小斜走の堅めから白は星下に廣く拓いた形で、次に此石から、上に一間に打つて、邊の地を守ると共に、中に發展した形であります。

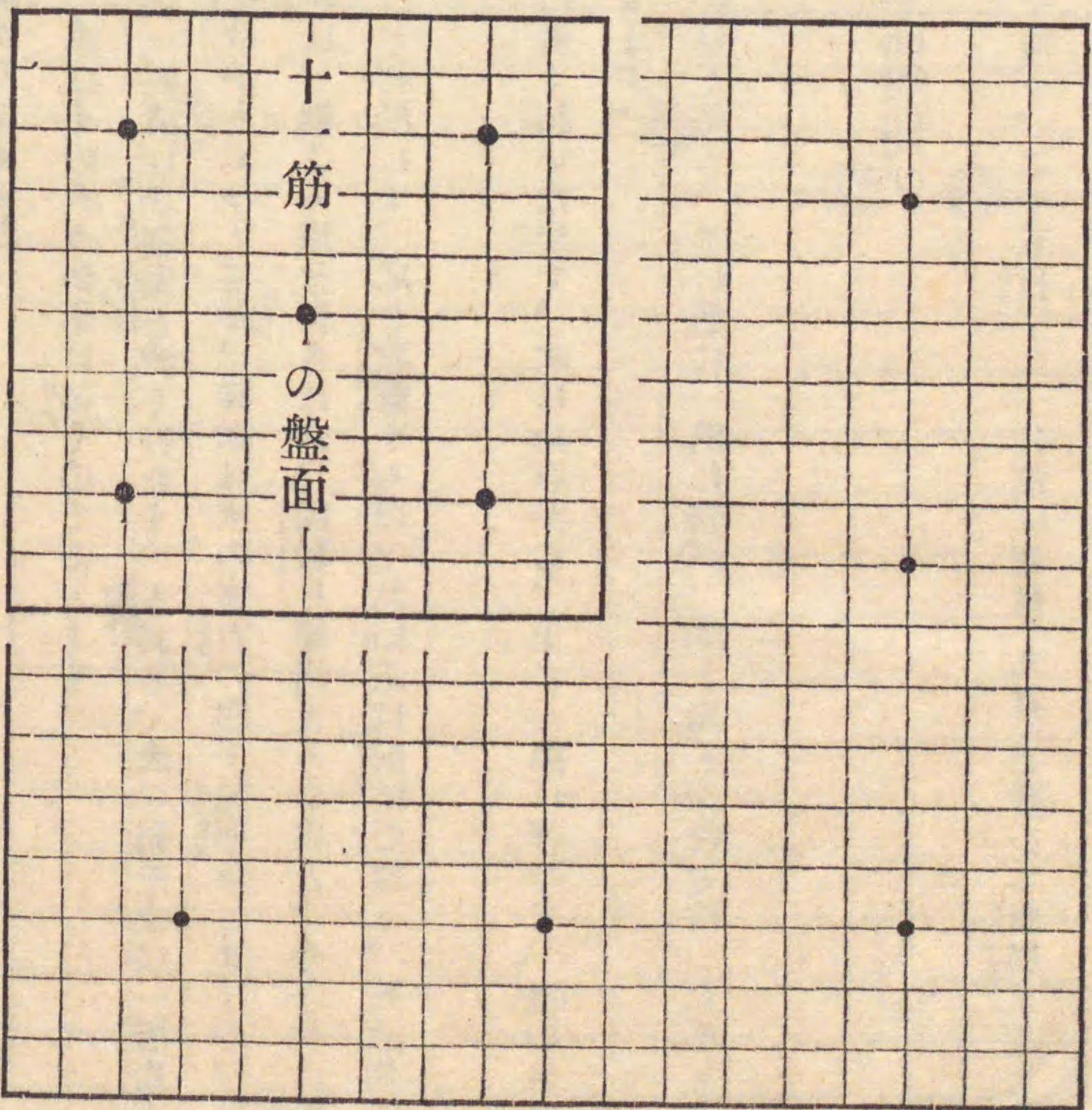
(三)、大斜走から、黒は星ワキに廣く拓き、次に◎に一間に飛び、隅と邊とを併せ守つた形であります。

十一筋の盤面對局法

碁の研究の初めには、前に述べた通り、二十五目、二十目或は聖目(九目)を置いて對局するを普通とします。

此多數置碁によりて、實地練習するにも上達法として必要であります。又一方法は互先或は二、三目位の對等の敵手と對局するのであります。處が此十九筋の盤面では盤面があまり廣過ぎる爲に、最終まで打進む間には、時として何う打つて宜いか、判斷に迷ふ様な局面となる事もあります。之を防ぐ方法としては、以下説明致します。十一筋盤面對局も、互先或は二、三目位の近い碁では、一つの宜い方法であると思ふの

地取篇第三十一圖



であります。

前に述べました、七筋の盤面も、變化には變りはなく、勝敗死活等の大要を知るには便利であります。之は餘り狭過ぎるので、實地對局には稍不適當と思はれるのであります。

十一筋の盤は、廣さにすれば十九筋の盤の先づ三分の一であります。然し此廣さでも、其中に起る種々な變化は、通常の十九の盤と少しの變りも無く、却て簡單明瞭で、勝敗の結果も早く知る事が出来、興味の深いものであります。

第三十一圖 先づ十九筋の、盤面の中の點々の星の數は、九つで此九つは盤面を區劃するに必要の點であります。十一筋の盤では、廣さから見て、五つ（圖の點々）が適當の數となつて居ります。

石を置いて打つ時には、此點々の上に置いて打つのであります。此五つの置石の數は、効力は十九筋の盤と比較して遙かに強く、若し十一筋の盤で五目を先きに置いてかゝるとすれば、普通の盤の十七目位に相當すると思はれます。

又此五つの中、隅の四點は、所謂三ノ三で、一隅の勢力を占め、中の一點は同じく天元で、四隅に次での最緊要の點となつて居ります。

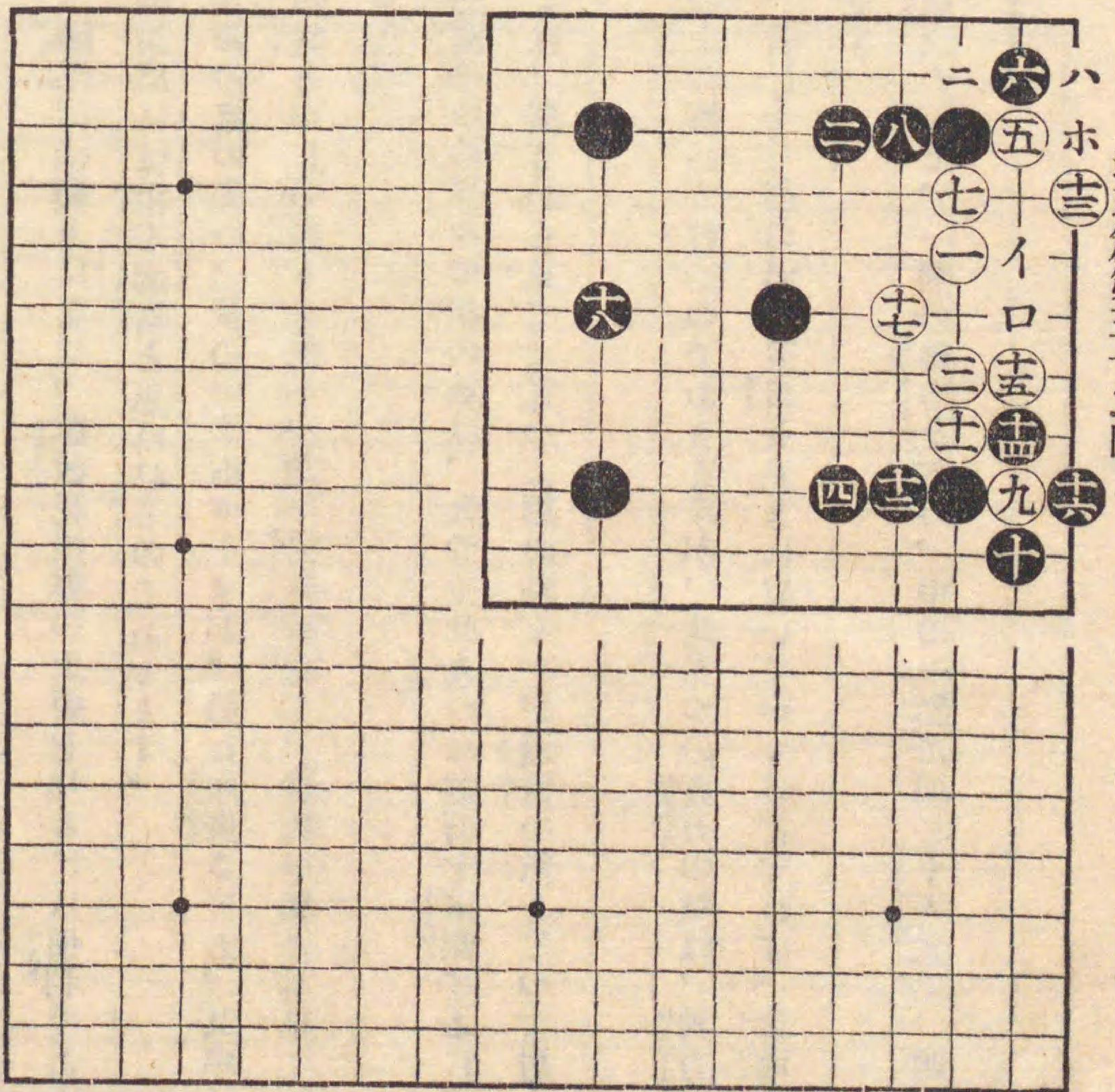
第三十二圖

先づ初めは

五目置碁を研究する事と致します。此五目は前に述べた通り普通の盤の十七目に相當するもので、若し同じ力で五目先きに置いてかゝれば、殆んど敵に活路の無い迄、全部の石を取つてしまふ事も出来ませんが、此處では黒は極く堅固な方法により打進む形を選んだのであります。先づ白一のカ、リに對して、黒は二に應け白三、黒四と、我石を守つたのであります。

白五、七は、黒に六、八と

地取篇第三十二圖



應けられて、普通は黒の形を堅くして面白くない手ではありますが、此形では、白の一、三を活の形とする必要上止むを得ぬ手であります。

白九、十一も前と同意味の手、次に白十三の掛粘となりて白は完全に活の形となりました。

故に黒も十四に切り、白十五、黒十六と一目を提りました、で斯かる一目の切提は損益の上から見て大層大きい處で、普通の局面でも必争の要點であります、此處では特に、白の眼形の關係上先手となつて居ります。

次に白十七で十八の邊に打つて、猶此方面の黒の地を破らうとすると、黒先づイに置き白ロ、黒十七と打つので、次に白ハに打つも、黒二と粘ぐ迄、イの方面は白は一眼より無く、ホは缺眼、其上に逃出す手もなく白死となります。

故に白十七と打つたので、斯う打つて置けば、白は確に活となつて居ります。

黒十八は、此形では唯一の好點で、斯く守つて置けば、如何に置碁でも、もう白から此狭い間にワリコンで活とする手もなく、従つて黒必勝の局面となつたのであります。

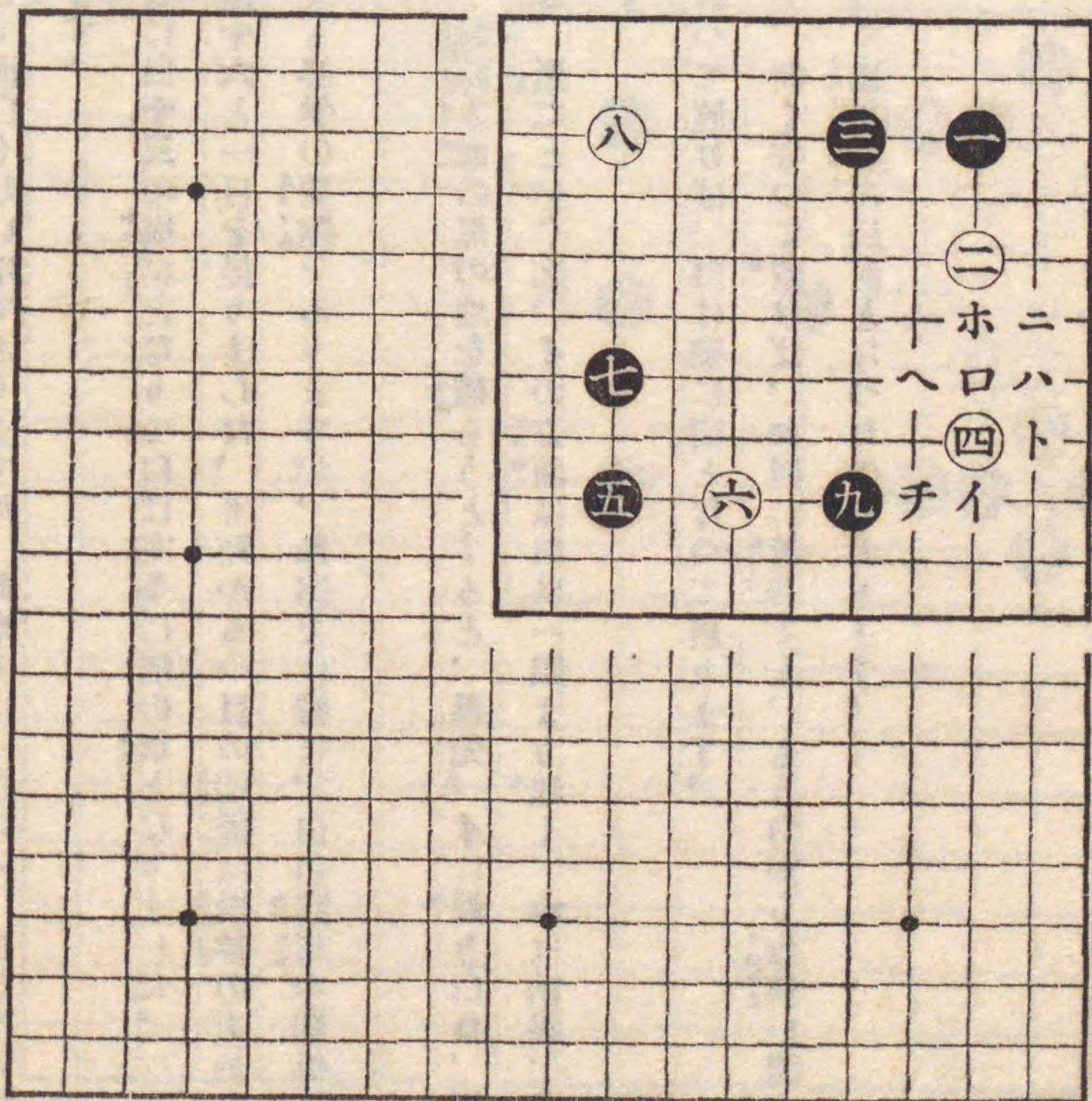
第三十三圖 次は互先の

打方について説明致します。
先づ黒一の手、斯様に三ノ三に據るのは、十一筋の盤面では、確かに隅を占領して居て一番好い打ち場所となるのであります。

次に白二は、黒一と同様五の三ノ三に據るも無論善い處でありますが、夫れでは黒と同形となつて、面白くありませんから、變化して白二と打つたのであります。

黒三は、白二に對する確かな應手で、斯う打てば、隅の

地取篇第三十三圖



地を守り、且つ白二を攻める形ともなりますが、若し此手を手を抜いて五の邊に打ちますと白に三と夾まれて、却て黒が攻められる形となります。

白四は、二を守り、且つ隅を取る好手で、此處ではイに打つよりも優つて居ります。イに據れば口の打込が残つて居りますが、圖の様に二間拓にして置けば、次に黒ロに打つも、白ハ、黒ニ、白ホ、黒ヘ、白トに打ち、ニの黒は死となります。

黒五、白六に對する黒七は、前の一、二、三と同意味の手、此時白八でチに打つても好い所でありまして斯う打つて置けば隅が堅くなり、黒からは最早打込む手はありませんが、其代り黒に八と好所に打たれます。此點は此形での唯一の好點でありまして、黒から此處に打たれますと、三隅を黒に占領せられ、之に對し白は一隅でありますから、假令白は、多少の地を邊に作つても到底勝はあませぬ。

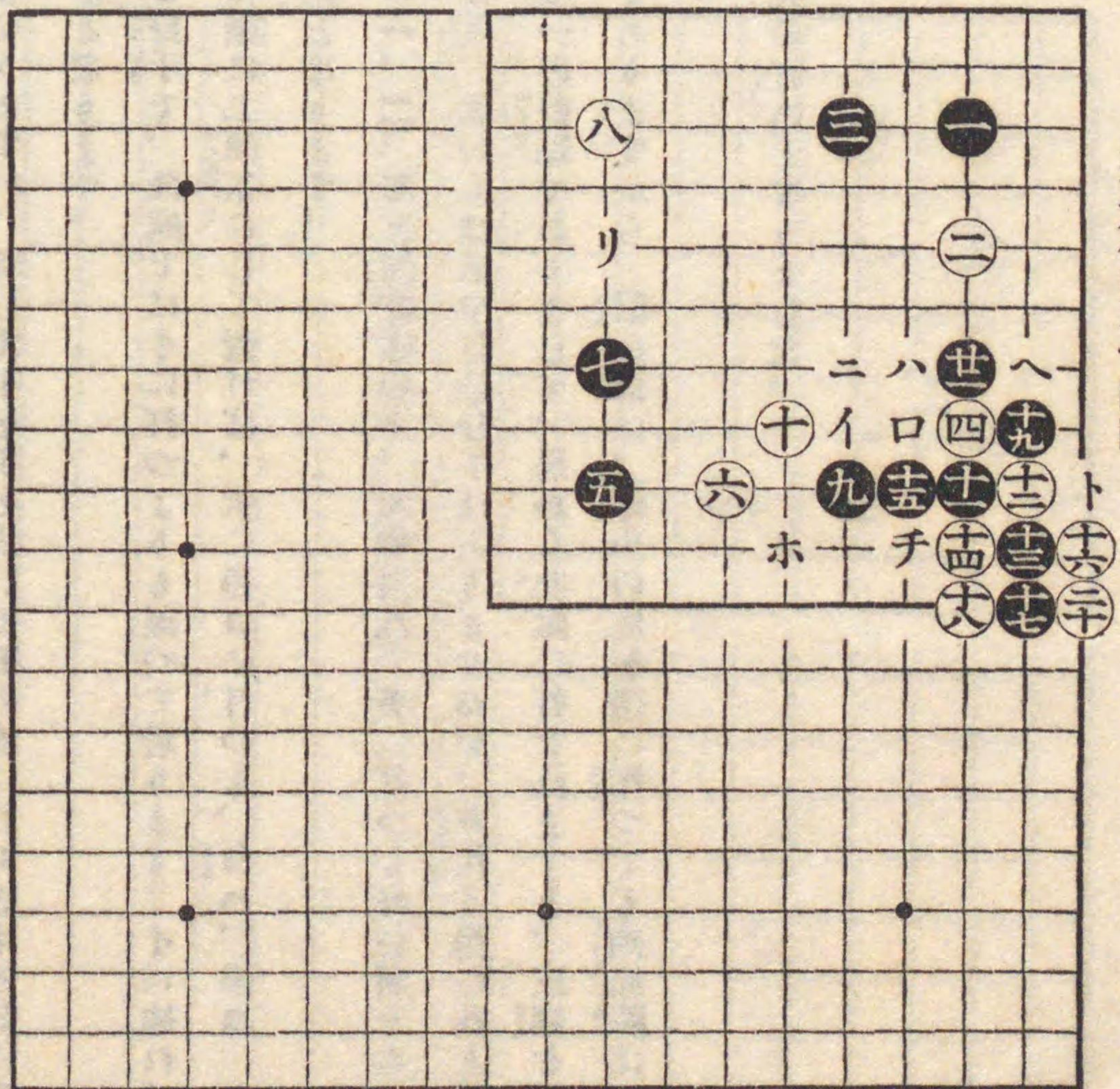
故に白八と一隅を占め、黒次に九の打込となりました。

第三十四圖 (前圖九の續)

き) 圖の様に黒九と打込んだ石に對し、白には色々な手段もあります。其一方法は此時白十一に下つて隅を守る手です。ありますが、然し此手は只隅を守れば宜いと云ふ、所謂守勢一方の手で少しも攻の意味を持つて居りませぬ、故に次に黒から十と掛けられると反對に六の一目を圍はれてしまひます。

第二は、此手で十五に尖附ける手でありまして、之は十一よりも強く黒にアタツて居ります。

地取篇第三十四圖



りますが、次に黒にイと行びられると、矢張り六を弱くするので、之も前同様白の悪い形でありま

す。
第三に白イと附けて黒を約へつける手ではありますが、此時は黒十五と行び、白ロ、黒十一と約へ

簡単に隅で活きてしまふので、之も白は不利益な分れであります。
故に白は十と尖んだので、此手は白六を守り、且つ九を攻めて居る手で此場合に於ける一番好い方法であります。

黒十一に附け、白十二に縛ねた時、黒十三と二段に縛ね約へた手の意味は、次の白の應答如何により、種々なる變化に出でようと云ふ面白い筋であります。

次に白十四の手で、若し十五に打ちますと、黒十四に粘ぎ、白十九なれば、黒ロ、白ハ、黒イ、白ニ、黒ホと打つて、黒有利の形であります。

又白十九に粘ぐ手で、ロの方を粘ぎますと、黒十九に切り、白へ、黒ト、白子に約へれば、黒は九の一目を捨て、先手を取つてりにツメル順となり、之も黒優勢であります。

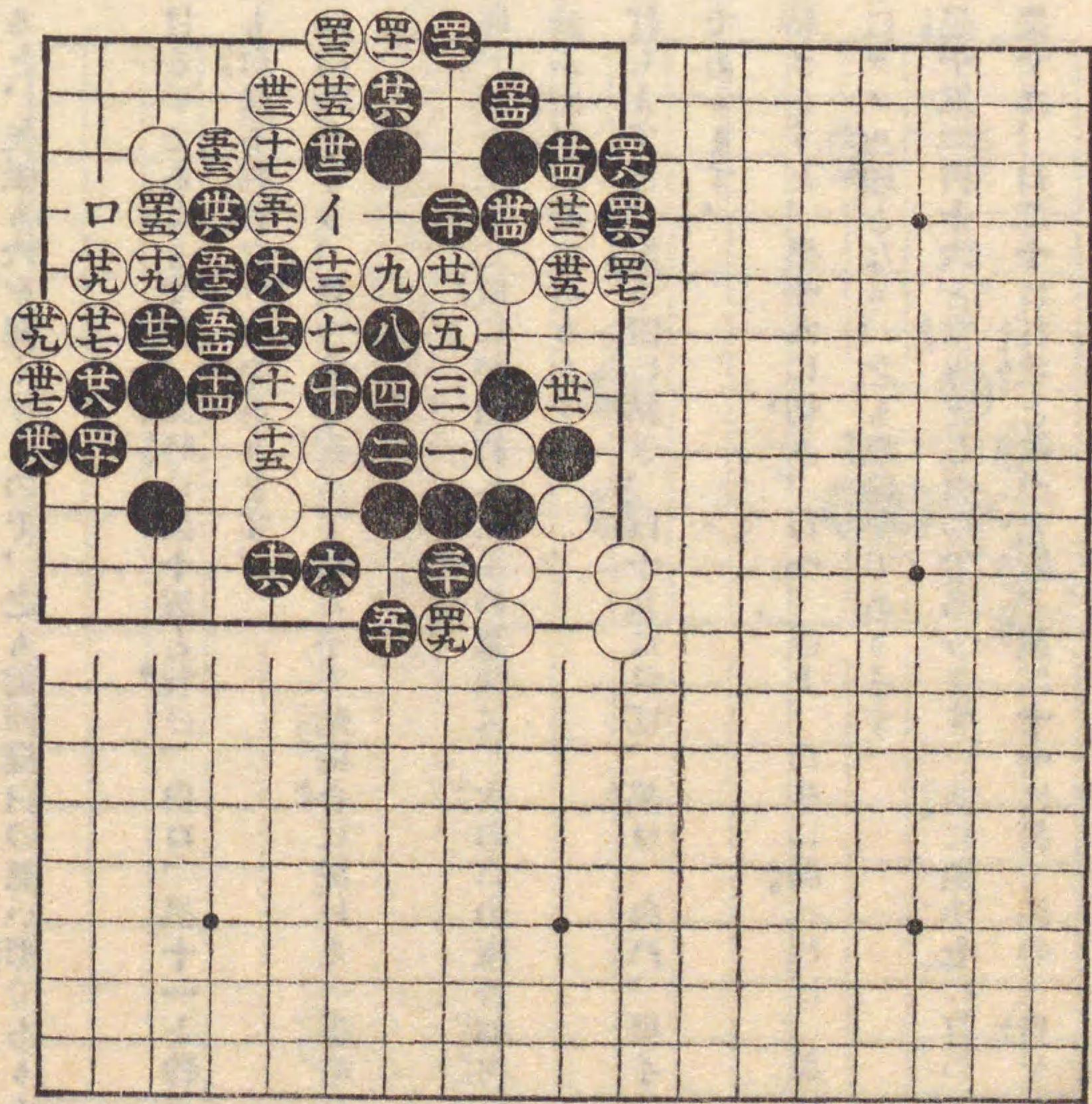
故に白は圖の様に十四に切り、黒十五、白十六と當りとしたのであります。次に黒十七に打つて二目にして捨て、白十八に提り、黒十九、白二十に打抜となつた時、黒二十一に打て四の一目を當りもしました。

第三十五圖 (前圖黒二十

一からの續き) 圖の中にある
黒●、白○の石は前圖二
十一までの形を、其儘●○で
現はしたので、之は只前の續
きを説明する便宜上、前の二
十一手までを其儘此處に現は
したに過ぎませぬ。

扱此處で白一と行びる手で
四に打ち、黒一に打抜、白五
と打つて黒を包圍すれば、黒
三十と約へて隅の白と攻合と
します。此攻合は、手数が黒
の方が二手も多く、黒勝とな
ります。

地取篇第三十五圖



故に圖の後に白一に逃げ、黒二、白三、黒四、白五まで、双方の運びは共に必然の手でありまし
て、之れ以外には、白黒共に變化のしようもありません。

黒六は肝要の處であります、若し此手で八に打ちますと、白に六と打たれ盤られてしまふので、
之では折角黒は前圖の十三、十七、十九の三目を捨てた効果もありません。圖の様に黒は盤り
を防ぎ、併して黒自身は十六の盤りを含んで打つたのであります。

次に白七に掛ければ、黒八に突出し、黒九白十と出、白十一、黒十二に當り、白十三に粘、黒十
四に當り、白十五と粘いだ時、初めて黒十六と連絡を取つたので、斯かる形となつて見ると、黒は
六、十六で左の黒に連絡し、之に對し白の十一、十五等の四目は、全く包圍せられ活の無い石とな
つて居ります。

黒十八は肝要な手であり、此手で若し二十五の邊に尖みますと、白五十四に切り、黒十八白
五十二、黒五十一、白イとなつて、征に取られてしまひます。此黒十二の石は、只此一目の死活丈
とすれば、たいして大きい石でもありませんが、此一目の死活は、白十一以下の四目の死活となり
ます。

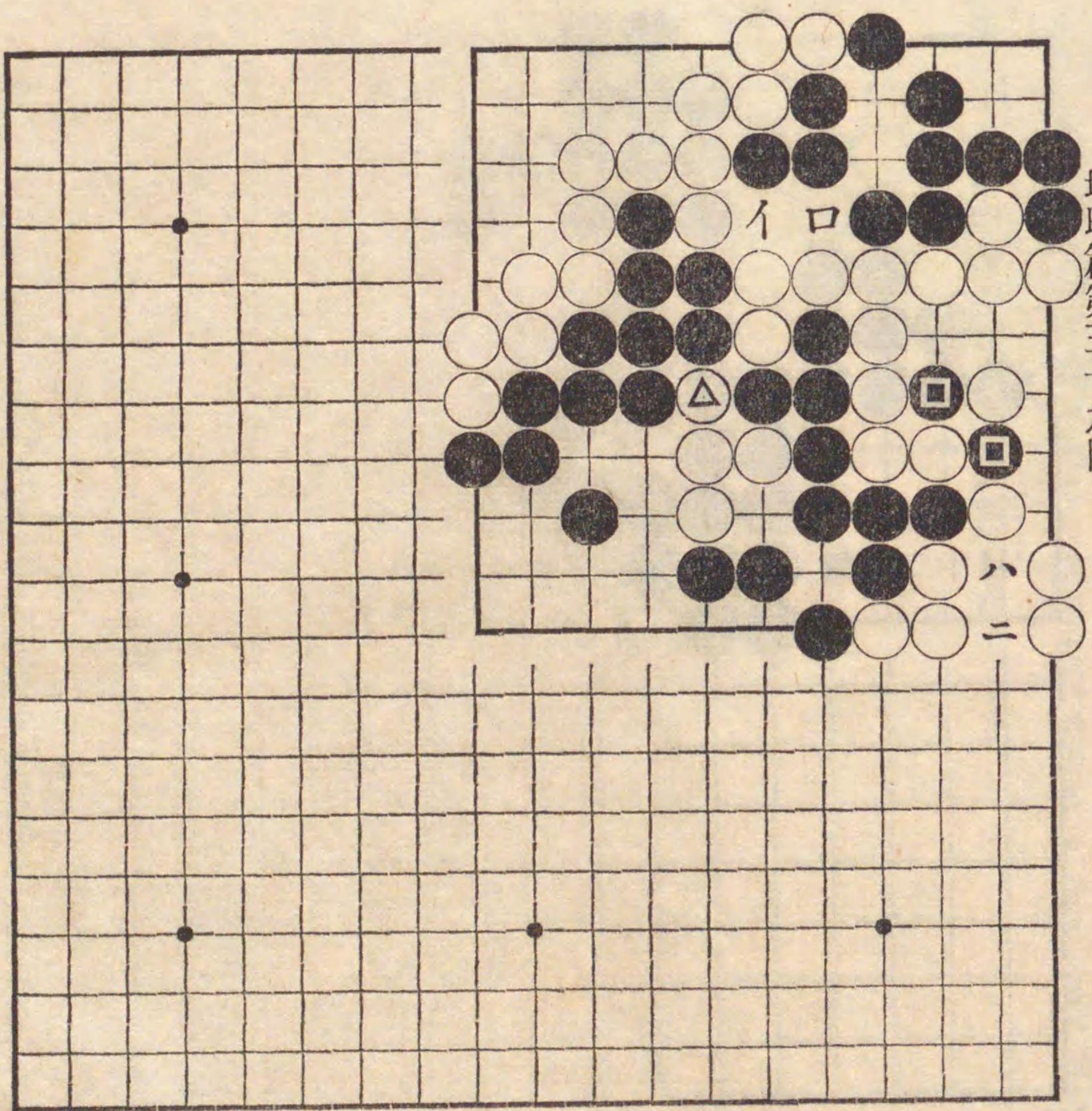
黒二十二に守り、次に白二十三、黒二十四、白二十五、黒二十六は、皆侵分の方法で、此白二十
三、二十五の二た手は、先手の得となる好い手であります。次に白二十七に綽ね、黒二十八、白二

十九に粘ぐ手、此二十七、二十九を縛粘と云ひ、侵分に移つて後に、常に見る善い手段であります。
 (斯う云ふ侵分の損益又は打方については次巻侵分の中で説明する事と致します)
 以下白三十七に縛ね、黒三十八、白三十九に粘いだ時、斯かる第一線での黒三十八の一目は、黒は圖の様に四十に補はなければなりません、若し此處を白から四十に切られますと、此三十八は死となり、從て此方面の黒の地は破られてしまいます。
 以下黒の五十四まで終局となり、之より後は双方駄目をツメ、勝敗を見る順序となります。

第三十六圖

イを白からツメ、ロを黒からツメ、双方此駄目をツメ終つて、死石を互に盤上から取去る順序となります。
 先づ白は㊦の二目を取り又前のハ、ニで打上げた二目を加へ合して白は四目の上げハマがある譯です。
 又黒は○以下の四目を取るので白と同様四目のハマがあります。

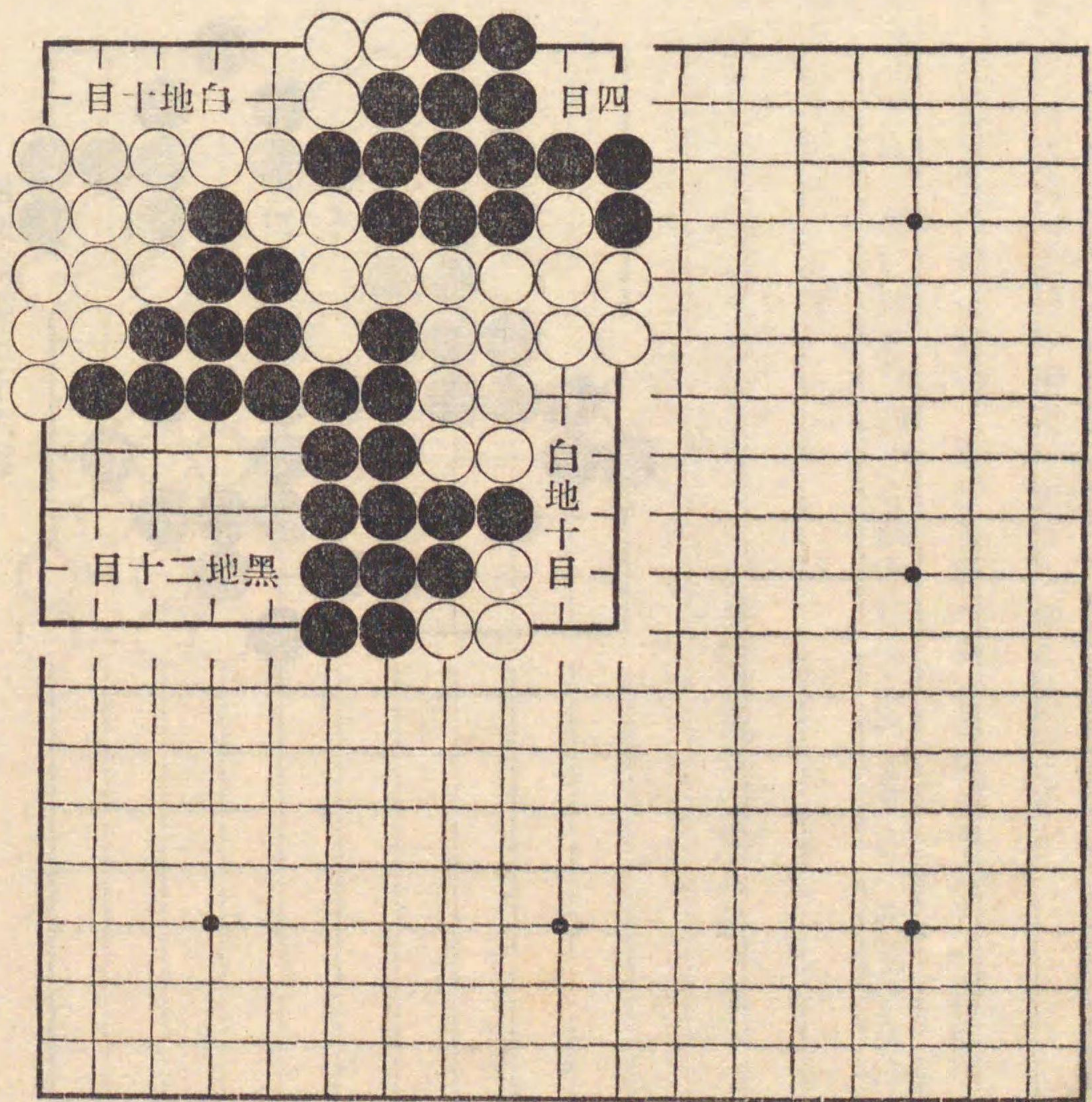
地取篇第三十六圖



第三十七圖 前に取去つ

たハマで、各相手の地を填め且つ一巻で説明致しました様に、双方共に地の形を分り易い様に作り直しますと、三十七圖の様になります。

で此地の数は、前圖と同じで、其廣さは少しの變りも無く、只前圖を分り易くしたままであります。今此形によつて見ますと白地二十目、黒地二十四目で黒四目の勝となつた譯であります。猶此十一筋の先の打方は他に色々ありますが、此處に



地取篇第三十七圖

は此一局に止めて置きます。然し其方法は、先づ大要圖の變化と大同小異でありまして、先づ隅を占領し隅を終つて後、邊、中と發展し、次に中邊の戦となる順序となります。

基礎篇 (其の五)

布石

石を配置する手段に左の七つの方法があります。

- 一、懸り (カ、リ)
- 二、締り (シマリ)
- 三、夾み (ハサミ)
- 四、拓き (ヒラキ)
- 五、應け (ウケ)
- 六、打込 (ウチコミ)
- 七、掛る (カケル)

猶此七つの手段に各互先と置碁との別があります。

先づ懸りの意味は、隅の置石或は互先の碁では、先と打出した隅の石に對し、之に懸つて其一隅を争ふ手でありませう。そこで初め置隅の形について見ますと、八十九圖白一の手を皆懸と稱へます。其中(一)、白一の手は、位置が隅の置石から小斜走にありますから、之を小斜走懸り(コゲイマガ、リ)と稱へ、此手は隅を争ひ、且つ中に發展するに、一番適當の位置にありますから、置碁では一番多く用ゐらるゝ懸り方であります。(置碁定石の部参照)

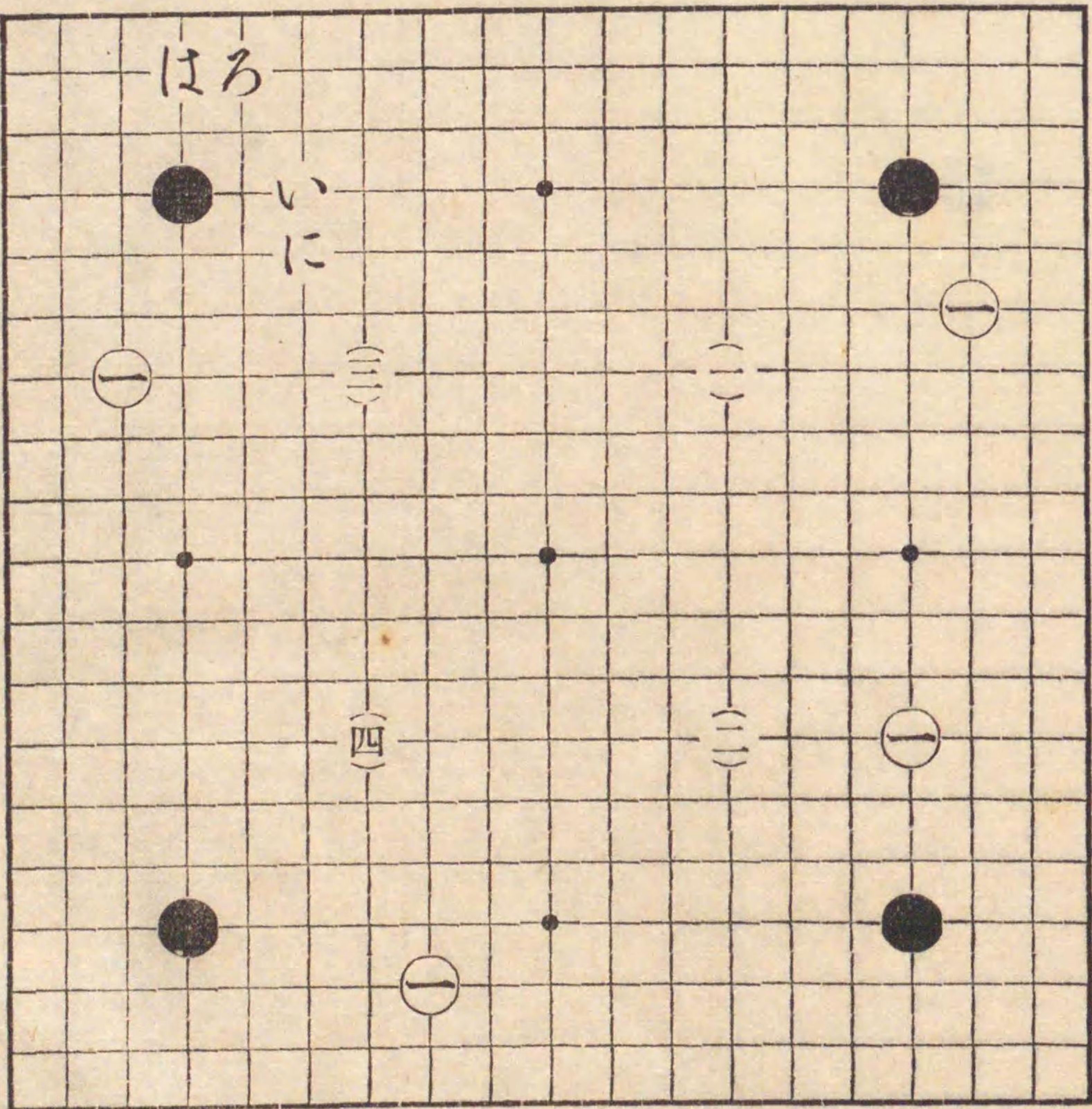
(二)、白一の手を二間高懸りと云ひます。此懸りは前の小斜走に較べると、隅に遠く、又一路高

くなつて居る丈に隅の響きは小斜走より劣つて居りますが其代り中へは前より優つて居ります。

(三)、白一の手を大斜走懸りと云ひます。之は(一)より隅に遠く、又(二)よりは一路低くなつて居りますから、隅の響きは(一)に劣り、中の發展は(二)に及ばぬけれども、邊の守りには、(一)、(二)よりは優つて居ります。

(四)、白一の手を大々斜走懸りと云ひます。此手は先づ大體(三)と同意味であります

基礎篇八十九圖



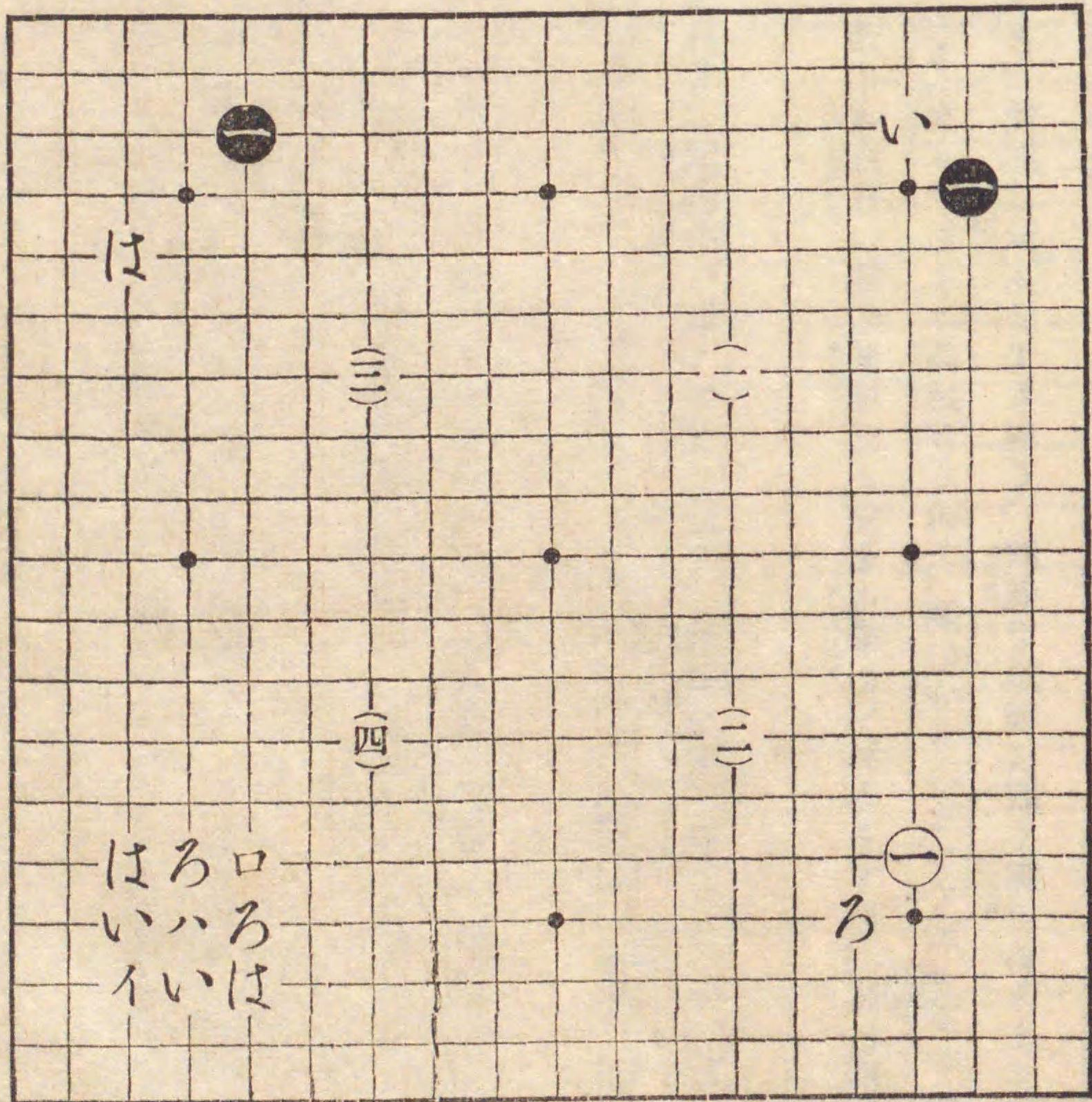
が、然し此手は隅を争ふと云ふより、寧ろ中邊の備へに打つ手であります。
扱以上四つは、置碁の掛り方で、普通は此四つの掛りによりて、布石は初まるのでありますが、
形勢によりて、之れ以外に時として、(三)の「い」、「ろ」、「は」或は「に」などに打つ事もあります。

第九十圖

次は互先の布石の懸り方でありますが、互先の碁では、初はまだ盤上に一石もありませぬから、先づ懸りの説明の前に、盤上に打出す隅の打方について、圖示する事に致します。

て初め隅に打出す手として、は、小目、高目、目外の三種あります。小目と云ふのは、(一)の黒一の手或は「い」の手であります。此手は、星(前の置石の場所)に較べて、一路低くなつて居りますから、之を小目(目とは此處では星を

基礎篇第九十圖



指して云つてをります)と云ふので、互先の布石で、最初に打出す手としては、一番善い位置を占めて居ります。

次は(二)、白一或は「ろ」に打つ手で、之は目より一路高くなつて居りますから、之を高目と稱へて居ります。で此手は、前の小目に較べますと、隅の守りには不便の位置にありますが、中に形勢を張る手としては、小目より大層優つて居ります。

(三)、黒一或は「は」を目外し(モクハズシ)と稱へて居ります、着意は、丁度小目と高目との中間であつて此手は時としては隅を争ひ、又時としては中に發展する、つまり變化に富んだ位置にある譯であります。

以上、星を圍んで隅に打出す手としては、此「い」(小目)、「ろ」(高目)、「は」(目外)の三種を普通とするので、之れ以外の場所は、何れも、隅邊中に偏りすぎて居て、最初打出す手としては、好い着點はありませぬ。

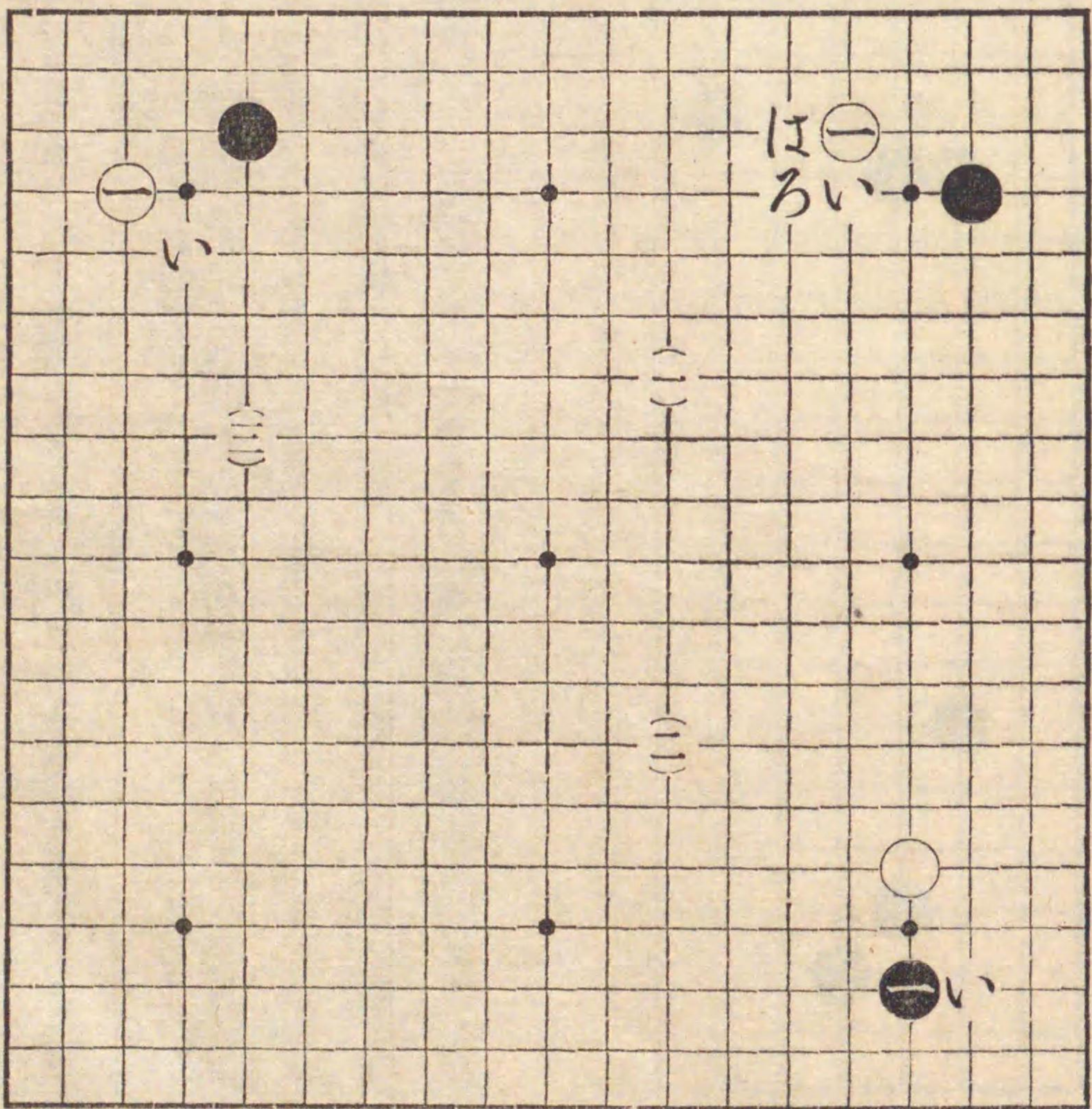
其一、二の例を舉げて見ますと、四のイ點は、隅の要所三ノ三を占領して居りますが、然し稍位置が低い爲に、中央の發展に不便であり、又口はあまり高過ぎるので、隅の守りになつて居りませぬ。次に星、ハ點は如何かと云ひますと、此點は云ふまでも無く、置碁で最初に置く處でありますから、無論互先の碁でも好點となるのであります。

第九十一圖 次には、此小

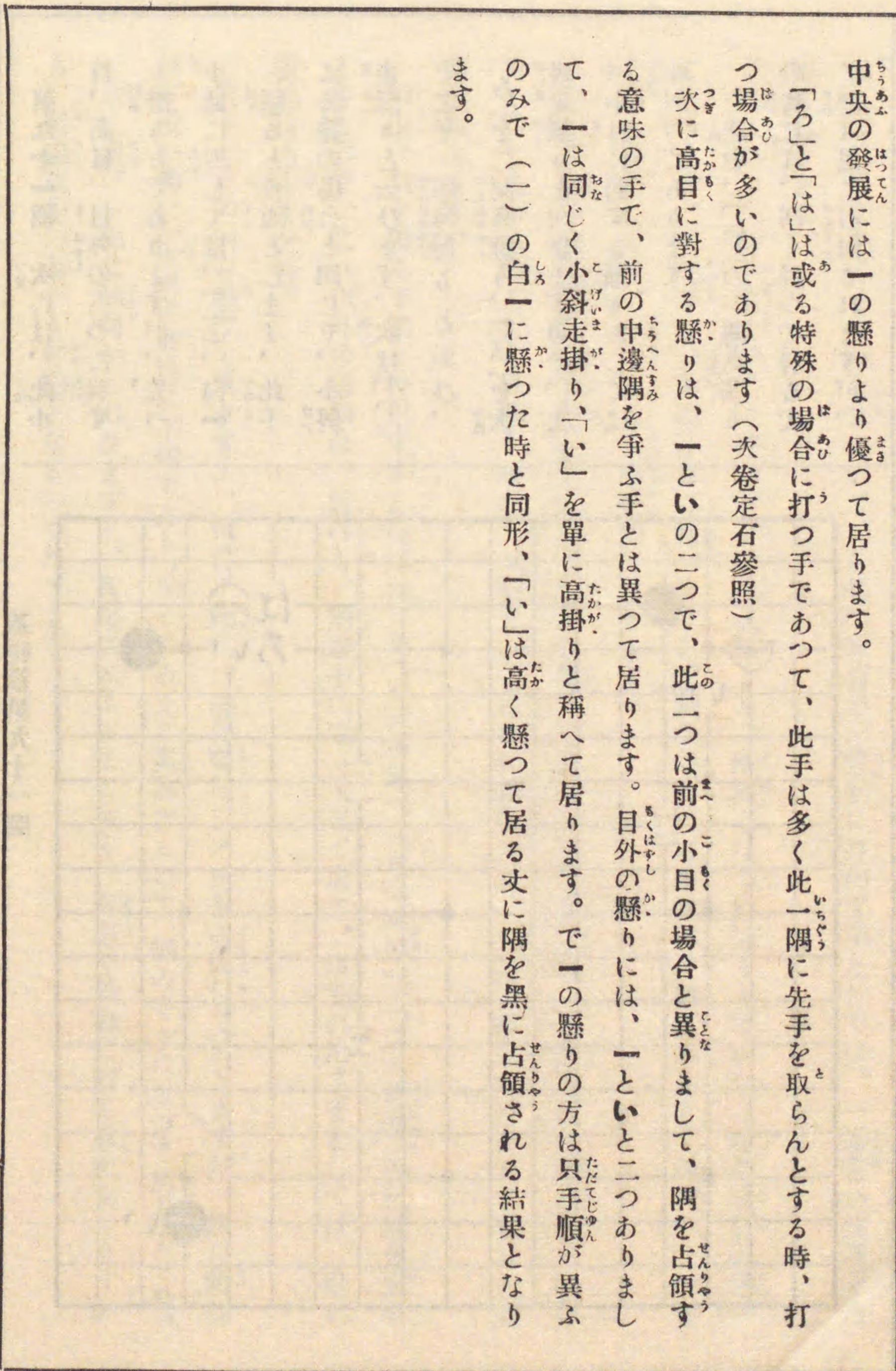
目、高目、目外の三つに對する掛り方でありますが、先づ小目に對しては、(一)、白一と懸ると普通とします、此手は置碁の場合と同じで、小斜走懸りと云ひます、次は「い」で之を一問高懸りと云ひ、「ろ」を二問高懸り、「は」を大斜走懸りと云ひますので、先づ小目に對する懸りとしては此四つであります。

で此中、「い」の一問高懸りの着意は、高く懸つて居る丈に隅は黒に占領されますが、

基礎篇第九十一圖



中央の發展には一の懸りより優つて居ります。
 「ろ」と「は」は或る特殊の場合に打つ手であつて、此手は多く此一隅に先手を取らんとする時、打つ場合が多いのであります（次卷定石參照）
 次に高目に對する懸りは、一といの二つで、此二つは前の小目の場合と異りまして、隅を占領する意味の手で、前の中邊隅を争ふ手とは異つて居ります。目外の懸りには、一といと二つありまして、一は同じく小斜走掛り、「い」を單に高掛りと稱へて居ります。で一の懸りの方は只手順が異ふのみで（一）の白一に懸つた時と同形、「い」は高く懸つて居る丈に隅を黒に占領される結果となります。

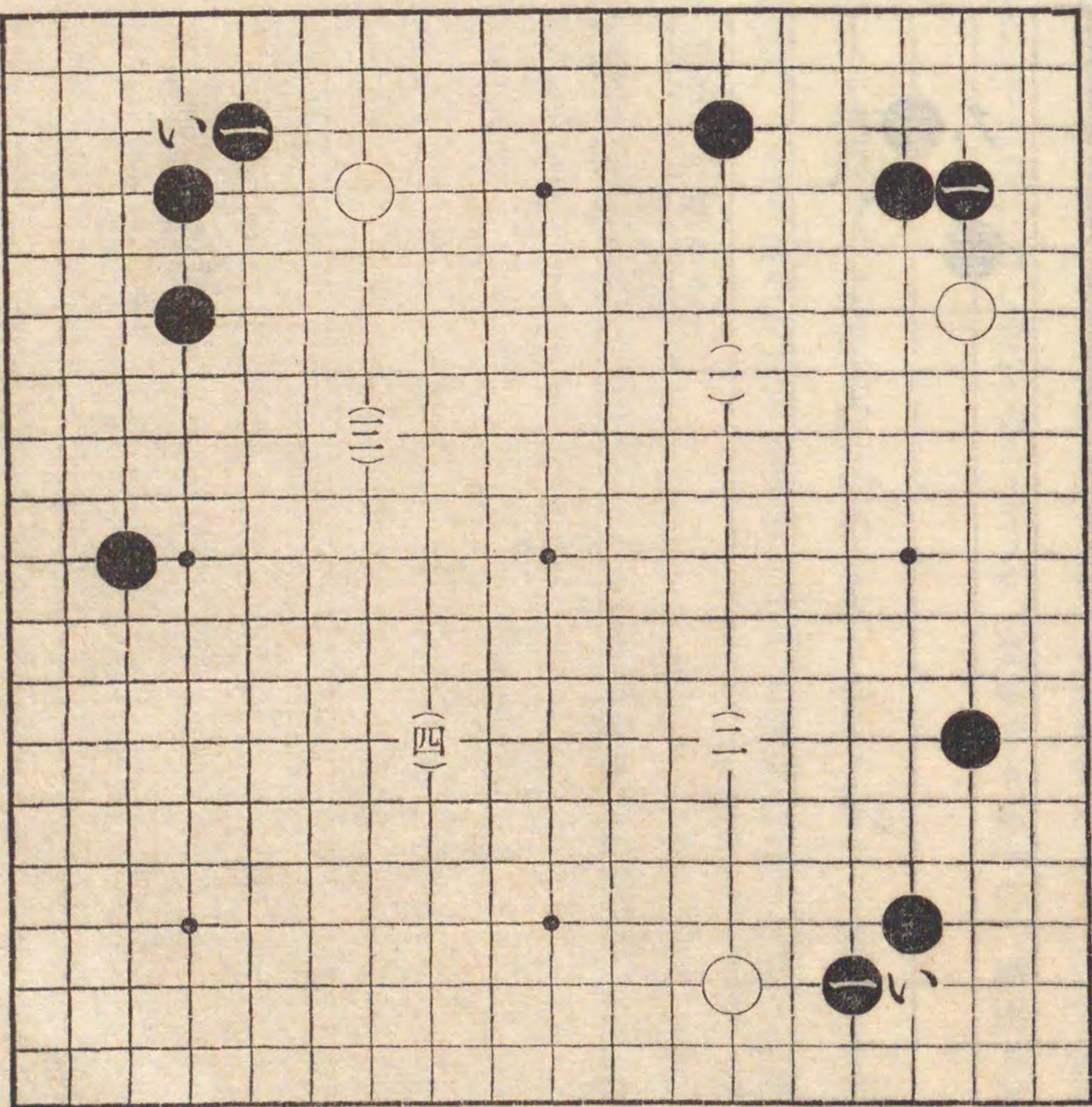


締り（シマリ）

懸りは前に述べた通り、隅の石に對して、後から着手して、隅に對等の勢をなす手ではありませんが、締りは之と反對で、既に隅にあつた石に、猶一着を費し、此一手によりて完全に隅を占領する形を云ふのであります。

第九十二圖は、此締りの中置碁の締り方でありまして、其中（一）は、黒一に打て隅を守つたので、斯く白が小斜走に懸つてある形では、斯く一

基礎篇第九十二圖

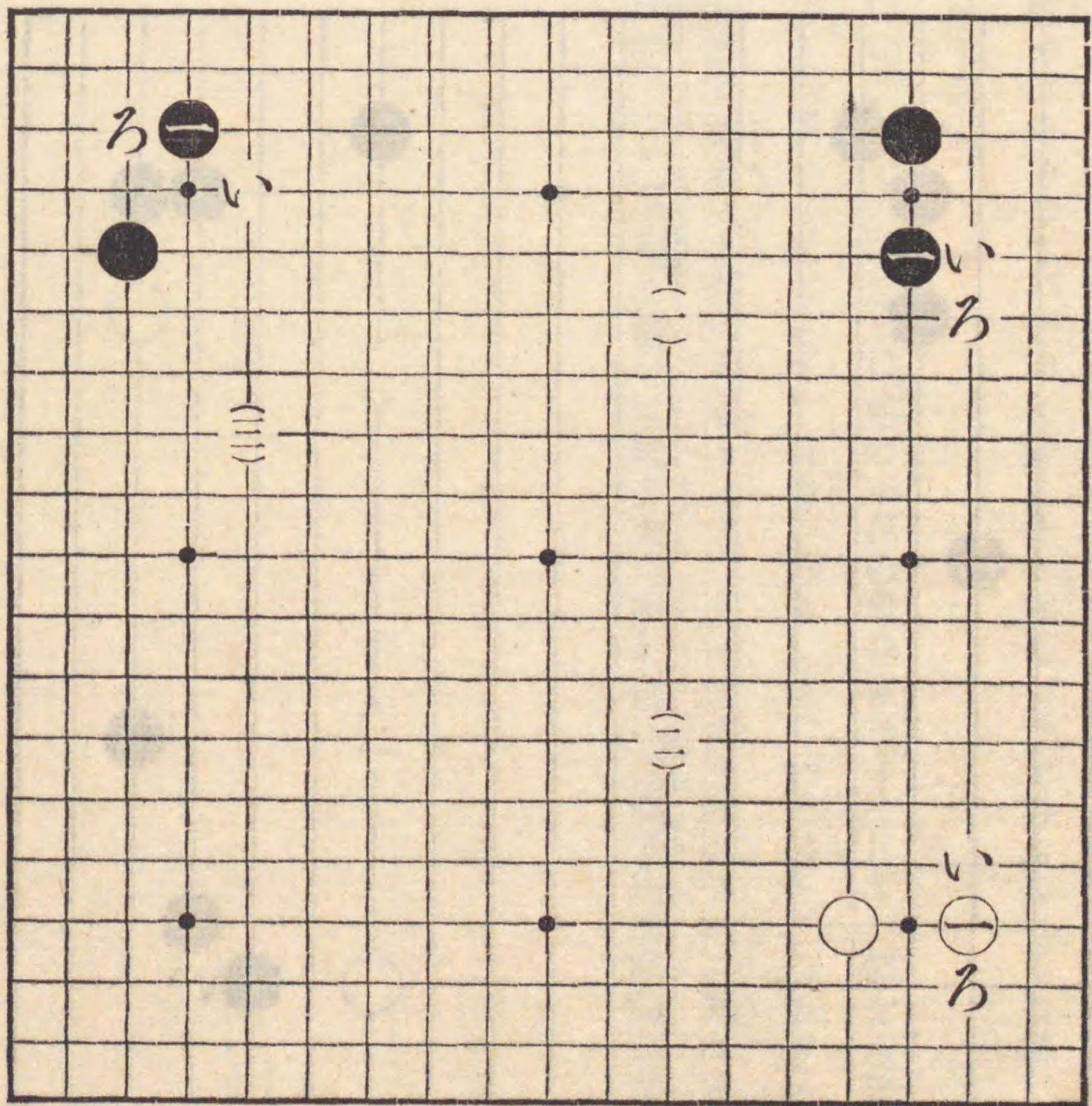


と打つのが、攻守共に一番善い地點となつて居ります。

(二)の黒一に尖む手、之も同じ様に隅の締りで、之は圖の様に白の懸りが大斜走にある時、又は(三)の様に二間高掛りとなつて居る時であつて、此場合は、「い」に締るよりは優つて居ります。

第九十三圖 圖は互先の締り方であり、先づ(一)圖の小目の石から、隅を堅くするに三つの締り方があります、一は黒一に打つ手、之を一間締りと云ひ、二は「い」に

基礎篇第九十三圖



打つ手、之を小斜走締りと云ひ、三は「ろ」に打つ手、之を大斜走締りと云つて居ります。で此三つの方法は、隅を完全に占領する手としては共に好い形ではありますが、其中でも黒一の間締りが、最好形であります。

(二)は高目からの締りで、其中一は一間締り、之は(一)と同形となります。今一つは「い」と廣く締る手で、此形は若し此儘地となれば、一より優つて居りますが、其代り場合により此締りの中に敵に「ろ」と打込まれ、活きられる手が残つて居ります。

(三)は目外しの締り方で、其中一は前の小斜走締りと同形、「い」は前の高目の廣く締つた形と同形となります。

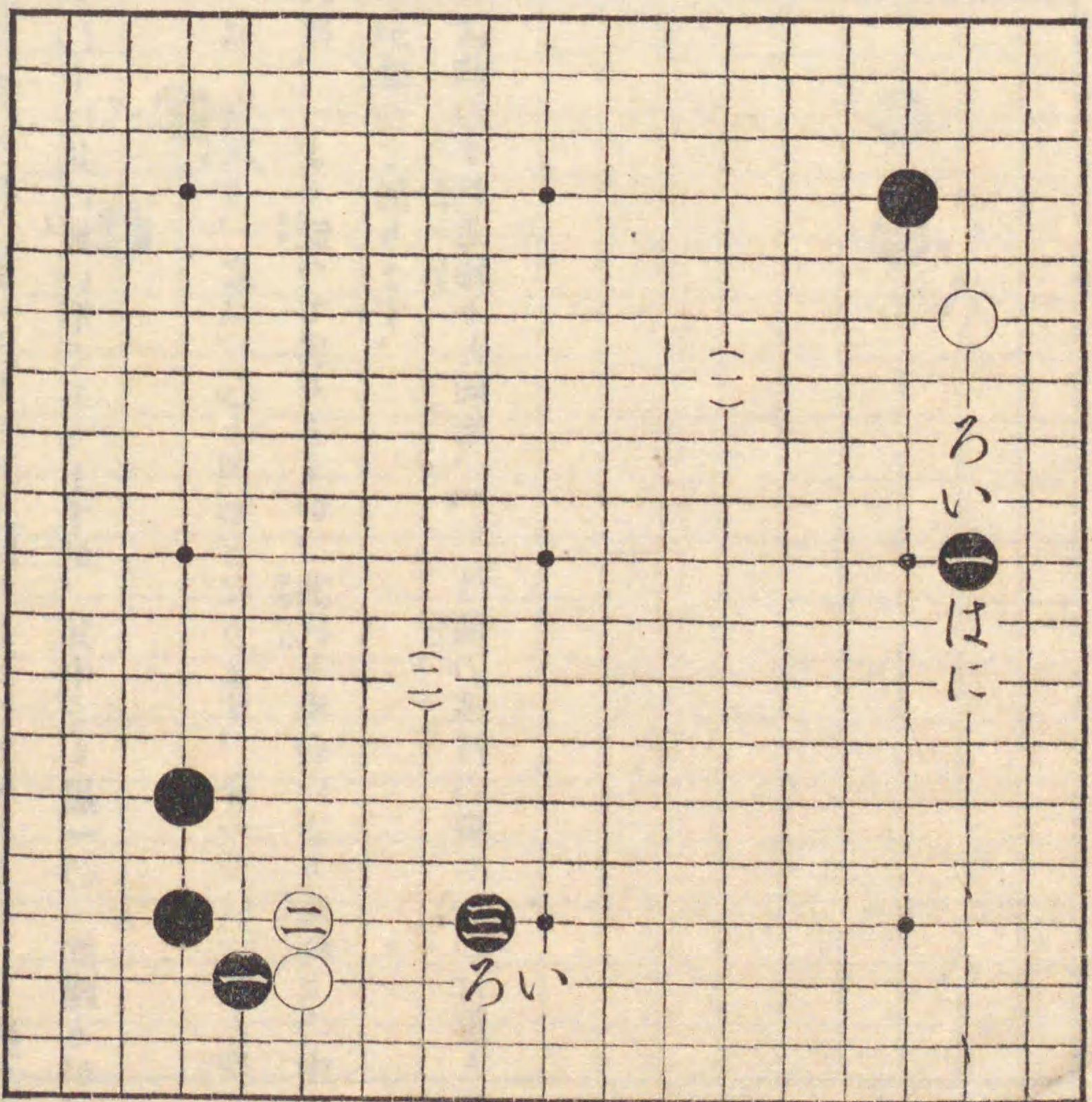
夾み (ハサミ)

第九十四圖 夾みとは、云

ふまでも無く、敵の一石を我二石で夾み攻撃する手であります。故に此手は敵の石に對して、一間、二間、三間と三つに限られて居ります。

(一)圖、黒一を二間夾、「い」を二間夾、「ろ」を一間夾と云ひます。で夾の形は、若し之より遠く、「は」或は「に」に打つとしたら如何かと云ひますと、斯かる手は白に「い」或は一と打たれて、守られる手が

基礎篇第九十四圖



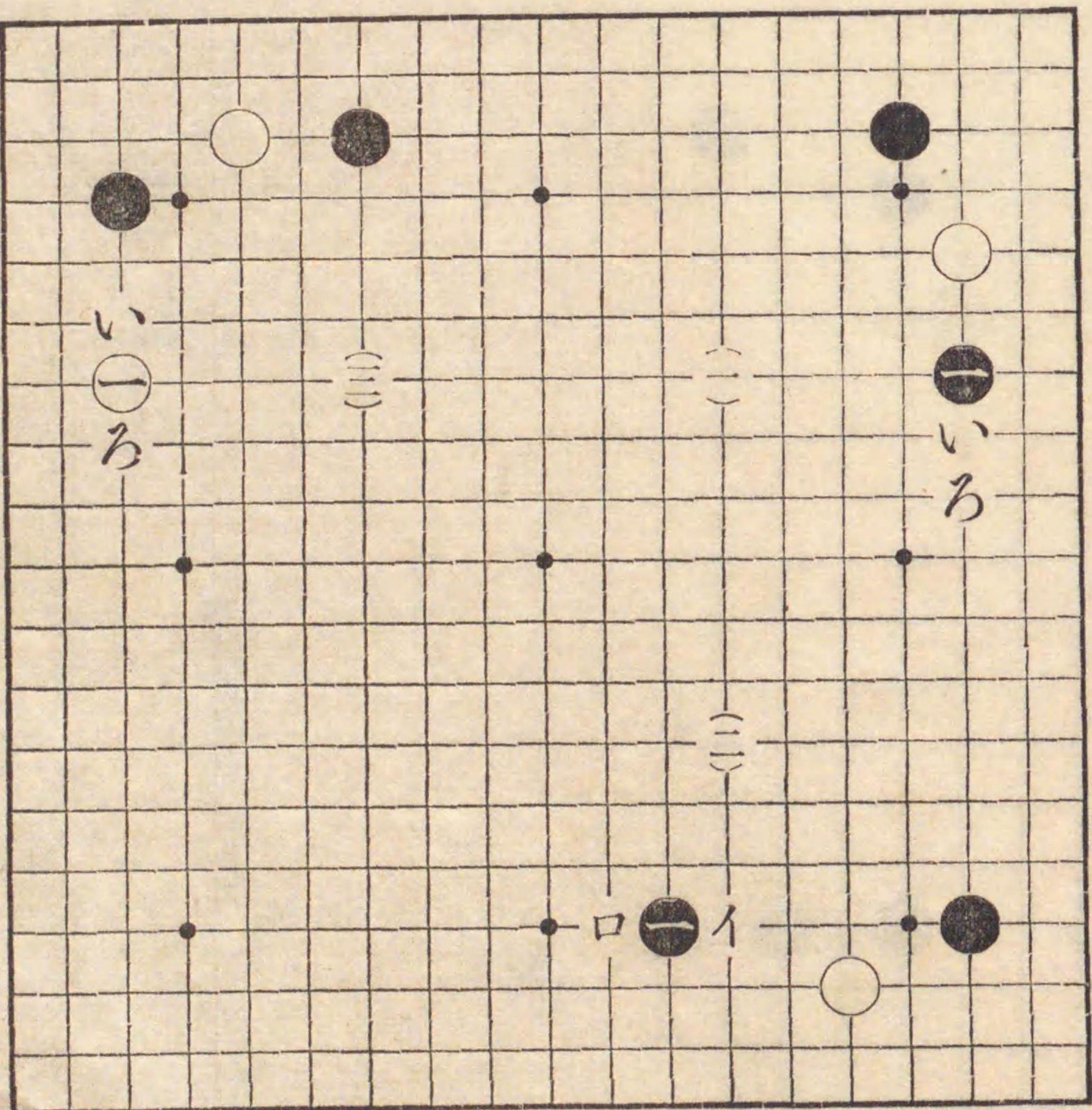
基礎篇第九十五圖

ありますから、斯かる手はただ夾み撃つ意味をなさぬのであります。

(二)も夾みの形であります。此形は初め黒二着に對する白一着、其上に黒先手で一に尖附、白二、黒と夾撃した手でありますから、前より一層強く攻める事が出来ます。

第九十五圖 圖は互先の布

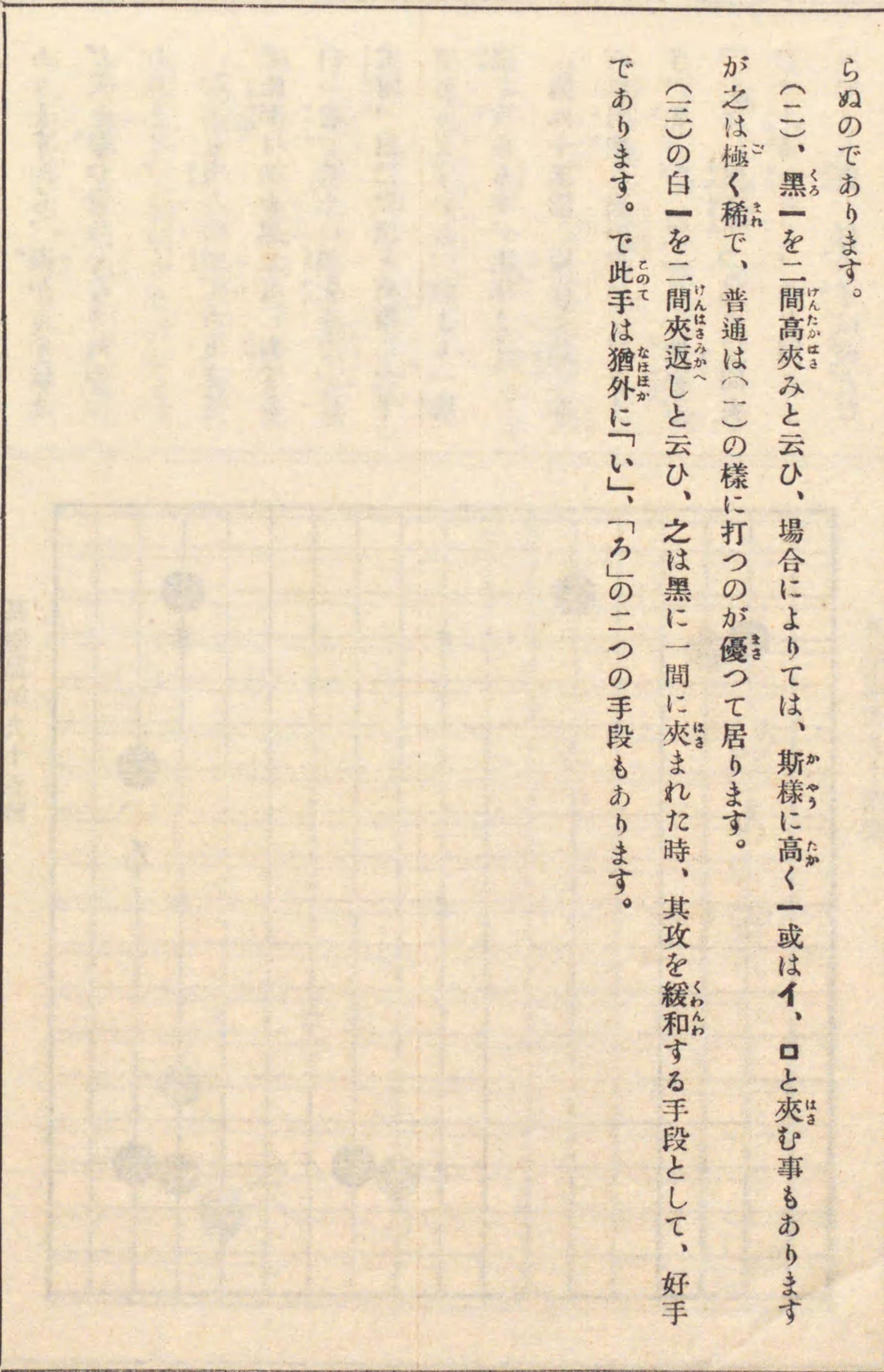
石に出来る夾の形であります。先づ(一)黒一は一間夾、「い」は二間夾、「ろ」は三間夾で、此場合でも、前と同じく三間より廣く打つ手は夾とな



らぬのであります。

(二)、黒一を二間高夾みと云ひ、場合によりては、斯様に高く一或はイ、口と夾む事もあります
 が之は極く稀で、普通は(二)の様に打つのが優つて居ります。

(三)の白一を二間夾返しと云ひ、之は黒に一間に夾まれた時、其攻を緩和する手段として、好手
 であります。で此手は猶外に「い」、「ろ」の二つの手段もあります。

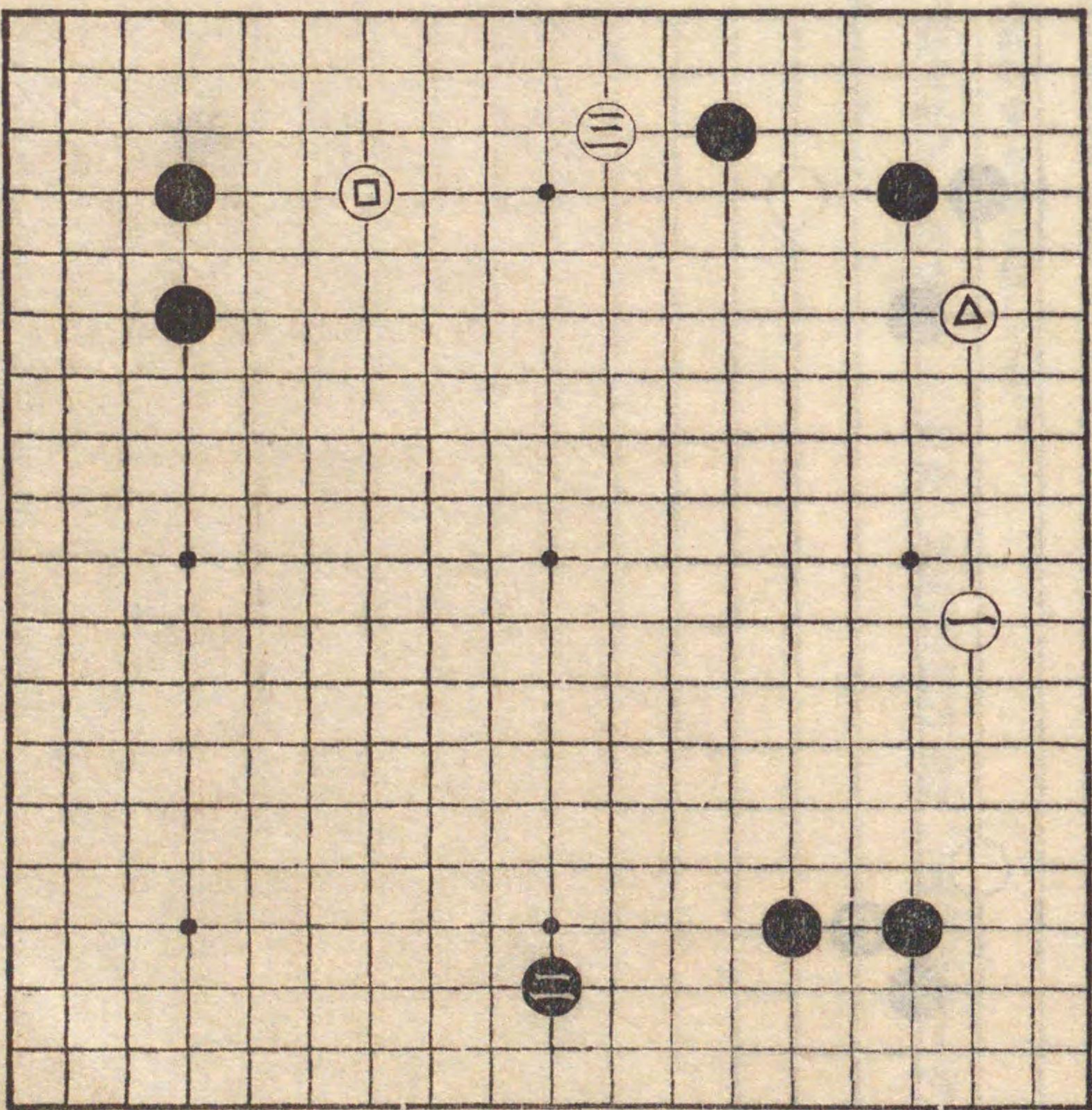


拓 (ヒラキ)

拓とは、敵に夾撃せられぬ
 前に、先づ拓いて之を守り、
 且つ地を開拓する意味の手で
 あります。

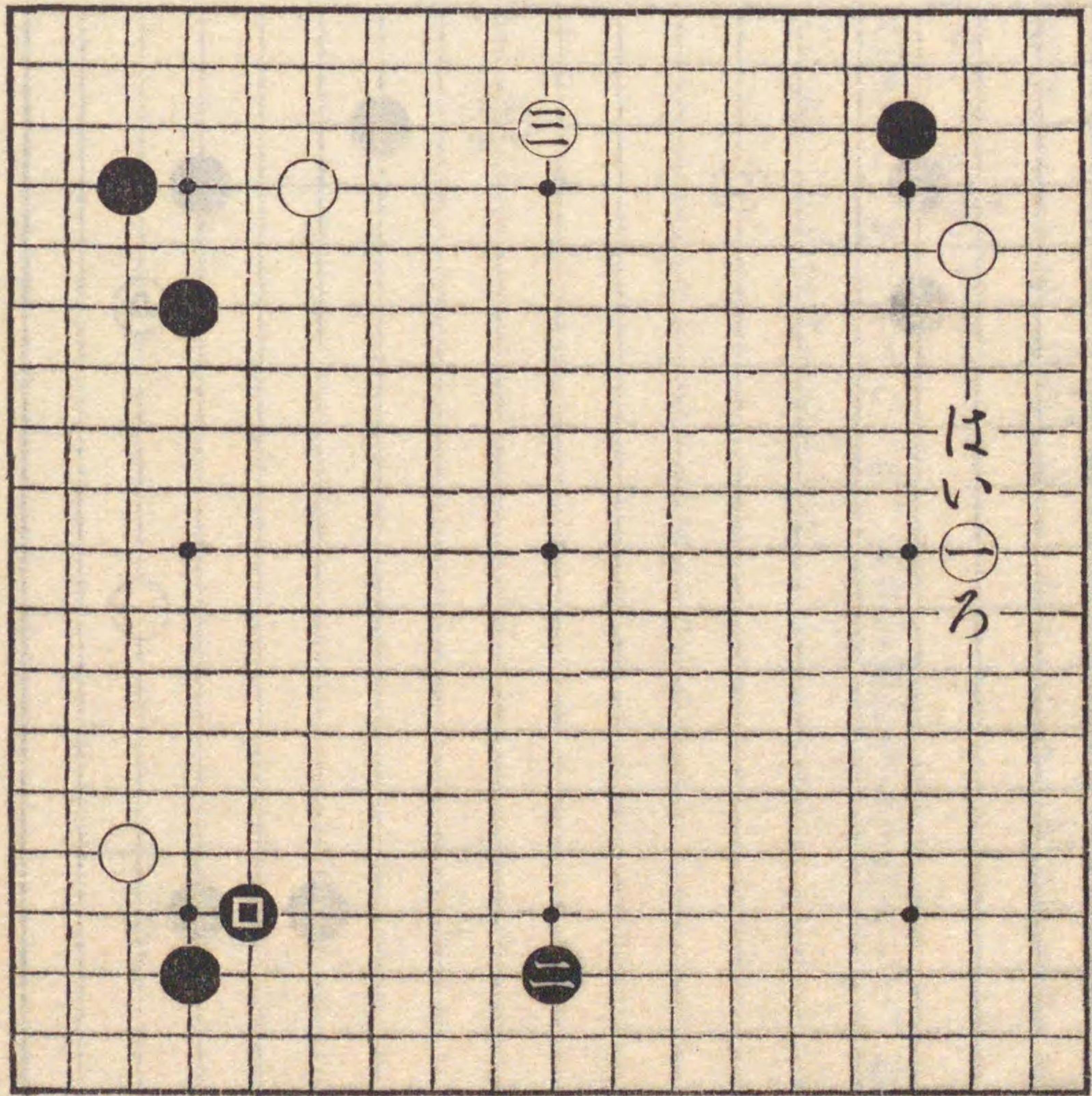
第九十六圖 此拓も、前
 の夾と同様常に邊の三線或は
 場合により四線に打つ手であ
 ります。又拓は、夾の様に、
 一間、二間三間の距離ばかり
 で無く、二間以上五間まであ
 ります、斯様に廣く拓くのは、
 其處に種々なる變化を含んで
 の結果でありまして、若し敵

基礎篇第九十六圖



が中へ打込んで来れば、其石を攻めるとか、又は他と振替るとか、適當の手段を選ぶのであります。圖は置碁の場合の拓でありまして、此中白一は四間拓、黒二は大々斜走拓、白三は同じく大々斜走拓となつて居ります。

第九十七圖 圖は互先の布石の拓き方でありませす。先づ右邊白一に打つ手は四間拓、「い」は三間、「ろ」は五間、「は」は二間の拓となつて居ります。で斯様に、廣狹種々であります。



基礎篇第九十七圖

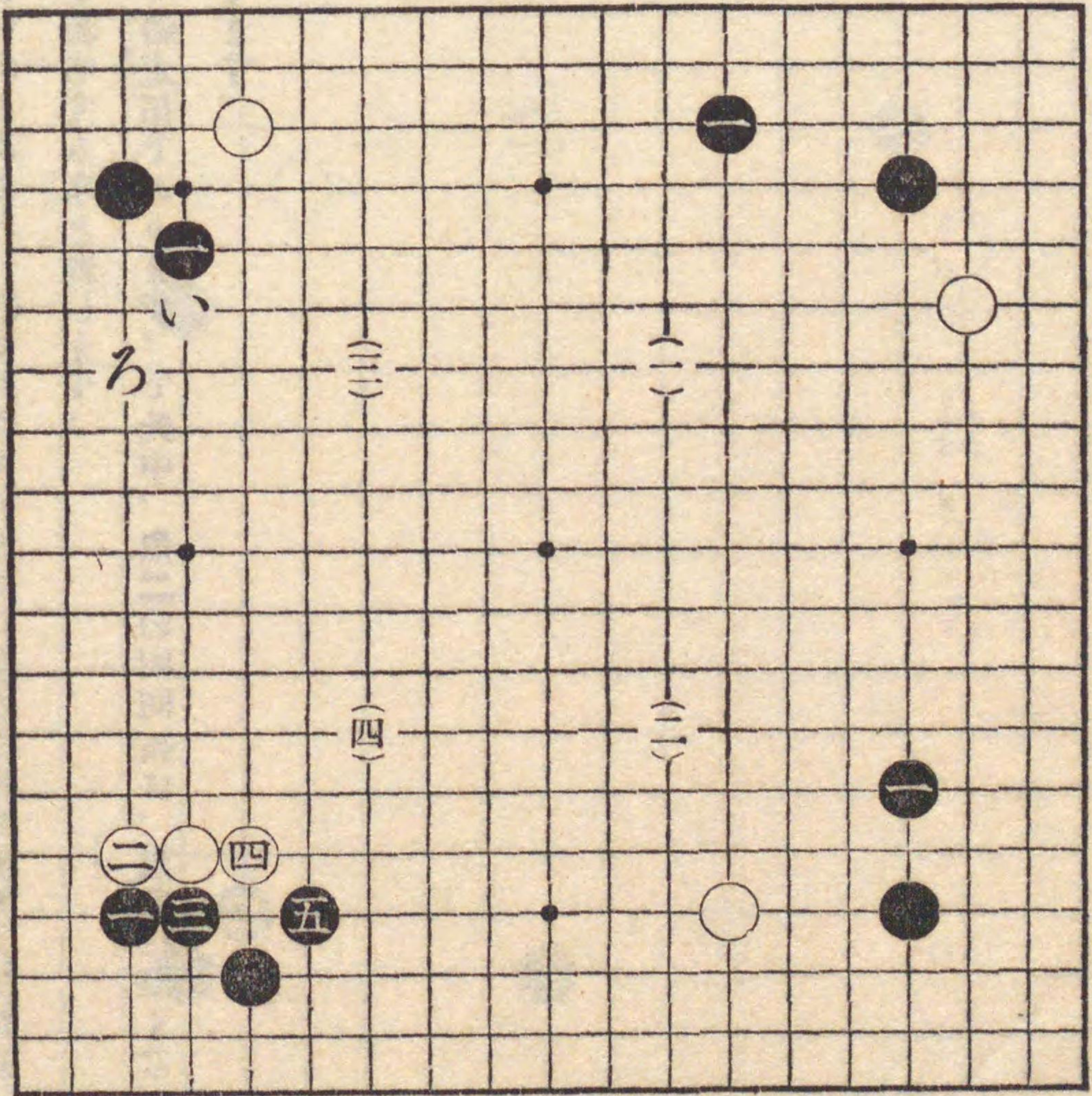
ますが、然らば實戦では何の拓が宜いかと云ふと、之は其時々之の形勢によるものでありますから、之については詳細は次の布石の部で説明する事と致します。黒二は四間拓、白三は同じく大々斜走拓であります。で此中、黒二の四間拓は、黒回に堅くなつて居る關係上、良い拓となつて居ります。

應 け (ウケ)

應けには、形によつて二つの意味があります、一つは、圖の様に敵の懸りに對する應接の應けと、今一つは、次圖の敵の打込に備ふる、守りの應けであります。

先づ九十八圖は、應接の應けでありまして、其中(一)と(二)は置碁の場合、(一)は白の小斜走掛りに對する大斜走の應け、(二)は白の二間高懸りに對する一間の應けであります。

基礎篇第九十八圖



(三)と(四)は互先の場合でありまして、其中(三)、黒一の尖は白の小斜走懸りに對する應けで、此形には、外に黒「い」或は「ろ」と應ける手もあります。

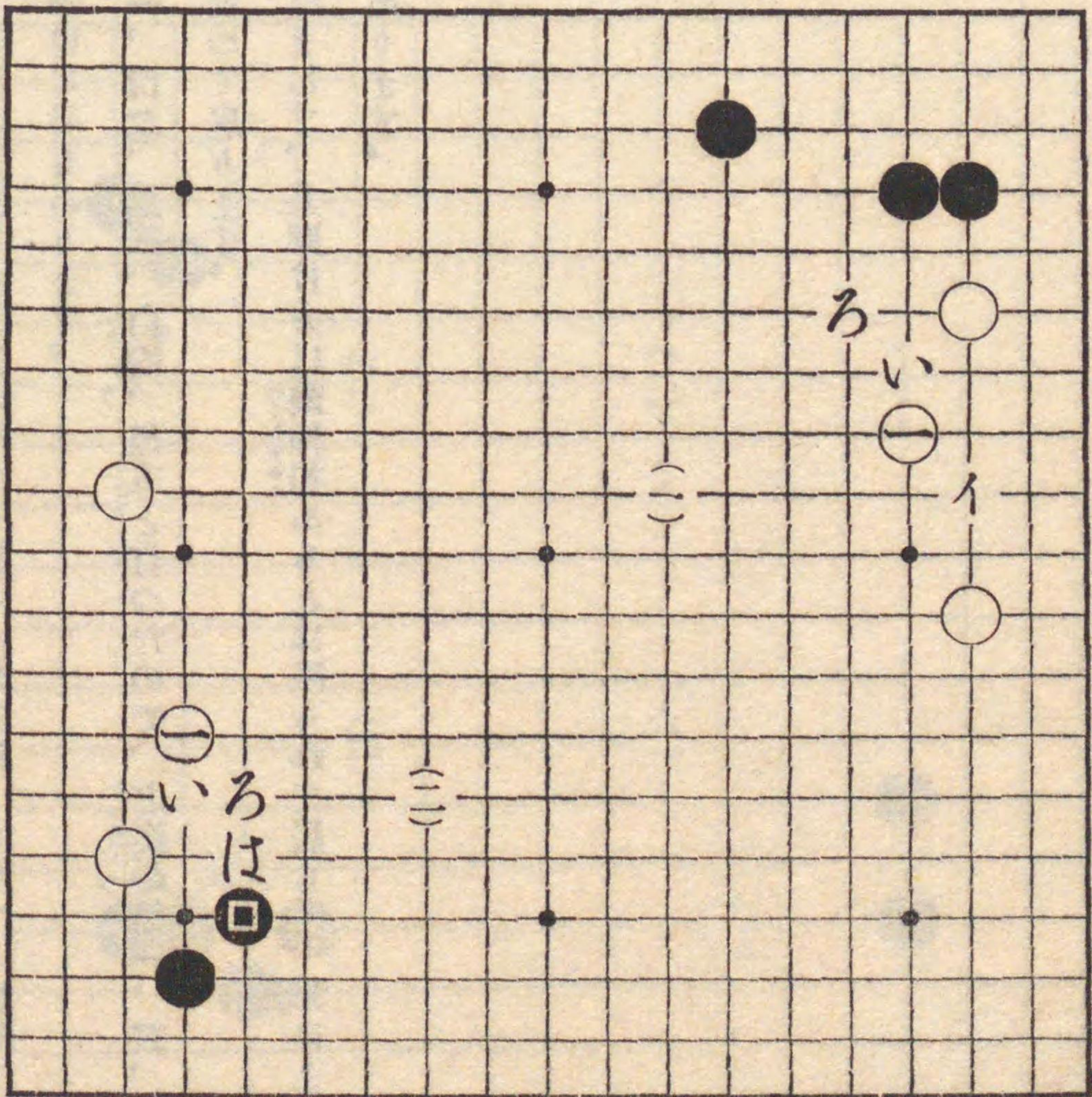
(四)は、白の高懸りに對し、黒一、白二、黒三、白四、黒五と打つたので、之迄の黒一、三、五まで此一つの形を總稱して應けと云つて居ります。

で應けは、前の懸り、締りと異ひまして、其應け方に幾種類あるとは限られて居らず、形によりて種々様々の異つた形となるのであります。

基礎篇第九十九圖

第九十九圖 は、前の應接の應けと異ひまして、敵の打込に備へる應けであります。(二)の白一は白二着の廣い間を守つた手で、斯く一と打て置けば、白石の連絡も取れ、且つ地とする事も出来ませんが、若し此手無く、反對に黒からイと打込まれるとしますと、地を破られた上に、白石を二つに隔てられ、且つ攻められる形となります。

で、此防備の應けにも、前と同様色々の手がありますが、要は敵の攻撃或は打込を防げ



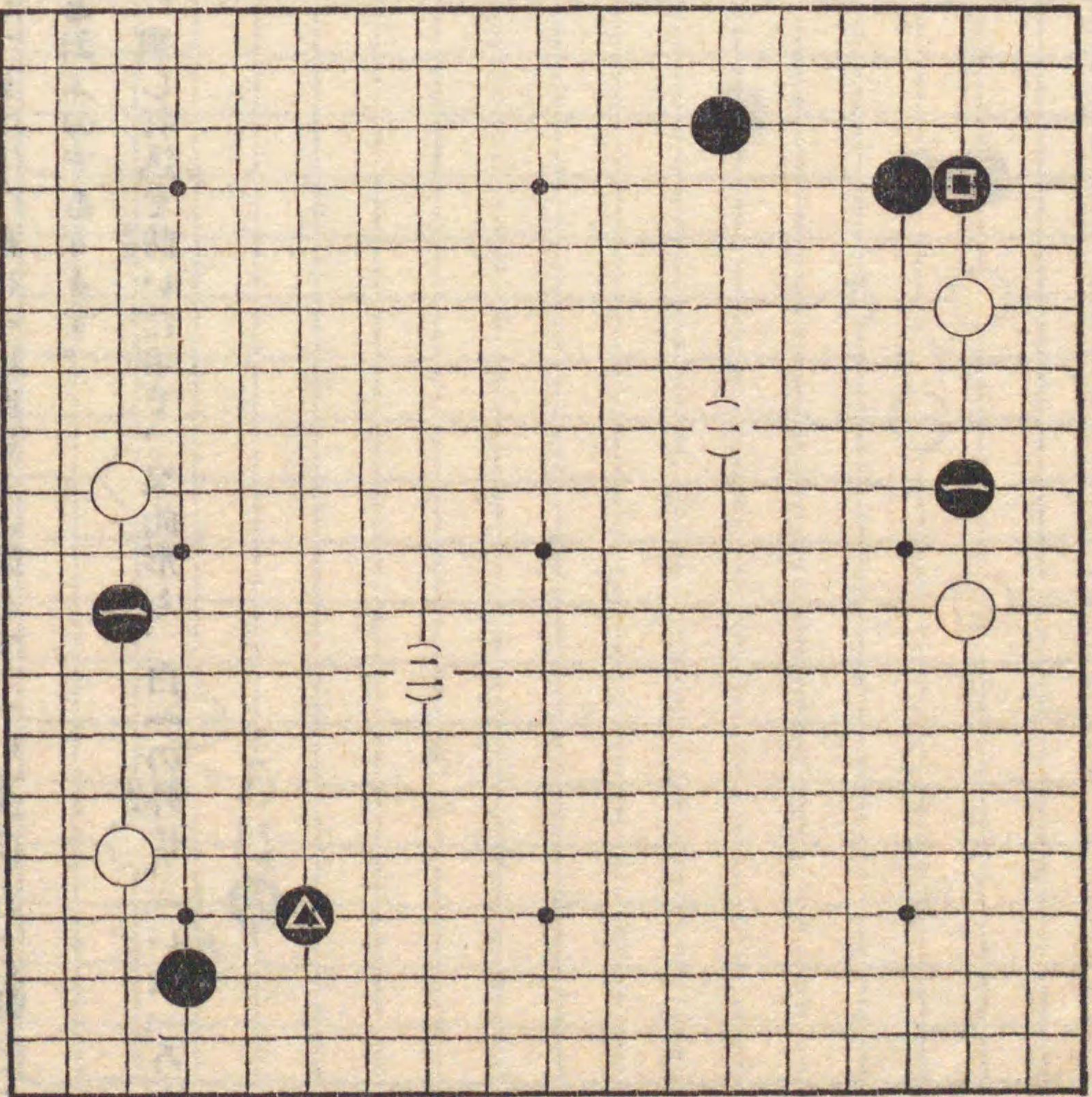
ば宜い譯であります。故に圖について見ても、白は一に應けると限らず、「い」或は「ろ」と打つても之を防ぐ意味で、之も同じく應けと云ふのであります。

(二)は互先の形で、白一は黒回に對し打込を防いだ手で、又此形も、白一の外に、「い」、「ろ」或は「は」と打つ手もあります。

打込

敵地に打込む手に、二つの場合があります、一つは百圖の様に、我優勢を利用して、敵を攻める打込と、今一つは百一圖の様に、單獨敵地に打込んで、之を破る手とあります。

第百圖 (一)は黒●と、隅が堅くなつて居りますから、斯く一に打込んだので、斯く打てば、白を左右に隔て、攻める事が出来ます。(二)も同様でありまして、黒▲があり

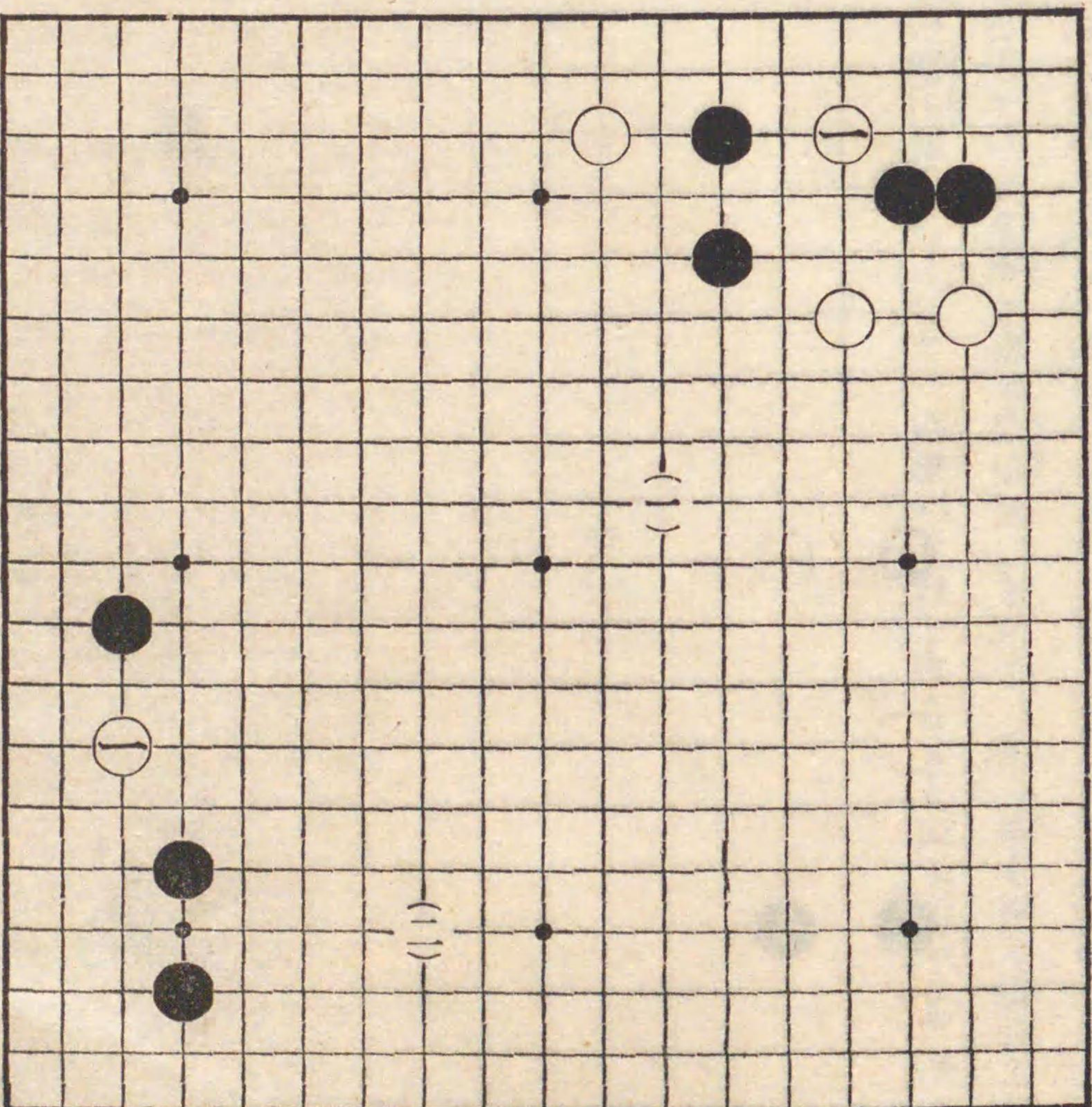


基礎篇第百圖

ますから、黒一に打込んだので、此打込も同じく白を攻める事が出来ます。

第百一圖 (一)、(二)共に斯く黒の堅くなつて居る中へ白一と打込んで、此地を破る方法であります。

で此方法は、前の打込と異ひまして、單に敵地を破る丈の目的でありますから、場合によりては、斯かる意味の打込は大層無理な手となる事もあります。



基礎篇第百一圖

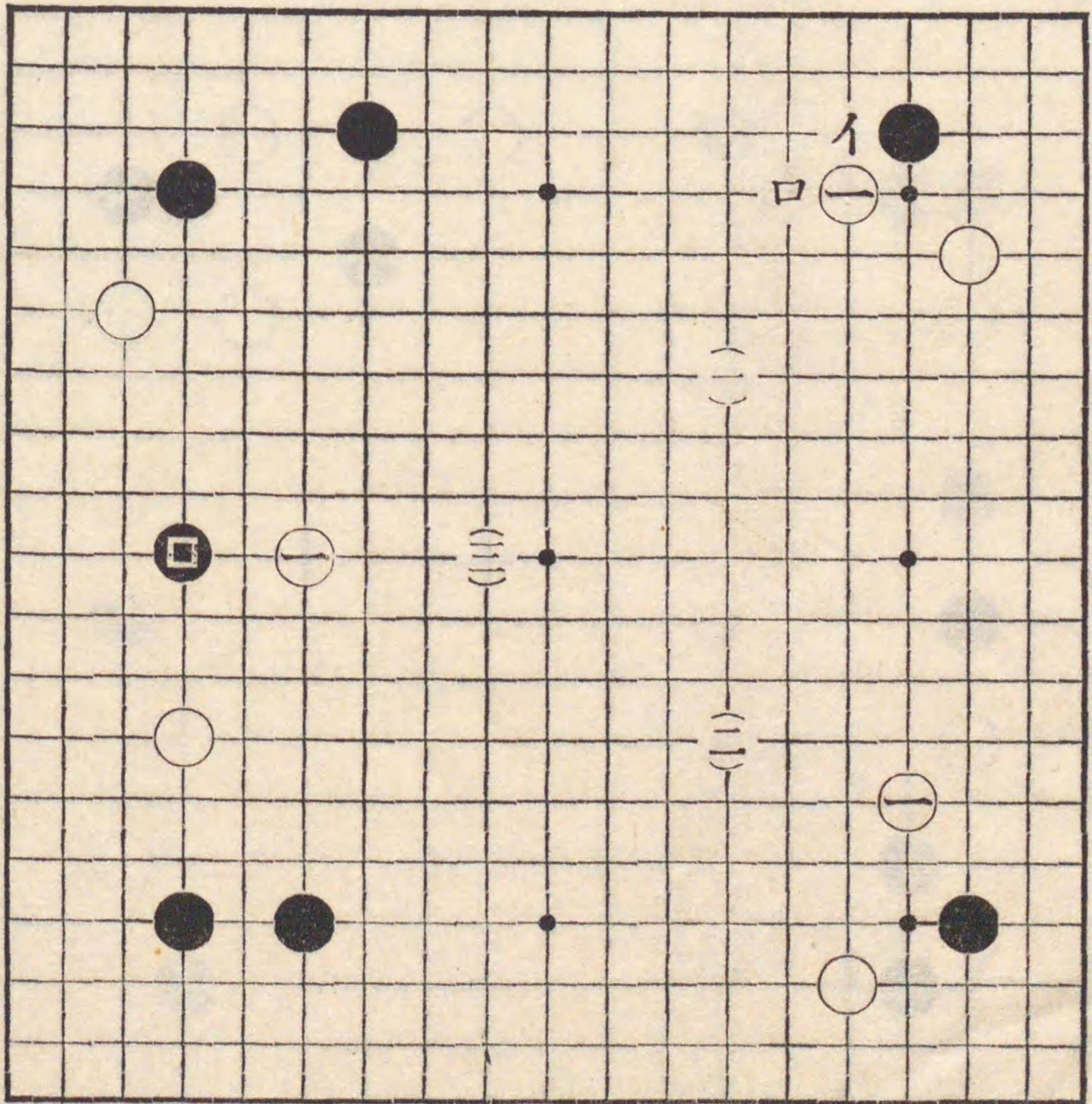
掛る (カケル)

之は前の懸りと異ひまして敵を壓へようとする場合打つ手であります。

第二百二圖 (一)、白一の手を小斜走掛と云ひ、此時黒イに押せば、白ロと行びて中を厚くする手であります。

(二)白一を大斜走掛と云ひます、で斯く掛けられて後の種々なる變化を大斜定石と云つて居ります(定石の部参照)
(三)、圖の様に白一と大きく掛ける手を、「ボウシ」と云

基礎篇第二百二圖



ひ、此手は六目以上の置碁に於ける白の常用手段で、面白い打方であります。で其意味は白としては多數置石のある黒に對し、通常の打方では到底勝を得る望は無いと見て、先づ斯く高く掛けて黒回を攻め、碁を紛はしくし其間に黒の應手如何によつて、臨機的手段を取らうと云ふのであります。(六目以上布石の部参照)

圍碁獨習第四卷終

昭和七年三月廿五日印刷
昭和七年四月一日發行

(圍碁獨習 第四卷)

定價 一圓
郵稅 六錢

著者 鈴木為次郎

東京市麴町區永田町二丁目一番地

發行人 八幡恭助

東京市赤坂區田町一丁目十五番地

印刷所 三京社



發行所

東京市麴町區永田町二丁目一番地

日本棋院

電話銀座七〇五番
振替東京六八五六番

圖書集成醫部全錄



醫部全錄

日本醫學

醫部全錄
卷之八
醫部全錄
卷之八
醫部全錄
卷之八

醫部全錄
卷之八
醫部全錄
卷之八
醫部全錄
卷之八

